

Title	創造としての語ることと聴くことー病いの子どもとともに生きる母の体験をとおしてー
Author(s)	中西, チヨキ
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70707
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学大学院 文学研究科
博士論文 学術
2018年6月15日 提出

創造としての語ることと聴くこと

—病いの子どもとともに生きる母の体験をとおして—

文化形態論専攻
臨床哲学専門分野
中西 チヨキ
学籍番号 20A09811

凡例

・本文および脚注において、テキストからの引用は、以下の略号を記した。

略号は次のとおりである

CN： A・ウィーデンバック、外口玉子・池田明子訳『臨床看護の本質—患者援助の技術』

GK： V・ヴァイツゼッカー、木村敏・濱中淑彦共訳『ゲシュタルトクライス』

I： 柳田邦男『いのち—8人の医師との対話』

IN： H・P・ペプロー『人間関係の看護論』

IAN： P・ベナー、J・ルーベル、稲田八重子・小林富美栄他訳『人間対人間の看護』

Ji： 木村 敏『自己・あいだ・時間』

K： 鷺田清一『「聴く」ことのか—臨床哲学試論』

KA： 西村ユミ『語りかける身体—看護ケアの現象学』

Ky： 神谷美恵子『極限の人—病めるひととともに』

PC： 難波卓志訳『現象学的人間論と看護』

PhP1： M・メルロ＝ポンティ、竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学1』

PhP2： M・メルロ＝ポンティ、竹内芳郎・木田 元・宮本忠雄訳『知覚の現象学2』

PM： M・メルロ＝ポンティ、竹浦静雄・木田 元訳『世界の散文』

Ri： 木村敏『臨床哲学の知—臨床としての精神病理学のために』

SI： M・メルロ＝ポンティ、竹内芳郎訳『シーニュ1』

・インタビューの対話で使用した記号

〈 〉：筆者の強調

()：対話中に差し挟まれた言葉や動作、あるいは思ったこと。

『 』：テキスト内の引用「 」を変更。

[……]：文章を省略する。

[]：筆者の補足

(1－5－6)：1はインタビューの回数、5－6は逐語記録の頁を表す。

N：対話中のNは筆者を指す

目次

序章 語る者と聴く者のあるがままの体験へ	5
1. 語る体験	5
2. 聴く体験	6
3. 語ることと聴くこと——メルロ＝ポンティの言語論、哲学、身体論を参照して	7
4. 研究動機と目的	9
5. 本研究の意義	10
6. 研究方法	11
6.1. 先行研究	11
6.2. インタビューという方法	12
6.2.1. インタビューの具体的な方法	12
6.2.2. わたしの見つめる事象	13
7. わたしにとっての臨床哲学	14
8. 研究フィールドと研究参加者	16
8.1. 研究フィールド	16
8.2. 研究参加者への説明と倫理的配慮	16
9. 本論の構成	17
第一章 看護と語ることと聴くことに向けて	19
1. 病むこと	19
1.1. 苦しみの受け手として	20
1.2. 子どもが病むということ	21
1.3. 転機としての病い	23
1.4. 病いの乗り越え——限界状況における病者の体験から	24
1.4.1. 患者の体験とその意味	25
1.4.2. 限界状況そのものがのり越える力となる	26
2. 出会うこととしての看護	26
2.1. ベナー／ルーベルとウィーデンバックの看護論	27
2.2. 病者と看護者はつねにあたらしい出会いをつくり出す	28
本章のまとめ	29
第二章 語るとはどういうことか	31
1. 苦しみと歓びを語る	31
1.1. 頭がおかしくなる	31
1.2. 入れ代われるもんなら入れ代わってやりたい	33

1.3.	やっと話せるようになった	35
1.4.	子どもの一歩から	36
1.5.	海外旅行行ったら	39
1.6.	生に向かって一日でも	41
2.	話すことで、子どもが病気したことで、聴いてもらうことで	43
2.1.	こう在りたいと願う道	44
2.2.	もっと人生には深いもんがある	45
2.3.	めぐり合いとタイミング	46
2.4.	人にいえるようになった	47
	本章のまとめ	48
第三章	聴くとはどういうことか	50
1.	聴くわたしの体験の意味が明らかになった	50
1.1.	Cさんのつらさを受けとめられなかった	50
1.1.1.	「生きているのはいや」という子どものことばに衝撃を受けたわたし	51
1.1.2.	母のつらさ	52
1.1.3.	過去の記憶と否認	53
1.1.4.	塞がらないこころの傷	54
1.2.	「でもね」によって、Cさんとわたしはそれぞれ自分を知った	55
1.2.1.	「でもね」に驚き、あわてふためく	56
1.2.2.	Cさんの「でもね」は、わたしとCさんのあらたな側面を見せてくれた	57
1.2.3.	くいちがいはくいちがいのままで	59
1.3.	ものすごいもんがくるんじゃないかな	59
1.3.1.	Cさんのことばを聴き取れなかった	60
1.3.2.	過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがある	62
1.3.3.	Cさんのことばを聴いていないわたし	63
2.	Cさんの体験の意味が明らかになった	63
2.1.	あるとき、Cさんのことばが違って見えた	64
2.1.1.	わたしの或る個人的体験	64
2.1.2.	Cさんのことばを一つの体験としてとらえる	66
2.1.3.	体験の統一は、あらたな領域を創りだした	67
2.2.	「どういうことですか」	69
2.2.1.	オヤッという感じ	69
2.2.2.	明らかになった体験	70
2.2.3.	でも、親にしてみたら	72
	本章のまとめ	73

第四章 創造としての語ることと聴くこと	74
1. 語るということ	74
1.1. ことばを創造する	74
1.2. 情動的所作と身ぶり	76
1.2.1. 所作を了解する	76
1.2.2. 情動的所作は思想の源泉である	77
1.3. 表現すること	78
1.3.1. 人間の価値観と生きること	79
1.3.2. 語られないことば	79
2. 聴くということ	81
2.1. 感覚する	82
2.2. 話を導くもの	82
2.3. 聴くわたしを見ていないわたし	84
3. 他者とのかかわりのなかで	85
3.1. Cさんとわたしのかかわり	85
3.2. Cさんと障害者の母のかかわり	87
4. 話すことで聴いてもらうことで	90
4.1. めぐり合いとタイミング	92
5. 木村敏の「あいだ」	93
5.1. 精神医学と現象学	93
5.2. 「あいだ」の構造	94
5.2.1. 「あいだ」の共有	94
5.2.2. 「あいだ」と自己	96
5.3. 木村の「あいだ」と看護	97
本章のまとめ	97
第五章 語ること聴くことと看護	99
1. ウィーデンバックの「患者援助の技術」—要約—	99
1.1. 〈援助へのニード〉	100
1.2. 看護師の思考と感情	100
1.3. 看護の目的と哲学	100
1.4. 援助のプロセス	101
2. 対話と援助のプロセス	102
2.1. Cさんとの対話とわたしの思考・感情	102
2.2. Cさんはなにをいいたいのだろうか—〈援助へのニード〉の明確化	104

2.3.	体験の意味が明らかになった—実施結果の確認	106
2.4.	あらたに拓けた C さんの道	107
2.5.	ウィーデンバックの看護実践の基礎	108
2.6.	再構成—わたしにとっての再構成	108
3.	語ることと聴くことの臨床看護における意味	110
3.1.	C さんの不明確な表現	110
3.2.	問いかけの意味	111
3.3.	体験の意味が明らかになるということ	112
3.4.	「だから」とは	113
3.5.	あらたな道が拓かれるということ	114
4.	語ることと聴くことの看護における位置づけ	116
4.1.	自分の体験の意味が明らかになることの意味と語ることと聴くこと	116
4.2.	J.トラベルビーと H.E.ペプローの看護論	118
4.2.1.	J.トラベルビーの人間対人間の関係—看護の役割を超越する	118
4.2.2.	H.E.ペプローの治療的なもの	119
	本章のまとめ	120
補章	自分自身についての C さんの語り	121
1.	母に対する反発がなくなった	121
1.1.	母を看取る	121
1.2.	お母さんは自分の道を精いっぱい生きた	125
2.	中学時代から小学時代へ	127
2.1.	多感な中学時代	127
2.2.	傷ついたなにげない一言	128
2.3.	真っ暗ななかで	129
3.	戦死したお父さんを悲しませてはいけない	130
4.	一番残念なのは、自分が子どもらしくない子どもだったこと	132
	本章のまとめ	135
	結論	137
	謝辞	139
	引用文献一覧	141

序章 語る者と聴く者のあるがままの体験へ

1 語る体験

語るということについては、忘れられない体験がある。わたしは、学生の臨床実習をどう進めるか困っていた。それについて、わたしはIさんに話しを聴いてもらっていた。つぎに述べるのは、その場面である¹。

I あなたはどうなりたいのですか。

N 実習がスムーズに進むようにしたいです。

I あなたはどうなりたいのですか。

(エッ、どういうこと？ わたしはちゃんと応えているのに、同じ質問をされるとは)。

N 学生の実習がうまくいくようにしたいです。

I どう〈したい〉か、ではなくどう〈なりたい〉のですか。

(わたしは、〈したい〉と〈なりたい〉のちがいがわからなくて、そのちがいを考えていた)。

N 〈らくになりたい〉、(ということばが、とつぜん口を衝いてでた。その瞬間、わたしは〈そうだ、わたしはらくになりたかったんだ〉と思った。涙があふれた。ほっと安堵のため息がでて、こころが晴れた。自由な感じがした。イメージが湧いた。ヘルメットを首まですっぽりかぶり、真っ暗な闇のなか、右頭頂部にぼっと丸い穴が空いていて、そこだけが明るかった)。

後日、臨床実習の場において、実習指導者と学生とのあいだで交わされていることばの意味が、わたしには、〈絵に描いたように鮮やかに生き生きと浮かび上がって見えた〉。それこそが、実習をうまく進められなくて困っているわたしの問題の回答だった。〈したい〉〈なりたい〉について、Iさんとわたしとが交わす実習場面は、今でも目に浮かぶ。

この場面でわたしが不思議に思ったのは、突然、口を衝いてでた「らくになりたい」ということばである。また、〈らくになりたい〉といった瞬間にあふれた涙などの情動の現れである。そしてそのあと、臨床実習の場で、実習指導者と学生とのあいだで交わされていることばの意味が、まるで、〈絵に描いたように鮮やかに浮かび上がって見えた〉ことである。このような現象が起こるそれはなんなのか、わたしはそれが疑問となった。

2 聴く体験

¹ ここでは記憶に残っている部分だけを再構成した。

聴くということを考えるきっかけとなったのは、以下の出来事にあった。Sさん（学生）が担当していた病者が、流産という事態に見まわれた。病者に配慮して、学生の担当を見合わせる事になった。学生には強い衝撃だっただろうことが推測された。担当を見合わせる事になったいきさつを聴いて、Sさんはとまどったような、泣きそうな表情をしていた。わたしは、担当を見合わせる事になったことについてどう思うか、Sさんに問いかけた。

N あなたはどう思うの？（突然、Sさんは泣き出した）。

S 赤ちゃん〔胎児〕かわいそう、お母さん〔妊婦〕楽しみにしてらしたのに、どんなに生み、育てたかっただろう。自分がその立場だったら、と思うと悲しくなってしまう。

もういいです。（そのいい方に、わたしは違和感を持った）。

N エッ、もういいですとは、なにがどういいの？

S 受け持たなくてもいいです。病者にはどうせなにもできないから（強調は筆者）。

N 看護したいという気持ちがあっても、いまは、できないということはあるし、まできないからといって、看護したい気持ちまでを断ち切ることはないのではないかしら。

S 看護したいです（と、強い口調でいった瞬間、Sさんは泣きだした）。

N もういいです、とはどういうことですか。

S いまできる技術がないから、受け持ちたい気持ちを突き放すしかなかったんです。

Sさんはこのときの体験を、実習記録につぎのように記していた。「看護するものとして、どうしても避けられない、病者の生死に遭遇し、このときほど病者の気持ちがずしりとわたしのところにひびいたことはなかった。看護者として、学生としての限界。そこで自分がどうなければならぬか、どう向上していかなければならぬか、はじめて感じる事ができた日となった。今は胸をはって言えます。今は未熟でも、でも、いつの日か病者が生と死のはざままで苦しみ、悩まれているときでも援助できるようになりたいです。なにか援助できるように自分自身勉強し、努力し、いろんな経験をし、その場から逃げることなく、がんばっていきたいです。[……] 今度は、この自分自身の思いと行動を、存在を否定しようとするものを克服していけばいいですね」と。

このことばにわたしは、人間や看護に対するSさんの鋭い洞察力を見た。また、看護実践の場のもつ力、学生のもつ学ぶ力の大きさ深さを知った。それを可能にしたのは「体験を語るという行為、それを聴くという行為のもつ力」だと、わたしには思われた。

また、実習記録に記されたSさんの学びは、その意味をSさんが、自己のものとして獲得したことを表している、ともわたしには捉えられた。

語る・聴くというこの体験は、わたしの目を見開かせた。わたしは、語るということ聴くということに強い関心をもった。このような現象はなにを表わしているのだろうか。これが、わたしの研究の背景を成している。

3 語ることと聴くこと—メルロ=ポンティの言語論、身体論を参照して

〈らくになりたい〉ということばがわたしに現れ、涙や安堵感や自由な感じになり、目の前で交わされていることばの意味が、〈絵に描いたように鮮やかに見えた〉のは、とつぜん〈らくになりたい〉ということばが口を衝いて出たときであった。語るというわたしの行為から現れたこの意味は、語るという行為のどのような働きから現れるのであろうか。このことを検討してみた。

〈らくになりたい〉というわたしのことばは、わたしがそのことばを発したそのとき、わたしは自分が〈らくになりたかった自分〉に気づいた。また、〈らくになりたかったわたし〉をわたしは、自分の身体で感じていた。このことは、わたしが、〈らくになりたいわたし〉を獲得したことを表しているといえるだろう。このことは、また〈らくになりたい〉というわたしの思考を完成したともいえるだろう。しかし、これは、〈らくになりたい〉ということばが現れたあとのことであって、つまり、後付けであって、〈らくになりたい〉という思考を、わたしがあらかじめ想定していたことを意味するものではない。このとき、わたしはメルロ=ポンティのいう「思考は表現をつうじてこそわれわれの思考になる」(PhP1 292)ということばの意味を、身をもって感じ取った気がした。

それにしても、「〈らくになりたい〉ということばが口を衝いて出た」とは、どういうことであらうか。

そのことばが生じるような状況が、事実として、それ以前にあったということを表していると考えられる。つまり、Iさんとわたしの〈したい〉〈なりたい〉のやり取りがあったのである。そのときのわたしは、自分が〈どうなりたいのか〉を考えることに没頭していた。この状況のなかから〈らくになりたい〉ということばが飛び出したのであった。これはなにを意味しているのだろうか。

〈したい〉と〈なりたい〉を考えているあいだ、Iさんの存在は、わたしの意識にはなかった。Iさんは、そのとき黙って、そこに居られた。沈黙のこの場、この時間が、わたしに〈らくになりたい〉ということばを生まれさせたのだとわたしには捉えられた。わたしが自分の考えに専念することを、黙って見ているIさんのこの居方は、わたしの語ろうとする意図を促し、Iさんの居方はわたしに、開かれた経験を感じさせ、そのなかで〈らくになりたい〉自分を見いだすことができたといえるだろう。もっとも、Iさんの問いに答えるべくわたしが〈どうなりたいのか〉に没頭していたことも、Iさんが黙ってそこに居られたことも、〈らくになりたい〉ということばを発したあとに考えたことであって、わたしはその痕

跡を感じただけであった。このような場と時間を、わたしとIさんはともに生き、そのなかから〈らくになりたい〉ということばは生まれのである。もし、そのことばが生まれなかったら、わたしの涙や安堵のため息、自由な感じという情動は現れなかったであろう。また、後日〈実習の場で起こっていることの意味が、鮮やかに生き生きと見える〉こともなかったであろう。

ところで、〈らくになりたい〉ということばと、涙、安堵のため息、自由な感じという情動とのあいだには、ある関連があるとわたしには思える。わたしの経験では、涙がこみあげてくるのは、自分がなにかをいおうとしている瞬間である。哀しいときうれしいとき、いずれの場合でも涙が込み上げてくる。そのようなとき、ことばにならず嗚咽しながらのいい方になってしまう。〈らくになりたい〉ということばに伴う情動的所作は、そのときのわたしには、真のわたしが現れたことを示すものとして捉えられた。情動的所作とことばとの関係について、メルロ＝ポンティは、つぎのように述べている。会話が「ことばだけでなしにアクセントや調子や表情などによっても意味作用をおこなう」のと同じように、「こうした意味の補足」は「もはや話者の思想ではなくてその思想の源泉、彼の根本的な存在仕方を開示する」(PhP1 251)と。わたしの体験にあてはめてみると、〈会話がことばだけでなく、わたしの涙や安堵のため息などの所作も、意味を表し、同時に、わたしの〈らくになりたい〉ということばの意味を補い明らかにするということである。涙やため息、自由な感じは、〈らくになりたい〉ということばだけでは表現しきれないわたしのより強く深い思いを補足してくれる、そのような意味を表していると、わたしには考えられた。

わたしの情動的所作は、また後日、実習の場で見た意味とも関連していると考えられる。〈目の前で交わされていることばの意味が、絵に描いたように鮮やかに見えた〉それは、涙や安心感、自由な感じのなかから、つまり、「開かれた経験」がわたしに与えてくれたのだとわたしにはとらえた。わたしの涙や安心感や、自由な感じは実習の場を包みこみ、その場の雰囲気を活気づけているのを感じた。

わたしが感じる自由は、あとから思ったことであるが、Iさんとわたしとのあいだには、生きた関係が確立されていた²と考えられた。そのようななかでは、「言語はもはや道具ではなく、もはや手段ではなくて、それは内部存在の、またわれわれを世界およびわれわれの同胞と結びつける心的きずなの、一つの表出、一つの啓示となる」(PhP1 321)、とメルロ＝ポンティはいう。グループカウンセリングは、Iさんという一人の人とわたしとを結びつけた。カウンセリンググループは、一つの世界であった。さらにそこに参加する人々を結びつける場であった。わたしが語ることに聴くことに関心をもったのは、先に述べたわたしの体験から生じたものであった。その体験とは、〈らくになりたい〉という意味が発生状態で現れたことであった。また、目の前で起こっていることの意味が〈生き生きと鮮やかに見えた〉ことであった。この体験は、わたしに驚きと不思議を感じさせた。そして、語るということ

² わたしはそれ以後3年ほど、そのグループに参加しつづけた。そこは、語ることに聴くことを実践する場であった。この体験はその後、看護学生の体験を聴くことに、大きく貢献した。

のもつ意味や力を教えてくれた。語ること・聴くことによって現れる意味や働きは、いま、語っている人に可能なかぎり接近したいと思うわたしに、いいしれない魅力をもたせた。

そもそも語ること聴くことを採りあげたのは、語る人のあるがままの姿に、わたしが可能な限り接近することにあつた。そのためには、わたしは、〈事象そのものへ〉ということばのもつ意味を理解することが必要だと考えた。「事象そのものへとたち帰るとは、認識がいつもそれについて語っているあの認識以前の世界へたち帰ること」(PhP1 4)であつた。Iさんの〈どうなりたいのか〉ということばそのものの意味を正確に受けとめられず、思い込みで応えていたわたしは、「なりたい」という事象そのものに立ち帰り、〈なりたい〉という事象とは関係ない、わたしの先入観であつた〈したい〉ということばを排除しなければならなかつた。

4 研究動機と目的

いま述べた語る体験、聴く体験が、わたしの研究動機となつた。具体的にはつぎのようになる。わたしが語っているときに、わたしに現れたのは〈らくになりたい〉ということばであつた。その瞬間に現れたのは、情動としての涙や安堵の溜息であつた。こころが晴れ、自由な感じがした。そして後日、実習現場で、今「そこで交わされている出来事(看護過程)の意味が、目に見えるように鮮やかに見えた」ことであつた。

このことは、語るということばは、「他人のために表現するのではなく、自分の志向しているものをみずから知るためにも表現する」³ということばを表している。

聴くことについては、病者の流産〔胎児の死〕という事態を、Sさんはどのように受けとめていたか。それを聴くわたしの体験が、聴くということに関心を向けるよう動機づけた。Sさんは、「看護者として学生としての限界」を感じとつた。また、「いつの日か病者さんが生死のはざままで苦しみ悩まれているとき、援助できるようになりたい」という自分を見いだした。聴くわたしだけでなく、なによりもSさん自身に、そして病者に向き合うSさんの真摯な態度は、わたしの人間としての在り方をつよく揺さぶつた。一年次の、しかも短い期間のなかで人は、人間や看護についてかくも深く学ぶのかと。

語ること聴くことのなかからわたしに現れたすばらしい現象は、語る者と聴く者のあいだに働くある力があると考えられた。語るということ聴くということが、このような働きをし力をもつとすれば、それはわたしたちの日々の生活を豊かにする重要な鍵となる。ここでは、語るということ聴くということとはどういうことかを、インタビューに答えてくれた病いの子どもとともに生きる母Cさんのことばをとおして考える。

5 本研究の意義

³ M.メルロ=ポンティ竹内芳郎監訳『シーニュ 1』「II 言語の現象学について」みすず書房、1969,p.142。

本稿では、語ること聴くこととはどういうことかを、研究参加者が語ることばと、それを聴くわたしの体験をとおして考えてきた。その意義はどこにあるのだろうか。

看護においては、語ることと聴くことの「両者」を本格的に研究した例は見あたらない。他の分野では、アーサー・W・クラインマン（『病い⁴の語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、1996,p.67）は、「語らいの経験を [……] 個人的な語りとして整理する。その病者が語り、重要な他者が語り直す物語であり患うことに特徴的なことや、その長期にわたる経過を首尾一貫したものにする」と、指摘する。アーサー・フランク（『傷ついた物語の語り手 身体・病い・倫理』ゆみる出版、2002,p.20）は、「病む人々があたらしい海図を描き、自分と世界との関係にあたらしい見方を打ち立てるために、みずからの物語を語ることを必要とする。そうした物語が身体を通して形を現わす」と述べている。クラインマンとフランクは、いずれも、語ることが主題であって、聴くことは研究の対象でない。鷺田清一（『聴くことのか—臨床哲学試論—』阪急コミュニケーションズ、1999,p.11）によれば、「聴くことが、ことばを受けとめることが、他者の自己理解の場を拓くということであろう。じっと聴くこと、そのことのかを感じる。[……]、わたしがここで考えてみたいこと、それが〈聴く〉という行為であり、そしてその力である。[……]、〈聴く〉という、他者のことばを受けとめるという行為、受けとめる行為のもつ意味である」。佐藤泰子（『苦しみと緩和の臨床人間学—聴くこと語ることの本当の意味』晃洋書房、2011,p.1）は、語ること聴くことの両者について研究している。「人はなぜ苦しいのか、みずから苦しみを和らげていく手とはなにでしょうか。苦しんでいる人を支えるにはどのように寄り添ったらいいのか」を問う。そして「聴く」ことにどのような意味があるのか、「語る」ことは話し手をどのような変化をもたらすのかに答える。

語ることに、わたしは、なにを語るかだけではなく、「どのように」語るか、その「語り方」にも注目してきた。そして聴くことにおいても、「なに」を聴くかだけではなく、「どのように」聴くかにも。このような研究は少なく、そこに本研究の独自性があり、意義があると思う。

このようなことばのもつ意味とその語り方に現れてくるその意味は、語るもの聴くものにとってあたらしい意味であり、おのずからあらたに現れた生きたことば⁵だと、わたしには考えられた。このようなことばをわたしは〈創造〉⁶としてとらえた。語る行為が、あらたな意味やことばを創造とするという研究は、あまり見かけない。そこに本研究の固有性があり、その意味で意義があると考えられる。

語る人には、その人特有の情動や所作がある。その意味を読みとることこそが、語る人の

⁴ 病いと病：本論の引用文中の「病い」以外、〈病〉とする。

⁵ 言葉とことば：本論の引用文中の「言葉」以外、〈ことば〉とする

⁶ 語ることをとおしてあらたにことばが創られることを、ことばの〈創造〉として捉えるというとき、このことばは、わたしたちが日常的に伝達手段として使っていることばではない。自分の体験の意味を、どうにも思うようにいい表せない状況のなかで、語りつつあることばのなかからあらた発生することばをいう（PhP1 321）。「ことばの創造」については、その詳細を「第4章 創造としての語ることと聴くこと」で述べる。

ありのままに接近する鍵になる、とわたしに思っている。聴くことにおいて、このような視点をもつ研究は、「ことばのテクスチャ（ことばが冷たい、硬いなど）という主題も、ひとつの核としている」とする、鷺田（K107）以外には見かけない。そのような意味で、本研究には、一つの意義があるといえるだろう。

問いかけることは、わたし自身をあらわにすることであり、わたしがわたしを知ることであった。聴くことについて、聴く自分を主題とする研究は、あまり見たことがなく、それも一つの独自性といえるだろう。

看護は本来、生命力の消耗を最小にし、健康な人の生命力を高めるために、自然の力を〈適切〉に活用すること⁷であった。その実践において、患者と看護者の力が、このような語る行為、聴く行為へ振り向けられたら、患者は、自分の体験の意味をおのずから見いだすことになり、みずからあらたな世界を拓くことになると考えられる。それは、患者と看護者両方にとって有意義な活動になるのではないだろうか。

6 研究方法

6.1 先行研究

語る体験では、わたしが自分の体験を語っているうちに「らくになりたい」ということばが飛び出した。そのあと、「いまそこで交わされていることの意味が、絵に描いたように鮮やかに見えた」。聴く体験では、学生は、〈病者の生死〉の問題を「看護者として、学生としてしての限界」という視点から考えた。また「生死のはざままで苦しみ悩む人から逃げることなく援助できるようになりたい」、という今後の自分の将来像を述べた。語るということ聴くということから、このような現象が生まれることにわたしは驚嘆した。語ること聴くことのなかでなにが起こっているのか、それを明らかにするためにどのような研究方法があるのか。先行研究を見てみることから始める。

西村ユミは、植物状態病者⁸と看護師とのはっきりとは見てとれない関係を主題とした研究を行った（『語りかける身体—看護ケアの現象学』ゆみる出版、KA2001）。その関係をみていくために、西村は現象学に注目した。「現象学では、知覚された経験を、それ自体として存在するものではなく、思ったり感じたりする人間の側の志向との関係の中で現象することとして、とえる」（KA50）。また、「個人の経験を開示する方法として、また認識以前の世界経験を開示する方法としても「対話」「語り」が反映されるインタビューを採用した

⁷ ナイチンゲールの看護のついては、「第1章 語ること聴くことに向けて」で述べる。

⁸ 「植物状態とは一見意識が清明であるように開眼するが、外的刺激に対する反応、あるいは、認識などの精神活動は認められず、外界とのコミュニケーションを図ることができない状態を総称する」（KA15）。

(KA 50)。この対話を、看護師の視線から細やかに記述することを試みる」(KA 6)という。榊原哲也(「現象学的研究における〈方法〉を問う」『看護研究』医学書院、2011,p.15)は、現象学的看護研究とその方法について述べている。「現象学的」看護研究は、自然科学的な見方をカッコに入れ、「生きられた体験」に立ち返りながらも、見つめる〈事象〉によって方法は異なる。「方法」はいわば、〈事象〉そのものの方から決まってくる、と。村上靖彦(『摘便とお花見—看護の語りの現象学』医学書院、2013,p.344)は、「インタビューや参与観察のデータに、いままで知らなかった現象を探し出すこと」が現象学の目的だという。また、「インタビューや参与観察の一つひとつのデータが持つ個別の意味を探る」には、現象学が有効である、と。浜渦辰二(「ナラティブとパースペクティブ」、木村敏・坂部恵監修『〈かたり〉と〈作り〉臨床哲学の諸相』河合文化研究所、2009,p.115)は、語り手が語る時のパースペクティブと、聞き手が聴く時のパースペクティブにずれがありうる。その「ずれ」を「ずれ」としてとらえるためには、「パースペクティブを交換する能力」が必要である、という。

6. 2 インタビューという方法

研究方法は、インタビューについての、西村の「個人の経験を開示する方法として、認識以前の世界経験を開示する方法としても〈対話〉〈語り〉が反映されるインタビューを採用した」という考え方を参考にした。研究参加者には、日ごろ感じたり思ったりされていることを、いまの関心にしたがって自由に話してもらいたかった。そこで、Cさんが日ごろなにを感じ、思われているのか、「なんでもいいからはなしてください」とお願いした。構成された質問では、語ること聴くことそのものから現れる鮮烈なことばやあらたな世界が現れるということは、ありえない。わたしとIさん、Sさんとわたしのあいだで生じる固有のことばや所作、それが現れる文脈も含めて、可能なかぎりそのままの姿を表現し記述することを求めようとすると、方法はおのずからインタビューということになった。

6. 2. 1 インタビューの具体的な方法

インタビューは、質問項目を設定しない非構成的な方法を使った。インタビューでは、研究参加者Cさんの、いまの関心にしたがって、自由に話してもらいたかった。そこで、はじめにお願いしたのは、「なんでもいいので、話をきかせてください」であった。なにを質問するか決めなくても、語っているうちに語る人は自分の関心にそって、自然に話が向かうのを、わたしはよく体験していたからである。語る人の関心に任せる場合、話がより拡がったり深まったりすることもある。語る人の関心は、語る者にとっていま、それが重要だとみなされているのではないだろうか。聴く者は、その重要性をそのときではなく、後になって

気づくこともある。なにごとかを語ろうとする場合、なにを語るかは、語る者自身にもわかっていないこともあり、話しているうちに、その人の関心にそっておのずと進められることになる。

インタビュアーの態度は、基本的には、語る者の〈ことばを受け止めること〉、〈聴く者がありのままで、見せかけがなく、その瞬間に流れる感情や態度が率直であること〉である。また、語る人のことばや声の調子や所作の些細な変化も見逃さない、聴く者の身体感覚の敏感さが求められる。このことは語る者は、聴くもののあり方に大きく左右されるということである。したがって、聴く者は、語っている人のことばを聴いたりしぐさを見たりしている、その自分にも目を向けることが不可欠となる。

6. 2. 2 わたしの見つめる事象

インタビューで語られた C さんの体験を、わたしは語ることと聴くことを分けて検討した。語ること聴くことは、実際には一体のものであり、それを分けて見るのは無理がある。しかし、語ること聴くことのそれぞれの働きとその意味を見ていくために、便宜上分けて検討した。

C さんが語ってくれた体験のなかでわたしが採りあげたのは、C さん自身の強い思いが、際立っている感じられた場面である。たとえば、「頭がおかしくなりそう」「なんとかしてでも生きのびる」、くり返される〈まえはでもいまは〉など。また意味の理解しがたいいい方や沈黙、強い違和感を感じた場面などである。そのような場面は、語る人にとっての深い意味や意図が、わたしに感じられた。声の調子や泣くしぐさなどの情動的身ぶりは、ことば以上に意味を表し、つねにわたしを惹きつける。その場面を見ていくと、たとえば、主題として取りあげた「頭がおかしくなりそう」ということばの意味が明らかになる。すると、そこに、「頭がおかしくなりそう」ということばの背後にある一つの重要な意味が浮かび上がってくる。他の主題もよく見ていくと同様の意味が現れてくる。いくつかの主題の間には、共通の意味が見えてくる。このような作業をインタビューの場面全体に広げてみると、C さんという病いの子どもとともに生きる一人の人間像が浮かび上がってくるようであった。インタビューでなにをいいたかったのかが、そこに現れるようにわたしには思えた。これが、わたしの一つの観方である。

それを表してくれたのはことば、語るという行為であった。C さんが語りつつあるそのなかであらたに現れる事象、それがどのように現れるか、それを見いだすことが語るということの意味だと考えられた。したがって、いま述べた語る内容—病いの子どもとともに生きる母の体験だけでなく、それらが現れる現れ方を、一方では見ていくことになる。つまり、語るという体験とは、どのようなことか、がもう一つの主題であり、それが本論のテーマである。それを、わたしはメルロ=ポンティの〈ことば〉についての考え方を参照して考えてみ

る。

Cさんの体験を〈聴く〉ということを検討するとき、わたしは自分が気になったことばや場面を採り上げた。「Cさんのことばを受けとめられなかった」場面、Cさんが「でも」と反論した場面、わたしが「Cさんを混乱させた」場面など。

このようにことばやしぐさの一つひとつを検討していくうちに、それらをつなぐ一つの流れが背景を成していることを、わたしは感じとった。

それは、子どものいう「みな負担になって生きてるのはいや」ということばに、〈つらかった〉というCさんのことばに、わたしが衝撃を受け、Cさんの〈つらさ〉を、わたしは〈受けとめることができなかった〉。また、わたしが「人間の本質を学ぶというのは、つらいことや苦しみのなかにある」といったとき、Cさんは「でもね」といった。そしてまた、Cさんのいいたいことを「わたしが聴けなかった」場面であった。そのときのわたしのなかには、衝撃が走っていた。Cさんのいいたいことを聴けなかったその自分を、無意識に避けようとするわたしの態度が、背景にあったことにわたしは気づいた。そして、また、それは、Cさんがいま、どのような心的状況に在るかを、まったく無視していたことによることでもあった。このような自分の内面を発見したことは、わたし自身を明らかにした。それはまた、そのわたしを、あらためて見直す体験へと導いた。つまり、聴くわたしもこのとき、自分という一人の人間をあらたに発見したのである。

7 わたしにとっての臨床哲学

語るということとはどういうことか、聴くということとはどういうことか。それを明らかにすることが、本論の目的であった。語るということについては、わたしは、「なに」を語るかだけでなく、なにを「どのように語るか」にも強い関心をもって臨んだ。つまり、語る内容だけでなく、体験をどのように語るか、その語り方にも注目するということである。ことばの意味もさることながら、ことばにともなう情動やことばのイントネーションや声の調子、身体で表す所作そのものに現れる意味を重視する。なぜなら、情動やことばのイントネーションや声の調子、身体で表す所作そのものに現れる意味は、ことば以上に、その重さや深さが現れていると思えるからである。聴くということの働きにおいても、聴く内容と同時に、わたしは、わたしの聴き方に注目する。それは、わたしの聴き方が、語る人の体験のあるがままに、より接近できると思えるからである。ことばだけでなく、語り方や聴き方に耳を澄ませば、生きたことばや所作が現れ、語る人だけでなく、聴くわたしをも映し出す。それはまた、語る人だけでなく、わたし自身をも変えてしまう。その事実にはわたしは驚く。語ること聴くことのこのような働きを見いだそうとすることを、わたしはわたしにとっての臨床哲学の実践ではないかと思えている。

わたしにとって臨床とは、健康な人や病者、あるいは学生がいる場であり、看護あるいは看護教育の実践の場である。あるいは、インタビューに応じて語ってくれるCさんと、聴

くわたしのあいだに生まれることばとその意味を見だそうとすること自体も、臨床哲学の場といえるだろう。

鷺田は、「臨床ということで、わたしは哲学にとっての〈場所〉を考えている」(K 51)という。鷺田によれば、哲学にとっての〈場所〉は、「主体が他者とおなじ現在においてその他者とともに居合わせていて、その関係から一時的にもせよ離脱することなく、そこで思考しつづけることを要求されるような、そういう場所のこと」である(K 55-56)。とすれば、わたしが看護や看護教育の場で、病者や学生とわたしが、病いや看護について、ともに考えつづけていたその場所は、哲学にとっての〈場所〉ということになるだろう。そこから、「病者の生死に遭遇し、[……] 生死のはざままで苦しみ悩まれているとき、その場から逃げることなく援助できるようにがんばっていきたい」という、現在のもつ意味を洞察し、そこから未来に向かうことばが学生に生まれたのであった。そのことばに、わたしは、学生の病者と看護に向き合う態度の真摯さに、わたしが揺さぶられ、わたし自身が学んだ。このような体験をする看護や看護教育の場では、病者さんや学生のことばを聴くことの重要性をいつも実感させられる。このことは、病者や学生が、自分の体験をみずから語り、それを看護者が聴く—受けとめる—ことが、看護や看護教育そのものだという考えを、わたしにもたせるのである。

木村(『臨床哲学の知—臨床としての精神病理学のために』(2008))も、現場感覚に密着するという。しかし、木村にとっては、臨床精神科医の仕事そのものが、「臨床哲学」だという。臨床哲学では、妄想、幻覚症状の精神病理ではなく、その背景にあつて、そういった症状を生み出している自己存在の病理について考えたい、という。この「自己」ということをいうとき、「わたしたちは、自分のなかにあるなまなましく生き生きとしたなにかを、[……] そういう活動中のなにかを感じ取っています」(RI 24)という。〈自分のなかにあるなまなましく生き生きとしたなにか〉という「なにか」とは、わたし自身が体験した、学生の「病者の生死に遭遇し、[……] 生死のはざままで苦しみ悩まれているとき、その場から逃げることなく援助できるようにがんばっていきたい」ということばのことではないかと思われる。それは、人間のこころの奥に眠っていたものが目覚めて、いま活動し始めたような躍動感をもって現れでてきたのであった。このことばとその語り方に、わたしは驚嘆した。Sさんの病者や看護への深い洞察力と、人間への熱い思いが、わたしに直に伝わってきた。人間に備わっているはかり知れない能力を考えさせる体験として、わたし自身が学んだ体験であった。病者と学生、スタッフとわたしが、ある体験について語りあう〈なか〉からこのようなことが起こる、そこに働いている語りことばと聴くことの働きを、わたしは一つの哲学ではないかと考えている。

わたしにとっての臨床哲学とは、わたし自身の語る体験にしる、学生のことばを聴くわたしの体験にしる、そこに現れるあらたなことばやその意味は、語るものと聴くものの相互性において、あらたな意味やことばが現れる場だといえるだろう。

8 研究フィールドと研究参加者

8. 1 研究フィールド

研究フィールドは N 市に設定した。N 市の保険福祉部、健康増進課長に研究協力を依頼した。或る大学の大学院応用人間科学研究科長から N 市の保険福祉部、健康増進課長への依頼書を送付した。市から大学あてに承諾の文書をいただいた。

8. 2 研究参加者への説明と倫理的配慮

研究目的は博士論文作成であり、研究方法はインタビューであること、プライバシー・人権の保護、協力の自由、研究の参加の撤回や同意を断っても不利益にならないこと、語られた内容をまとめた研究成果が公表されることについて参加者に説明し、同意を得た。

研究参加者候補については、N 市が主催している「健康教育」を、担当の保健師から紹介していただいた。研究参加者には訪問時に筆者が直接依頼し、快諾を得た。

8. 3 研究参加者のプロフィール

61 歳の女性、C さんである。C さんは保育所で調理師として働き、定年で退職している。夫（70 歳）と二人暮らしである。3 人の子どもがあり、長女と長男次男は、それぞれ結婚して別に暮らしている。長女（40 歳）は、夫と子ども二人（中学生と高校生）と暮らしている。長女は、重篤な病いに罹っている。手術しか治療がなく、その成功確率は 40%で低く、再発の可能性もある。呼吸困難があり 24 時間酸素吸入をしている。それでもちょっとでも早く歩くと苦しくなる。外出時は携帯用ボンベを使う。

家事は夫や子どもに手伝ってもらっている。C さんは、長女が職業技術専門学校に通うとき、送り迎えをしている。インタビューを開始したときは、長女の発病から 8 ヶ月経っていた。この子どもたちは家事を助けている。自転車で、電車の駅までの送り迎えもしている。

C さんは、生き生き教室で、子どもの母の会への参加や折り紙、水泳やボランティアなど活発に活動している。

9 本論の構成

序章では導入として、わたしの語る体験、聴く体験を記述した。その体験から現れたことばやしぐさは、わたしを驚かし感嘆させた。この体験が研究の動機となり、その意味を明らかにすることが研究目的となった。またこの体験は、インタビューという研究方法を示唆してくれた。インタビューでの研究参加者の語られた体験、それを聴いたわたしの体験は、メルロ＝ポンティのことばをとおして、その意味を検討した。

第一章では、語ること聴くことの話に入る前に、「病むこと」について検討した。「病い」を「転機」ととらえるヴァイツゼッカーと、「限界状況そのものが病いをのりこえる力になる」という神谷美恵子の考え方をとおして検討する⁹。また、ベナー／ルーベルやウィーデンバックの看護論を参照しながら、わたしの考える「出会いとしての看護」を述べる。

第二章では、病いの子どもとともに生きる C さんのことばをとおして、語るとはどういうことか検討する。すなわち、C さんが語る話の内容もさることながら、その話を「どのような仕方で表現するのか」を追及する。つまり、ことばにともなう情動や身体表現としての所作そのものの意味を問う。また、インタビューの最後に語ってくれた、話すこと、聴いてもらうこと、子どもが病気になることによって、「自分がこうありたいと願う道が方向づけられた」という C さんのことばの意味を問う。

第三章では、語られた C さんのことばを、わたしはどのように聴いたかを問題とする。その際、わたし自身が気がかりになった場面を取りあげた。たとえば、C さんのことばを見たり聴いたりしたわたしの知覚体験や、わたしのことばに C さんが「でもね」と反論された場面である。また、あるとき、C さんのことばがわたしに違って見えた体験や、C さんの情動や所作そのものもつ意味を重視する聴き方についてである。それらの検討は、わたしのなかに潜在していたわたし自身があらわになり、聴くわたしの変容を否定なしに促した。

第四章では、語ること聴くことを創造としてとらえた。それについて考察した。C さんの「頭がおかしくなりそう」「神も仏もあるもんか」「親にしてみれば、いまのいま子どものやろうとしていることに手助けしてあげなければならない」「自分がこうありたいと願う道が方向づけられた」などのことばは、C さんが自分の体験を語るなかでおのずから現れたあらたなことばだ、とわたしには考えられた。そしてそれは、語るという行為自体が、その力をもつのだと思えた。それをわたしは「創造」としてとらえた。その意味を、「能力としてのことば」「ことばがのり越える」「語るものと聴くもの(あいだ)」「もっと先へ行こうとする運動」など、キーワードを手がかりに考えた。

第五章では語ること聴くことと看護がどのようにかわるのか検討する。それについて

⁹ わたしが、病いを「転機」としてとらえたり、「病いのり越え」という考え方をもちテキストを採りあげたのには、理由がある。すでに、研究参加者の紹介で述べたように、C さんの子どもの病いは、重篤であった。手術しか治療法はないが、その成功率は 40% で再発する可能性もある。このような病状のなかにいる、子どもと C さんの体験を理解するのに適した文献として、わたしはヴァイツゼッカーの「転機」と、神谷美恵子の「病いのり越え」という考え方を見いだした。

は、C さんのことばをウィーデンバックの「患者援助を構成する 3 つの要素—〈援助へのニード〉の明確化とその実施および確認—」と関連づけて考える試みをした。その際、「〈援助へのニード〉の明確化、実施、確認」という過程で、C さんが自分の体験を語り、それをどんな些細なことばや身ぶりも見逃さずに聴き取る、その看護者の聴き方そのものが、看護が成り立つ条件であった。しかも、病者の語ることばを、病者にあらたに現れた「創造」としてのことばとしてとらえることができれば、それは看護の原則の一つである病者の「自立」を促すことにつながる、とわたしには考えられた。個々の病者は、それぞれが、病いの状況に合わせた自分の生活や生き方をあらたに創り上げていくこと求められるのであるから。いいかえれば病者は、自分のあらたな生活や生き方を、そのときどきのことばや動作をつうじて獲得してゆくのであるのだから。とすれば、看護におけることばや身ぶりそのものもつ創造する力は、病むことや看護することそのものからおのずと現れるのだといえるだろう。

補章では、C さん自身についての C さんの語りをそのまま収めるよう努めた。C さんは子どもの病いに関する自分の体験を語る一方で、自分自身に起こった出来事についても語ってくれた。幼児期や学童期、青年期や結婚後の子育てや自分の生き方などを。C さんが自分自身の体験を語られたのは、C さんの話を聴いて、わたしが感じたことを口にしたときであった。「感性が豊かでいらっしゃる」とか。あるいは、「今日で終わりなんですけど、なにか感じられたこととかありませんか、とわたしが語りかけたときであった。これらのことばは、病いの子どもとともに生きる母 C さんの体験を語られるとき、その背後でベースのように響いてくるようであった。病む子について C さんが語るときわたしは、学童期からの C さん自身の過去の体験と切り離して聴くことはできない。

C さんが語ってくれた自分自身のことばは、それについてわたしが「なにかをいうことなどなにもない」と思えた。C さんのことばそのものがものをいうのだから。

第一章 看護と語ることと聴くことに向けて

看護は、まず病者¹⁰の体験を聴く（聞く）ことから始まる。病者が身体全体で語る病い¹¹の体験はそれだけでその場を圧倒する。そこに現れているものは、病者にとって看護者¹²にとってなにを意味するのであろうか。病者がいまこの場で身体全体で語ろうとしていること、なにを感じ、どのようなことを考えているのか、どんなことであれ、それが身体で、ことばで語られる体験は、いつでもわたしの心を突き動かす。ある場面で病者がなにごとか自分の体験を語っているときに、病者にいまなにかが起こった、と感じる瞬間がある。それは病者をいきいきとさせ、病者にある変化をもたらす。このような体験はわたしに語ることの不思議を感じさせる。語ることのなにか、聴くことのなにか、あるいは病いのなにかがそのような変化を引き起こすのであろうか。それがわたしの最初の疑問であった。同時に、看護において病者が病いの体験を語ることと、看護者がそれを聴くことが、看護のあり方にかかわると考えられた。このような経験が、看護の実践の場でのわたしの関心を、つねにいま向き合っている病者と、病者のことばを聴いている看護者としての自分自身に向けさせた。

本章では、「看護における語ることと聴くこと」に向けて、病者の変容にかかわると思われる病いと看護、および語ることと聴くことについて検討する。

構成は以下のとおりである。

- 1 病むこと
- 2 出会うこととしての看護

1 病むこと

病むとはどういう事態か、病者とはどのような状況におかれているのか。それをヴァイツゼッカー¹³の転機と神谷¹⁴の乗り越えに依拠して述べる。それを通して、病むことによって変容するとはどういうことかを検討する。

¹⁰ 看護者は健康な人、病者やその家族、妊産婦・褥婦にかかわる。この全者を含めて病者と呼ぶ。引用テキストで患者とされている場合は患者とする。

¹¹ アーサー・クラインマンは、疾患と区別した病いを、さらに病気と区別する。人々に不幸をもたらす社会的な諸力の反映した人類学的な見方としての病気を病いから区別する。アーサー・クラインマン 江口重幸『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、(1996,p.4)。ここでは、病気と病いを状況に応じて用いる。

¹² 看護職は、看護師だけでなく保健師、助産師も含む。看護者とはこの看護職全体をいう。引用テキストで看護師とされている場合は看護師とする。

¹³ ヴァイツゼッカーは神経生理学者・神経内科医である。医学的人間学、疾病学総論の構築を目指す。『ゲシュタルトクライス』の他に、『病因論研究』（木村敏・大原貞訳）などがある。

¹⁴ 神谷美恵子は、精神科医で、『極限の人—病めるひとともに』の他に、ミシェル・フーコー『臨床医学の誕生』みすず書房、(1976)の翻訳などがある。癩（ハンセン病）療養所で診察にあたっていた。

1. 1 苦しみの受け手として

病いの体験は程度の差はあれ苦しみと悲しみに彩られ、瞬間的にであっても、死と重ね合わせて意識される。一方、病いは、わたしたちもよくいうように病者やその家族に〈悲しみや苦しみが教えてくれた。病気によって変わった〉と語らせる体験でもある。風邪や腹痛でも少しひどければ、重篤な病気ではないかと不安になる。それが現実となれば、突然、病いは目の前に壁のように立ちはだかり、わたしたちを愕然とさせる。先程までの光のなかにあった日常は消える。いままで当たり前にあった命が風に煽られるように心もとない。耐えがたい痛みや身体の障害、がんや余命の宣告は、絶望と混乱で家族ともども生活は一変する。病者や家族の危機である。

病者 Patient とは、「1. 耐える者。辛抱強くたえている人。とくに身体の病いに苦しむ人。2. 病気やけがを治すために医療処置を受けている人。医療者が診ている人。3. 誰かの監督、ケア、矯正に服している人。4. 外の動作主 external agent から発した《印象 impression》を受けとめる者、受け手」¹⁵ である。

病者 Patient が病いに苦しみ、苦しみに辛抱強く耐えることは、ただ身体の痛みや障害などの身体の苦痛だけではない。生命の危機はつねに心のどこかに潜み脅威となる。また身体機能が障碍され、いままで当たり前に来てきた食事や排せつ、入浴などの生活すべてが、自分一人ではできなくなり、家族や看護者・介護者の手に委ねられる。仕事や学ぶこと家事や育児は自分のから離れ他者の手に移る、その苦しみである。一変する生活、生命や生きることそのものの危機、この苦しみは病者にとっては耐えがたい。ときとして病者や家族は〈死んでしまいたい〉という。それが現実となる場合もある。

このように、苦しみに耐えている病者は病いの受け手であって、病むことは受動的である。生まれることも死ぬことも病いにかかることも、気づいたときにはすでにその中にいる。重い病気や死が近いことを知った人が、〈なぜわたしが〉と叫ぶ。病者にとっては〈こうむった〉病いへの、やり場のない怒りや無念さの現われなのかもしれない。「わたしは自分自身が生きものとして生きていることを、自分自身で設定したのではない。わたしはそれを、わたしの生命／生存の根拠への依拠関係を通じて《こうむる》という仕方で受け入れている」¹⁶ のである。生命のこのパトスの属性は、医療者が病者にかかわるそのあり方に深く関与する。苦しむ病者を前にして医療者はなにかしたい、しなければならぬとあらゆる手立てを探す。しかし、なすすべを知らない。ただ見守るだけである。そのとき医療者は生命というものが、〈こうむる〉ものであることを思い知らされる。このような事態をヴァイツゼッカーはつぎのように述べている。

¹⁵ J. A. Simpson & E. S. C. Weiner, The Oxford English Dictionary, 2nd Edition, Oxford, Clarendon Press, (1989)。

¹⁶ ヴァイツゼッカー、木村敏訳・註解『生命と主体—ゲシュタルトと時間・アノニユマ』人文書院、(1995、p.93)。

生命とは一つの過程ではなく、《受苦的に蒙る》もの *erlitten* でもあるということを確認に表明することなしには、有機体や生命についての真理に即した物のいい方はできないのだという洞察を不可避ならしめること、これが悟性の洞察である。生命とは、ただ自己自身を措定し、能動的に働くだけのものではない。生命はまた、存在せねばならないというはめに陥っているのであって、その限りにおいて受動的でもある。その点に関して我々の述べるところは、存在的なるもの *Ontisches* のみにかかわるのではなく、パトス的なもの *Pathetisches* にかかわっている。そして、生命のパトス的な属性については、その存在的な属性についてと同じ仕方では論じられない (GK 291)。

生命がパトス的なものだという事は、病いの苦しみは避けようもないことで、厳然たる事実としてそこにある、ということである。〈こうむる〉こととしての病いの苦しみは、結局のところは、受け入れようが受け入れまいが、その苦しみを生きている。病いの苦しみを〈受け入れる〉ということの意味は、病いがパトス的なものである、ということだと考えられる。

1. 2 子どもが病むということ

妹が死んだとき母は、その場の空気を切り裂かんばかりの声をあげて泣いた。妹の身体にすがり、揺さぶり、泣き続けた。妹の頭はがくがくと動いていた。その姿を見て、母が妹をどれほど深く愛していたかを、わたしは感じた。それはわたしにとっては、妹の死を悲しむというより、消えることのない衝撃であった。6歳のときであった。

柳田¹⁷は、わが子の死についてつぎのように記している。

わが子の死の体験というのは、これまでものとは月とスッポンほどのちがいがありません。『犠牲』以前の作品では、知識の水準で生死をとらえてきました。もちろん、同情や共感ほちました。けれど、脳死に陥ったわが子を看取った十一日間に感じたのは、もっと別ものだったんです。全身をえもいわれぬ感覚が襲ってくる。それをあえて言語化すると、「人称による死のちがい」ということにあります (I 275)。

「わが子の死の体験というのは、これまでのものとは月とスッポンほどのちがいがありません」という柳田のことばは、親が子どもの死に見舞われたときの、まさに、「全身をえもいわれぬ感覚が襲ってくる」体験であった。柳田が「全身をえもいわれぬ感覚が襲ってくる」という感覚は、表現の仕方は異なっても、妹が亡くなったときの母の、「切り裂くような声をあげる」のと、〈体験の重み〉は類似しているようにわたしには思われた。

¹⁷ 「死の現場」取材し、「現代人の生と死」をテーマに描き続けてきた作家・報道活動家である。

わたしは、死について書かれたものはいくつか読んだが、「子どもの死」については、ほとんど注目してこなかった。しかし、インタビューに応じてくださった C さん¹⁸の話は、はからずも、重篤な病いにかかった子どもについて話であった。そこで子どもの死について検討しておきたい。それについては、柳田の『いのち 8 人の医師との対話』¹⁹という格好のテキストがあった。そのなかの、子どもや恋人や家族の死に特化した「二人称」を視野に」を要約し、紹介する。

「わが子の死の体験というのは、これまでのものとは月とスッポンほどのちがいがありません」という柳田のことばに、川越²⁰はいった。「終末期の医療にかかわってきて、やはり同じことを感じます。死は、死にゆく人と自分との関係によって違ったものになってきます。《関係における死》というとらえ方をしていますが、柳田さんはもっと明確に、それを定義されたと思います」(I 275)、と。

柳田は、わが子の死の「人称による死のちがい」について、これを「二人称の死」として、その重みについて、以下のように記述している。

脳死に関しては、様々な取材を、本をたくさん読みました。よく知ったつもりでいたのです。ところが、脳死状態の息子を前にして感じたことは、取材者という第三者として見てきた「三人称の死」とは違っていました。親しい友人・知人の死とさえ違っていました。死というものは、「何人称に属するかで全然ちがうものなんですね」(I 275)。

人間はそれぞれ、自分だけの人生の物語を持ち、その文脈のなかで生き、死んでゆく (I 275-276) まず、死にゆく人自身にとっての死、つまり、「一人称の死」があるわけです。これに対し、友人・知人や医療者をはじめ無縁の他人に至るまで、「彼(彼女)の死」といえる死、つまり「三人称の死」があります。そして一人称でも三人称でもない、家族や恋人などの関係がある死、つまり「二人称の死」というものがある。

ところが「二人称の死」すなわち「あなた」という関係にある人の死が持つ深い意味は、一般的な死の概念に照らしてもわからない。医療現場においても人称による死のちがいを見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。現在の医療は、一人称と三人称の関係だけに限定されているからです (I 275-276)。

いまの医療は、疾患とか、臓器とか細胞とか遺伝子とか、対象を目に見えるものに限定

¹⁸ C さんは研究参加者である。C さんについては研究参加者のプロフィールで紹介した。

¹⁹ 『いのち 8 人の医師との対話』講談社、(1996)。「ここ十年余りの間に行ってきた様々な専門分野の医師たちとの対話のうち、わたしは「二人称の死」を視野に取りあげた。家族や親しい友人の死は、他人の死、つまり、死について取材して書く三人称の死とはまったく違う。わが子の死の体験というのは、これまで書いてきたものとは月とスッポンほどのちがいがありません」という言葉が印象的であった。それは、わたしがインタビューさせていただいた C さんの体験と重なる。「《二人称の死》を視野に」は、わたしの病むことについての理解を、特に、重篤な病いにかかった子どもとともに生きる母の体験の理解を助けてくれるとわたしには思えた。

柳田の主な作品には、『「死の医学」への日記』新潮文庫 (1999)、『犠牲—サクリファイス』文春文庫、(1995) などがある。

²⁰ 川越 厚は、「二人称の死」を視野に」と「家で死ぬということの意味」の対談者である。

しすぎます。人間は生物学的な営みだけでなく、精神的な営みをしている。一人きりで生きているわけでもない。周囲の人びととの関係性のなかで生きている。つまり、人のいのちというものは、生物学的ないのちと精神的ないのちが一体となって成立しているのです (I 276)。

生物学的ないのちは本人固有のものであるにしても、精神的ないのちは生活と人生を分かち合った人と共有している部分が多い。だから誰かが死ぬということは、死にゆく本人のだけの問題なのではないのです。その人の生活と人生を共有した二人称の立場の人のこころのなかでも、同時になにかが死んでゆくからです。そこが「二人称の死」の特別に大事なところなのです (I 276-277)。

昔は、家族ぐるみでそれぞれの死を静かな看取りのなかで共有したものです。病院死が主流となったいまは、医学によって二人称の死が阻害されています。[……]、病院では、病者の意思よりも医学の倫理が優先される。死は、医療者の管理下に置かれている (I 277)。

1. 3 転機としての病い

この耐えがたい苦しみを受け入れることなどどうしてできよう。「病者に体験された、《不可能》への《強制》Zwang zum Unmöglichen は、[……]転機的状态の表現である」(G 274)。

「[……] 転機²¹の本質は主体²²の危機であり、一つの秩序から他の秩序への移行を表すだけでなく、主体の連続性と同一性の放棄でもある」(GK 277)。病者にとって、いままで使っていた椅子、お箸やお茶碗はそらぞらしく、廊下は長く、お手洗い、浴室は脅威の場所となる。学校の友達や職場の仲間は疎遠なものとなる。馴染みのものは一挙に別のものとなり、病者から見た風景は別の世界となる。予期しない生活の断絶で病者は混乱し、圧倒され、心は分裂状態になるなどの意識の変容を来し、不安や恐怖、抑うつにおちいる。それは自我の脅威、主観／主体の危機、この受け入れられようもない不可能への強制は変転が生じない限り、断裂や飛躍のなかで破滅してしまうようなものである (GK 275)。

危機ののり越え、一つの行為からつぎの行為への移行を導くものは、転機そのもの (GK 289) である。病いの苦しみのなかで病者はなお生きたい、あるいは生命があるかぎり生きねばならないと、わずかでも苦痛を除こうとし、生きるためのあらゆる手立てを探す。生命の危機のなかにあつて、脅威にさらされながら、なお「主体／主観は生命の根拠に依拠²³することにおいて世界に向かって行動する」(GK 90)。

²¹ 転機とは、「《病気が回復するか死に向かうかの》堺目、危機である」。『クラウン独和辞典』三省堂、GK 2003。転機とは、「非恒常的有限が超越を通過して有限の恒常性に至る通路である」(GK 274)。

²² 「主体とは自我と環界の対置の根底をなす原理である。転機における主体は、脅威にさらされたり、維持されたりする有機体の統一性の総括概念でもある (GK 274)。

²³ 根拠関係、生きものが生きていくために、生命／生存の根拠 Grund とのあいだで維持し続けている根底的 gründlich な依拠関係、この関係についての洞察が、ヴァイツゼッカーの思想の中心的な位置をなす (GK 90)。

病者と看護者は、病いによって障害された心身の機能に合わせた、あらたな生活環境のなかに、一つの秩序を見だし自分自身のものとするための活動を始める。病者と看護者は、病者の心身の統一性と生活環境の統一性が対応するように意図する。具体的には、たとえば、食べるという病者の行為は、お箸とご飯を盛ったお茶碗を手にもち、ご飯を口に入れ、咀嚼する。その場合、病者はお箸とお茶碗、ご飯という物と、それらを手にもち、口に運ぶ、咀嚼するという病者の自己運動²⁴との適応関係がない限り—他者や器具による代行もある—生命は維持できない。したがって、障害で失われた機能と、維持されている機能とを拡大する—リハビリテーションによって—ことによって主体の統一性が図られる。一方、病者の持てる機能に合った生活環境—室内や椅子、テーブル、食器など道具の工夫によって—を統一的に作り上げていく。主体の統一性は、「非恒常性と転機を乗り越えて繰り返される回復ではじめて構成」(GK 277)されるのである。

1. 4 病いののり越え—限界状況における病者の体験から

これから述べる神谷の〈のり越え〉は、ヴァイツゼッカーの転機的状态をのり越える具体的な展開例と考えられる。『極限のひと—病める人とともに—』のなかの「限界状況における人間存在—癩²⁵療養所における—妄想症例の人間学的分析—」において、神谷は、つぎのように述べている。「限界状況²⁶に置かれた人間が、もしそれをのり越えるとするならば、どのようにそれに反応し、それをのり越えるのであろうか、[……]これは人間としての存在そのものにまつわる根本的な問題である。[……]それらは同時に人間の可能性の源泉をあらわしうる」(Ky 28-29)と。そして、〈のり越えやその源泉〉を理解するためには、〈徹底的な症例研究〉しかない(Ky 3)、という。その実際を、神谷は癩病者 K. N のことばをとおして分析している。これは病いや死を前にしての苦しみのなかに、希望の契機があることを示唆している。

1. 4. 1 病者の体験とその意味

〈病歴〉 入所時(1952年)、顔面はふくれあがり、癩性の浸潤がびまん性にあり、眉毛はほとんどなく、各手指はまがって萎縮し、左腕には潰瘍、左右尺骨神経に浮腫、

²⁴ 自己運動とは、運動の自発性である。あるものが生きていのかどうかは運動を見る。これは主体を、自己自身の力で自己自身との関係において動作を行う存在を想定している(GK 31)。

²⁵ 癩病という病名は「らい予防法」が平成8年に廃止されて、はじめて公的にハンセン病となった。

²⁶ 限界状況の概念について、ヤスパースは、このような状況をもたらす原因として、葛藤、死、不慮の事故、罪をあげた。ガブリエル・マルセルは死と裏切りを、ジャン・ポール・サルトルは死と「他人」をあげ、ブッダが限界状況に目ざめたのは病、苦、老、死に接してのことであった(Ky 37)。

両前肢と両下肢に斑点がみられた。しかしなお見ること、歩くことができた (Ky 13)。

〈体験〉 「伝染源は不明で非常なショックを受け、(1) 目の前がまっくらになり、ひとり地の底へ落ちていくような気がした。(2) 自分がもう人間の仲間には入れない気がした。しかし、名大、京大の外来で1年半づつ大杓子油²⁷の注射を受け、意外によく治ったので生き返った思いがした。27歳で結婚したが、癩は全快したと信じていたので妻には秘めていた。

ところが癩が翌年発病し(4) 生きた心地もせず、このまま生きていてもしだいに働けなくなって、妻子の恥と負担になるばかりと考え自殺しようと思った。しかし最後の別れを告げるつもりで或る晩妻子の眠る姿を見ていると、涙があふれ、(5) 情に引かれてなお3年間そのまま生き続けた。(5) その間病気が人に知れないかとたえずびくびくし、ちょっとした訪問者でも保健所から調べにきた人かと思って、物かげに隠れた。しかし病気は悪化するいっぽうなので再び自殺を決意し、その方法を考えていた (Ky 10)。

(番号は筆者。なお、番号(3)は体験には記されていない。)

神谷は下線を引いた部分を取り上げ、文献をもとに詳細に分析し、それを(1)破局感、(2)人間疎外感、(3)自己の肉体を外毒の源泉として自覚すること、(4)生きがい喪失感、(5)罪の意識、と意味付けている。K. Nのこの体験を、神谷は極限状況だという。K. Nの状況の苛酷さは、「身のおきどころもない、完全な袋小路で、事態は耐えがたく、それは生きて行くのが不可能状態になった世界」(Ky 36)である。K. Nに自殺を決意させた根源のものは、この極限状況だ、と神谷は述べている。癩病という病いの特徴と、確立した治療法がなく、地理的、社会的な隔離によって決定的なダメージを受けるほどの心理的隔離という、その時代の医療制度のなかで生きざるをえなかった状況を表している。

1. 4. 2 限界状況そのものがのり越える力となる

「ぎりぎりに追いつめられた状況において、とつぜんK. Nに〔どこからか〕声がきこえてきた、その第一声が《卑怯じゃないか》であった」(Ky 26)。神谷はこの声を「絶望と混乱の中で病者にあたらしい精神状態が生じた、いわゆる宗教的、神秘的体験²⁸の特徴」(Ky 44)、だと指摘している。病者の生活は、声の命ずるところを実際に生きる幻覚的行動で、K. Nの意識、彼の《世界内存在》の全体の変容を表す。その変容の根底のものは、神谷によれば、「幻覚が出現したときの<強いおどろきの念と、喜びにみちた心のはずみによる根本的な情緒的变化」である。この変化は、あたらしい世界と価値体系の出現によって人格の

²⁷ 1940年代インド産の大風子油と類似したもの。科学薬品の導入(1948年)まで使用されていたと思われる。

²⁸ 神谷はウィリアム・ジェームズの「ある体験を神秘体験とよぶのを正当づける特徴」をあげ、他に鈴木大拙、T. リポー、P. ジャネーらについて言及している (Ky 37-41)。

構成要素の布置が変わったことによる (Ky 55)。すなわち限界状況にある人がそれをのり越えるのは、「一つの存在様式から他の存在様式へと移ること」(Ky 63)である。それを可能にさせるのは「人間の〈可能性の淵源〉としての力」(Ky 63)である。「わたしは悲しみと苦しみによっていろいろと教えられてきた」(Ky 52)という K.N のことばは、「K.N がいま自分の運命によって積極的価値が達成されたとの確信を表し、こうした意味で K.N は癩と和解した」(Ky 62)、と神谷は述べている。

ヴァイツゼッカーの転機と神谷のり越えは、前者では健康的な秩序からその断絶としての他の秩序へ移行であるのに対して、後者は限界状況からのり越えとしての和解へ移行であった。病者が〈変わる〉のは、この一つの〈秩序の移行〉であった。また、わたしに病者の変容の不思議を感じさせた、とうのものはあからさまには〈認識でない〉、生きることを根拠づける主体/生命であった。病者の自己変容は、この移行と、不可視な根底と結びついて、つねに自己自身と出会うことを求めている (GK 300) と考えられる。

2 出会うこととしての看護

看護の考え方には、看護の構成要素、病者と看護者との人間関係²⁹、病者のニードにかかわるものなど、時代や焦点のあて方によってさまざまな看護論がある。まず、「看護は健康と病気の体験にかかわる」という、ベナー/ルーベル³⁰とウィーデンバック³¹の看護論を検討する。つぎにわたしの関心、〈病者が、みずから自己の病いの意味をあらたに生み出す〉、〈出会うこととしての看護〉について述べる。

2. 1 ベナー/ルーベルとウィーデンバックの看護論

ベナー/ルーベルは、看護師が看護活動のなかで注目しているのは、あくまで、「人が健康な状況とストレス状況の下で生き抜いている体験である」(PC viii)と述べている。この観方を「看護固有の観方」として、生物学的医学的な細胞や組織や器官レベルの疾患と、能力の喪失や機能不全をめぐる人間独自の体験である病気を区別する (PC ix)。ベナー/ルーベルは、この看護固有の観方にしたがって、ストレス(病気といい換えられる)管理戦略を、「痛み・苦しみ・喪失・成長・変化のただ中にある人が、そういった体験を引き受け、そこになんらかの意味を見いだしていけるようにするための戦略」(PC iv)だという。そして、

²⁹ J. トラベルビー 長谷川浩・藤枝知子訳『人間対人間の看護』医学書院、(1974,p.3)。

³⁰ ベナー/ルーベル 難波卓志訳『現象学的人間論と看護』医学書院、(2000)。

³¹ E. ウィーデンバック 外口玉子・池田明子訳『臨床看護の本質』現代社、(1969)。

その意味の把握を可能にするのは人間の本質をなす、身体に根差した知性³²、意味³³、関心、個人史、状況による（PC 48）、と。

そこから、ベナー／ルーベルは、看護師に求められることをつぎのように述べている。病気を治し、病者に安らぎを与えるためになによりも重要なのは、看護師が症状の意味を、いま病者の置かれている状況や関心などと関連付けて理解すること（PC ix）である。看護師が、病者の病気の意味を理解することは病者にとって癒しであり、病者はそれに支えられて病気に伴う疎外感、社会との一体感の喪失を克服することができる（PC 11）、と。

ウィーデンバックは、「臨床看護の目的は、ある個人が、〈援助へのニード〉として体験しているニードを満たすこと」（CN 28）と述べている。〈援助へのニード〉として体験しているニードとは、病者が自分自身の努力だけではニードを満たすことができないとわかったとき、病者自身が自分の〈援助へのニード〉（need for help）を認識する（CN 17）のである。つまり、病者がおかれている状態や状況を、病者自身がどう〈知覚〉しているかが重要なのである。なぜなら、病者のその知覚の仕方こそが、病者自身が自己の〈援助へのニード〉を体験しているかどうかを明らかにし、援助を求める具体的な行動を起こすかどうかを決定するからである。したがって、臨床看護の目的を果たす看護師の責任の範囲は、「病者が自分の置かれている状態やその時の状況をどう知覚するかを〔看護師〕が知る」（CN 28）ことにある。そのためには、看護師は、自分自身の知覚体験を明確にすることが求められる。看護師は、病者の言動を知覚したときの自分の違和感の根拠を明らかにしようとして、病者に確かめる行動をとる。そのことによって、病者は自分の言動の根拠となる知覚を明らかにすることになり、病者自身が自分の援助へのニードを明確にすることになる。ウィーデンバックはその手だてとして〈再構成〉（CN 109）³⁴を使う。ねらいは、看護師の知覚と行動の一貫性である。再構成は、看護師に研ぎ澄まされた感覚と、看護行動の確実性を身に付ける手段となる。

以上のことから、ベナー／ルーベルとウィーデンバック両者に共通するのは、病者の〈体験の意味〉を理解しようとする点である。病者がみずから自己の体験の意味を明確にすることは、病者が自己を自己自身のものとする点において重要な意味をもつ。その意味で両者は、看護において、ある一つの視点を与えてくれると考えられる。しかし、ベナー／ルーベルでは、病者の体験の意味を理解するという場合、〈理解する〉とはどういうことかについては言及していない³⁵。それに対してウィーデンバックでは、「看護師が、自分自身の知

³² 身体に根ざした知性とは、身体そのものが知的解釈の主体である。その能力は体内感覚受容から、習慣的・文化的な知、複雑な技能までかわる（PC 451）。

³³ 「意味」とは広い意味での世界観のこと、人の出会う諸事象、諸事物が何か「として」立ち現われるのを可能にするような分節の枠組み（PC 454-455）をいう。

³⁴ 再構成の詳細は第五章で述べる。

³⁵ 西村は、ベナー／ルーベルでは、〈わかる〉ことについて「《新体》固有の次元におけるいとなみは記述されていない」、という（KA 232）。また、ベナー／ルーベルのいう、「体験の意味の把握を可能にする、身体に根ざした知性としての《習慣的身体》」について、西村は疑問をもつとも述べている。「人と人のかかわりを基盤とする高度で複雑な判断能力を要する専門熟練技術は、運転技術などの《習慣的身》とは異なる。《新体》の知覚経験は、つねに生み更新され続ける開かれたいとなみであって、習慣化されることはな

覚体験を明らかにする行動が、こんどは病者が、自己自身の知覚体験の意味を自己に対して明確化することになる」という。看護師が目ざすのは、病者自身が自己の知覚を明確にすることによって、病者自身が援助を求めることができるようになることである。このことは、病者と看護師の両者が、ともに自己自身を見いだすことを求めていると考えられる。

2. 2 病者と看護者はつねにあたらしい出会いをつくり出す

ナイチンゲールは、本来の看護は、医療的な処置の他に、「新鮮な空気（換気）、日光、暖かさ、清潔さ、静けさを適切に活用し、食事を〈適切〉（強調は筆者以下同じ）に選択して与えることなど、すべて病人の生命力の消耗を最小にするように〈適切〉に行うこと、[…] 健康な人の生命力を高めるように自然の力を〈適切〉に活用することを意味する」、³⁶と述べている。わたしが注目するのは、生命力の消耗を最小にし、生命力を高めるように〈適切に〉ということである。このことは、いまここで、援助へのニードを病者がどう知覚しているかが、看護師の責務だといったウィーデンバックの考えと重なる。つまり、重要なのは、たとえば食事という援助〈内容〉ではなく、食事を〈いかに適切に〉援助するか、である。なぜなら、看護するすべての人は〈固有の〉存在であり、しかも、生命や生活や人生の危機にある病者の心身の状態は、刻々と変化する。看護行動は、病者のこの変化に応じた〈適切〉な行動でない限りは、病者の生命の安全は保証されず、あるいは不適切な看護行動は病いの苦しみのうえに、なん倍もの苦しみを病者に強いる可能性が、つねにあるからである。したがって、〈適切〉な看護であるために、看護者は病者と出会う仕方そのものが問われる（GK 244）。ウィーデンバックの考えにしたがえば、病者の知覚と行動とは、看護者の知覚と行動と出会う、ということを課題とする。このような意味で、筆者は看護を病者と看護者が出会うこととしてとらえたい。

このことをもっと詳細に見てみよう。現実の看護場面では、看護行動は看護者の一瞬一瞬の知覚と細かい動作のつながりで成り立っている。看護者は看護行動をしながら自分の動作の結果を病者がどう受けとめているか、痛そうだったり不快そうであったりしてないか、目の動きや顔の表情、身体の緊張など目に見える病者のどんな些細な動きをも瞬時に見てとり、あるいはことばで応答しながら、それにそって看護者は瞬時に自分のやり方を微妙に変えたり、別のやり方に変えたりする。病者も看護者の行動を瞬時に見てとり、身体で感じ、自分のいまの状態に合っていなければ、身体を引いたり堅くしたり、不快な表情になったり、痛いつついたり、ことばや身体で表す。このことは、病者と看護者の相即³⁷ 関係を左右するのは、そのときその場での両者の知覚と運動にあることを示している。

い」、と（KA 227-229）。その意味で、病者の体験の意味に関しては、改めて考慮することが必要となる。

³⁶ F.ナイチンゲール 湯楨ます監修『ナイチンゲール著作集』第二巻、現代社、（1974,p.367）。

³⁷ 相即とは、自我と環境の両者は知覚自体のなかで結びつき、出会いの中で溶け合っていて、これを知覚における相即 Kohärenz と呼ぶ（GK 95-96）。

看護は予測に基づく行動であるが、病者がどう対応するのか予測できない。結果の「不確定さ」を前提としている。病者と看護者の相即関係が維持できれば、いまここで触れ合い、一つに溶け合えたと思える瞬間が生まれる。つまり、「産出的で刻々にあたらしい出会いが実現する」(GK 246) のである。したがって、病者と看護者の出会いのなかで一つの連続性を形成しているものは、病者と看護者それ自身 (GK 290) である。だからこそ、看護においては、病者と看護者「両者の結合の仕方を問うことが不可欠の課題」(GK 246) となるのである。

このように、病者と看護者とが出会うとするならば、病者と看護者がともに変容してゆく可能性が看護にもあるといえるのではないだろうか。では、病者と看護者が出会うとして、そこに病者が語り、看護者が聴く³⁸ ことに、どのように絡むのであろうか。これについては、第五章で述べる。

本章のまとめ

「看護は、まず病者の体験を聴くことから始まる」のであった。どんなことであれ病者が、身体で、ことばで語る体験は、いつでもわたしのところを衝き動かした。語ることのなになが、聴くことのなになが、あるいは病いのなにながそのような状況を引き起こすのか、不思議だった。このよう経験が、看護実践の場でのわたしの関心を、つねにいま向き合っている病者と、看護者としてのわたし自身に向けさせた。

病者が病いに苦しみ、苦しみに耐えることは、ただ、身体の痛みや障碍の苦痛だけではない。いのちの危機はつねにところどころに潜み脅威となる。

このように苦しみに耐えている病者は、病いの受け手であって、病むことは受動的である。子どもの病い、とりわけ《わが子の死》の体験というのは、想像をはるかに超える。《二人称の死》すなわち《あなた》という関係にある人の死が持つ深い意味は、一般的な死の概念に照らしてもわからない。

看護は、すべての病人の生命力の消耗力を最小にするように〈適切〉に行うことが、強く求められた。なぜなら病者は、病いや治療法や生活の仕方、たとえば、食事のとり方一つとっても千差万別だから。したがって、看護者は、病者のいまの、あるいはいままでの、そして、これから起りうる状況を見とおしたうえでの、〈適切〉な援助が求められたのである。

³⁸ ただし、言葉による対話が不可能な人の場合は、この限りではない。

第二章 語るとはどういうことか

Cさんは、インタビューの初日から、病いの子どもの苦しみや歓びを、赤裸々に率直に語ってくれた。Cさんの表現には独特なものがあった。そのことばに触れるたびに、わたしは驚き、感動した。子どもについてのCさんの苦しみや歓びは、ことばだけではなく、身体的身ぶりや音声的所作のなかに見いだされた。そこから現れたことばや所作は、あらたな意味を携えていた。このようなCさんのことばを聴いているなかでわたしに生まれたのが、語るとはどういうことかという問いであった。したがって、ここでは、Cさんの体験がどのように表現されるのかが、中心的な課題になる。体験の内容や意味は、Cさんのことばとその語り方のなかにも、おのずから現れる。

その課題を検討するにあたって、病いの子どもについての体験を語ってくれた場面を取りあげる。その場面は、Cさんのことばや所作が、わたしを惹きつけた場面である。その場面でわたしが注目するのは、いま述べたCさんのことばと音声的な所作、身体表現としての身ぶりである。たとえば、Cさん独特のことば、あるいは、ためらい、いい淀み、擬態語、「間」などである。また、「最初〔発病当初〕は、でもいまは」という、前といまを比較する仕方や比喻表現である。

本章の構成は次のとおりである。

- 1 苦しみと歓びを語る
- 2 話すことで、子どもが病気になったことで、聴いてもらうことで

1 苦しみと歓びを語る

病いの子どもの苦しむ姿を見たとき、Cさんも苦しむ。あるいは、生きようとする子どもを見て、Cさんは歓ぶ。わたしを惹きつけるこれらのことばは、どのような働きをするのであろうか。一つひとつの場面におけるCさんのことばや所作をとおして、それを見てみたい。

1. 1 頭がおかしくなる

発病当初の厳しい時期をとおりこして、子どもとCさんは、前向きになられたように、わたしには感じられた。そこで、そのきっかけとなるなにかがあったのかどうか、Cさんにたずねた。するとCさんは応えてくれた。「やっぱり孫たちの姿ですよ。けっして自分たち〔母Cさんと病いの子ども〕だけじゃない。ああ、でもあの子がね、『人に迷惑かけて

生きていたくない』っていうたからね。だから、だれがそんな思うの。あんたが生きてるだけで、あの子ども〔孫〕たちは救われるんやから」と。しかし、そのあと C さんは、「でも」とつぎのように語りつがれた。

もう、どういうのかな、ほんまにね、こう、こうして、こんな感じですよ（と、いいながら、C さんは、正座して両手を膝の前について前かがみになり、その姿勢を実際に見せた）こういう感じが一番、これでも肩で息してるんですよ。ほんで犬ころが上向く感じで、だから哀れというかなんかね、生かしてやってることが酷、という感じ。もうその、ハーッて（C さんは深く息を吸い込んで）、ほんで、横になったら横になるのがしんどいっていうんですよ。これが一番らくだ、いうんですよ。もう、その姿が、ほんま頭がおかしくなる、それ見た時にね。わーどうしようかなという感じ、なにもできないでしょう？ほんで思うことといたら悪いことばっかし。ほいで、なにかしてやっても、「ごめんねお母さん、ごめんねお母さん」、が口癖のようになって。だから、なにもあなたが悪いことない、あなたが謝ることないのよって、わたしもね、発狂するくらいつらい。でもいまはね、そんな気配、全然。（間）、だから、〔子どもは〕元気になるからね、2年我慢してよ、なんていうて。（5-13-14）

「もう、どういうのかな、ほんまにね」という、いい惑うようないい方には、C さんが、本当にどう言えばいいのか、ことばでは表しにくい状況のなかにいることが感じとれた。それを C さんは、「こう、こうして、こんな感じ」といいつつ、正座して両手を膝の前について、子どもの姿勢を実際に見せた。子どもの姿を自分の身体で実際にやって見せる、というこの表現の仕方は、ことばではいい表しにくい、子どもの姿を伝えようとして、C さんの身体が自然に動き出したという感じだった。「こういう感じが一番〔らく〕、これでも、肩で息してるんですよ」という、訴えるようないい方には、ただ単に、呼吸が苦しくてつらそうだというだけではない、なにかが感じられた。

「こういう感じが一番〔らく〕、これでも肩で息をしている」子どもを目のまえにして、C さんは、〈いまにも呼吸が止まってしまうような〉極度の不安と恐怖を感じているようだった。「犬ころが上向く感じで、だから、哀れというかなんかね、生かしてやってることが酷」ということばに、わたしは胸が突き刺されるような衝撃を受けた。「生かしてやってる」という表現は、動物に使うことばである。それをわが子に当てはめる。そのときの C さんは、どのような思いであっただろうか。「生かしてやっていることが酷」と思うのは、子どものいのちの危機への怖れだけではなく、呼吸に苦しむ子どもの姿を目の前で見ている母 C さんには、どうしようもない苦しみであっただろう。

そして、再び、子どもの苦しい呼吸の状況の話に戻った。「もう、その、ハーッて（C さん自身が深く息を吸い込んで）、ほんで、横になったら横になるのがしんどいっていうんですよ。これが一番らくだ、いうんですよ」と。このような表現の仕方ですべて子どもの呼吸の

苦しきは、Cさんの目には、〈いのちの危機〉と映っていたのではないかと、わたしには捉えられた。そのときの子どもと自分の体験の意味を、Cさんは、〈頭がおかしくなる〉〈発狂するくらい〉という衝撃のことばで表された。〈頭がおかしくなる〉〈発狂するくらい〉ということばは、いのちにかかわるような、あまりにも強い不安や怖れを経験したとき、精神に異常をきたすかのような自分を感じたときに使われることばである。いつ呼吸が途絶えるか、〈いのちの危機〉にさらされるような、切迫した状況に陥っている子どもと母Cさんにとっては、まさに〈頭がおかしくなる〉〈発狂するくらいつらい〉ということばで表現する体験であったといえるだろう。

「犬ころ」に見えた子どもの姿を、自分の身体で実際にやって見せる仕方、訴えるようないい方、「犬ころが上向く感じ」という比喻、「生かしてやっているのが酷」という衝撃的なことば、「頭がおかしくなる」、「発狂するくらいつらい」、ということばや音声的所作は、Cさんの苦しみや哀しさの極を描き出して見せた。

1. 2 入れ代われるもんなら入れ代わってやりたい

一番つらいこととして語ってくれたのは、子どもが先に逝ってしまったら、とCさんが想像したときのことである。そのときCさんは、「あと二年くらいちがうかな」とか「消えちゃったとき」と、思う。このことばや表現の仕方こそが、母親の一番のつらさを表している。それをCさんはつぎのように語ってくれた。

一番つらいのはね、あと二年くらいちがうかな、という気持ちがすーっとよぎったときがすごくつらい。だから、あたしにしたらそれまで、この子の身体のね、すべてに耐えられる、維持して、どこも悪くならないで経過せなだめでしょう？ いまだったら、すごく筋肉が衰えているし [……]。

わたしが〔子どもの〕前歩いたら、自分が健康だからさっさかさっさか歩いてしまうと思うんですよ。だからつい、〔ゆっくり歩く子どもの歩調に合わせて〕あの子のうしろ姿見て歩くでしょう？ そしたら、ほんまに（力を込めて）、入れ代われるもんなら入れ代ってやりたい（声をつまらせながら）。

だけどなんかね、もしこれ〔子ども〕がね、消えちゃったとき、と思ったら、いやーそんなこと考えたらいかん思いもってね、どない、どないなるんかなとかね、（亡くなったとき〔わたしのことば〕）そうそうそうね、想像したらね。みんな一所懸命やっているのになー、別に元気にならなくても、ずーっと生きててくれたらな、という感じ。（3 - 3 - 4）

「一番つらいのは、あと二年くらいちがうかな」ということばの、「あと二年くらい」とは、「あと二年くらいあとに」予定されている手術³⁹を指している。それが、Cさんはすごくつらいと、いう。「あたしにしたらそれまで〔二年後の手術まで〕、この子の身体すべてが、〔手術〕に耐えられるよう維持し、どこも悪くならないで経過せねばならない」。しかし、子どもは「いま、すごく筋肉が衰えている」。「いま、すごく筋肉が衰えている」ということは、手術に耐えられるように身体を維持することの難しさを暗に示している。このことは、子どもにとっても母Cさんにとっても、つらい現実であることを表している。

「あの子のうしろ姿見て歩くでしょう？」ということばと、「ほんまに、入れ代われるもんなら入れ代ってやりたい」ということばとのあいだには、一瞬オヤッという唐突さを感じさせてしまうものがあった。これらのことばは、「あの子のうしろ姿見て」、Cさんには手術に耐えられそうにないと思ったのではないか。その瞬間、「ほんまに、入れ代われるもんなら入れ代ってやりたい」ということばが、突然現れた、という感じだった。そのことばをCさんは、力のこもった声で、声を詰まらせながら語ってくれた。それは、いま述べたうしろ姿に感じた思いが、おもわず、力強い声となり、詰まった声という所作を取らせたと、わたしには感じられた。それは、Cさんに「ほんまに、入れ代われるもんなら入れ代ってやりたい」ということばを語らせたともいえるのかもしれない。母の子どもを思う深さと広がり、この音声的な所作から伝わってきた。「入れ代われるもんなら入れ代ってやりたい」ということばは、かけがえのない子どものいのちが失われそうに思えて、Cさんは、自分のいのちと引換えにしてでも、子どもに生きてほしいと願った。Cさんの、その願いがこのことばとなって現れたのだろう。「もしこれが、ね、消えちゃったとき」という婉曲な表現は、先の「あと二年くらいちがうかな」ということばと同様のいい方である。それは、「死」や「亡くなる」ということばを避けるための、Cさん固有の表現の仕方である。「いやーそんなこと考えたらいかん思いもって」とは、そんなことを考えたら、考えるだけで、それが現実になりそうに思える、そのCさんを表している。「どない、どない、なるんかな」とか、「そうそうそうね、想像したらね」という、吃音のような表現の仕方が、Cさんの堪えがたいつらさを、より鮮明に描き出している。「あと二年くらいちがうかな」とか「消えちゃったとき」のような婉曲ないい方、「さっさかさっさか」のような擬態語、「入れ代われるもんなら入れ代ってやりたい」ということばのもつ意味の重さなどなど、このようなことばと所作が、Cさんのことばの奥深い意味をあらわにした。

「みんな一所懸命やっているのになー、別に元気にならなくても、ずーっと生きててくれたらな、という感じ」、ということばは、いままでの、一番つらい話とは異なっている。「みんな一所懸命やっているのに「なー」といういい方は、「みんな一所懸命やっている」その姿を、Cさんが、外から眺めているように見える。そして、みんな一所懸命やっている〈のになー〉といういい方は、みな、手術に必要な体力を維持しようと、子どももCさんも一

³⁹ この手術は、成功率が40%で、再発の可能性もある。すごくつらいとは、危険性の高い手術をしなければならないことを言っている。

所懸命努力している。それなのに、「すごく筋肉が衰えているし」という現状では、それを維持するのは難しい。であるならば、Cさんは、「別に元気にならなくても、ずーっと生きててくれたらな」という「感じ」をもった、ということであろう。「別に元気にならなくても、ずーっと生きててくれたらな」といういい方には、Cさんの或る哀しみがただよっている。そして、そこには、わたしには、Cさんの或る諦観のようなものがあるように見えた。

1. 3 やっと話せるようになった

Cさんは、いまの状況をつぎのように語ってくれた。――いまではすごく順調で、子どもたちはそれぞれ家庭を築いている。子どもが病気になったことで、家族がよけいまとまった。でも、いまは、この1年あの子に捧げよう、というより自分も学ばせてもらおうと思っている。子どもはいま、職業技術専門学校でパソコンを学んでいる、と。

Cさんの話しぶりから、子どもさんの病いは、ひとまず一段落したように思えた。それで、わたしは、「なんだか、一山越えられたような感じがしますが」といった。Cさんは、つぎのように語ってくれた。

やっこないして〔子どもの病いについて〕お話しできるようになったんですけどね、最初⁴⁰は、この子の首をしめてわたしも死のうかしらなんて、ものすごくつらそうだったから。自分〔子ども〕がへーっへーって、いまでも。みんなはぱっぱかぱっぱか歩かはるでしょう。お姫様のようにそろりそろり、つらいやろなと思いつつ。それでもまあ、頑張っている姿を見て励まされてね（涙をうかべて）。（1-5）

「やっこないして話ができるようになった」の〈やっこ〉とは、最初の、「この子の首をしめてわたしも死のうか」と思うほどつらかった頃と比較しての、「やっこ」であった。このような状況のなかでは、Cさんは、子どもの病いのことを人に話すことができなかった。しかし、それがいま、〈やっこ〉話せるようになったのである。「この子の首をしめてわたしも死のうかしらなんて」という、この〈なんて〉といういい方は、最初の「この子の首をしめてわたしも死のうか」と思った、その思いを和らげようとするものである。「へーっへーっ」と荒い呼吸をする。「みんなはぱっぱかぱっぱか歩かはるでしょう？ お姫様のようにそろりそろり、つらいやろなと思いつつ」。この〈思いながら〉というCさんの表現の仕方には、やはり、「この子の首をしめてわたしも死のうか」と思うほどのつらさは表れていないように見えた。「へーっ、へーっ」「ぱっぱかぱっぱか」「そろりそろり」という擬態語は、音声だけではなく、視覚的なイメージをももたせる。それはわたしを惹きつけ、それ

⁴⁰ 最初とは、医師から子どもの病いの診断や治療法を知らされた頃を指す。

にわたしの目を向けさせた。このような表現の仕方は、Cさんの一つの特徴を表している。

「それでもまあ、頑張っている姿を見て励まされてね」という、「それでもまあ」という表現は、ややデリケートな意味合いをもっている。「つらいやろなと思いつながら」も、「それでもまあ」といういい方は、十分とは言えないけれども、それでも子どもが頑張っている姿を見ると、Cさん自身が励まされる。それには、子どもとCさんの長い苦しみのときが過ぎて、「やっど」それを話せるようになった、それが描き出されている。そこから、Cさんのほのかな安堵や喜びが伝わってきた。

最後の涙は、「なんて」「思いながら」「それでもまあ」ということばに込められたCさんの思いを表している。また、これらのことばが、Cさんの〈やっど〉の意味を表していたのである。この涙は、つらさの涙ではなく、大きな安堵と喜びとは言えなくても、やはり、喜びの涙だったのである。また、この涙は、やっど話せるようになった自分、子どもがつらそうで、この子の首をしめてわたしも死のうかと思った過去の自分、まあそれでも、頑張っている姿を見て励まされている自分を、自己自身として、Cさんが感じとったことを表している。すなわち、「やっど」とは、「それでもまあ、頑張っている姿を見て励まされてね」というCさんの思いが表現されたことで、「やっど」の意味が意味として生きた、といえるだろう。いいかえれば、〈やっど〉とは、〈最初は〉、子どもの病いについては、Cさんは話せなかったが、しかし、〈いまは〉子どもが頑張っている姿を見て励まされている。それが、Cさんの〈やっど〉、なのであった。わたしたちは、苦しみの真ただ中にいるとき、その〈つらさ〉をことばにはしない。むしろ、そのつらさを意識から遠ざけようとする。〈この子の首をしめてわたしも死のうかしら〉と思うほどつらかった体験は、子どもが家を出て、パソコンを習うようになったいま、死のうかと思うほどつらかったことも、話せるようになった。その意味での〈やっど〉だったのである。

1. 4 子どもの一歩から

子どもは、八ヶ月も家に閉じこもっていた。その家から一歩出て、保険の手続きのために市役所に行った。子どもは、そこで障害者に会った。障害者の方は、障害者のための職業技術専門学校を教えてくれた。そこで障害者の方たちに出会い、子どもとCさんは、生活や生き方が変わっていった。

Cさんは、最近のことをつぎのように語ってくれた。「いまやっど、子どもは『元気になったら温泉行こうね』に変わってきた。だから、ずいぶん変わってきたなって。それまでやったら、家に閉じこもることが多かったし、買い物にはいっさい行きたくなかった。いまは、エレベーターに乗るときもね。人のこと気づかえるようになってきた」、と。

このような話を聴いていて、わたしは、家に閉じこもっていた子どもが、一歩外に出ることになったきっかけがなんだったのか気になった。わたしはCさんに尋ねた。「なにがきっ

かけで、閉じこもっていたところから出かけるようになられたんでしょうね」と。Cさんが応えてくれたのは、つぎのようなことだった。

社会保険や雇用保険など、本人が行かなきゃだめでしょう？ 手続きは本人がせなあかんから、うち〔家〕でも、誰か家に来はっても、インターフォンですましてしまう感じで、絶対出なかった。でも、役所に出て、ほんで、障害者の人にめぐり合って、「パソコンを教えてくれる学校があるよ」と教えてくれた。そこで、〔職業技術専門学校の〕試験を受けに行ったのがきっかけで。(4-6)

病いの子どもの出かけるきっかけが、「社会保険や雇用保険」の手続きと聴いてわたしは、意外な感じがした。社会保険や雇用保険の手続きという現実的な話が、突然飛び出した感じがして、わたしにはそれが意外だったのである。それまでCさんの話は、苦しむ子どもを見てつらくてたまらない、という話が多かったから。社会保険や雇用保険は、生きていく糧を得るための現実的な欲求である。それが子どもを一步外へ動かし親子のその後の生き方を一変させることになった。それは母Cさんにとっては僥倖ともいえる出来事だったのでないだろうか。たまたま出会った障害者とのめぐり合いが、職業技術専門学校への道を拓いたのであった。このことを、Cさんは以下のように語ってくれた。

身体障害者のなかに入って、あの子は、自分以上に努力している人、いっぱい目のあたりにして、「もっと自分も頑張らなあかん」いうて。娘〔病いの子ども〕には、義務、子ども〔Cさんにとっては孫〕が二人いるじゃないですか。どんなことしてでもね、自分〔娘・病いの子ども〕が活着ている限りは、やってやらないかんて〔……〕。(4-8)

身体障害者のなかに入って、自分以上に努力している人を目のあたりにして、「もっと自分も頑張らないかん」といった。このことは、障碍を持つのは自分だけではないことを知ったはじめての体験であったろう。それは子どもが、自分を相対化したことを表している。それはまた、子どもがあらたな自分を見いだしたことを表していた。子どもが一步家から出て、障碍者の方たちを見て、自分も、と頑張っている子どもの姿から、なにはともあれ、母Cさんにはどこか心がはずんでいる感じが感じられたのであろう。それにしても、「娘には、義務、どんなことしてでもね、活着ているかぎりはやってやらないかん」というこのことばに、わたしは驚いた。そこに現れているCさんの強靱な意思に、わたしは不思議な感じがした。Cさんのなになが、このようなことばを語らせるのか。もちろん、〔娘・病いの子ども〕母として、自分が活着ている限り、やってやらなければならないということは、とうぜんである。もちろん義務も。しかし、「娘には、義務、どんなことしてでもね、自分が活着ている限りはやってやらないかん」という、このことばと、その響きは、なぜかわたしの身を硬くさせた。孫のために、「どんなことしてでも活着てほしい」という、母Cさんの切な

願いが込められているということは、重々承知のうえではあるが。それはともかく、子どもの「自分も頑張らなければいかん」ということばを聴いて、Cさんは、どれほど安堵したことか。Cさんの心もここで安らいだようだった。そのような自分の思いが、つぎのことばに現れている。

いままで落ち込む一方やったのがね、ああ、神さんか仏さんかなんか知らんけど助けて下さって、だから、ちょっとずつ、悪いなかで、いい方へ、ほっとして。(4-8)

「ああ、神さんか仏さんかなんか知らんけど助けて下さって」ということばは、なんともいいようのないCさんの歓びの心を映し出している。「ああ」という感嘆詞は、Cさんのかぎりない歓びの広がりや深さを表している。しかも、その歓びが、「ちょっとずつ、悪いなかで、いい方へ」向かったことだった。それにCさんは「ほっとした」という。このことばの意味を考えてみると、「いままで落ち込む一方やった」ときの、Cさんの苦しみと悲しみが、逆に、ことばではいい表せないほど深く重かったことが伝わってくる。また、子どもの状態がいい方へ向かったとはいえ、完全にいい方へ向かったわけでもなく、いつなんどきなにか起こっても不思議ではない、という状況に変わりはない。しかしそれでもCさんは、「ちょっとずつ、いい方へ、ほっとして」いる。この用心深く控えめな表現は、いい得て妙、Cさんの表現の的確さを表している。それは、いまの子どもとCさんの心情そのものだと、捉えられた。

「ああ、神さんか仏さんかなんか知らんけど助けてくださって」ということばでCさんがいおうとしているのは、歓びだけでなく感謝の心も含んでいるように思える。いままで落ち込む一方だったのが、「ちょっとずつ、悪いなかで、いい方へ」向かったこと、それに「ほっと」する。それに対するCさんの、感謝でいっぱい思いが、思わず、「ああ」という感嘆詞となり、「神さんか仏さんか知らんけどなんか助けてくださって」ということばになったのではないだろうか。〈だから〉、「ちょっとずつ、悪いなかで、いい方へ、ほっとして」なのである。

Cさんの「神さんや仏さん」ということばを、わたしは別な場面でも聞いた。「みな負担になって生きているのはいや」と子どもがいったときに、Cさんは、そのときの悲しみと苦しみを「神も仏もあるもんか」ということばで表した。してみると、「神さんか仏さんか知らんけどなんか助けてくださって」ということばで表すCさんの想いは、良いことであれ悪いことであれ、苦しみや悲しみ、あるいは歓びが、Cさんの想像を超えるようなときに、おもわず飛びでてきたものようだった。それはCさんの一つの表現の仕方だといえるだろう。

身体障害者のなかに入って、あの子は、自分以上に努力している人をいっぱい目のあたりにして、「もっと自分も頑張らなあかん」といった。それは、子どもと母Cさんを生気づけた。その様子をCさんはつぎのように表された。

いまは、あの、〔車いすの人を〕見かけたら、子どもは必ず押してあげて一っ。人を思いやる心、人の痛みというのがね、わかってくる。まえは、もう、〔電車のなかで〕帽子を深くかぶってね、マスクして、もう、それこそ銀行強盗やるんかなというくらい〔酸素吸入用の鼻腔カテーテルを〕隠してたんが、この頃は、マスクは全然しない。その恥ずかしいとかふっ切れてね、感謝で、この頃、全然ちがう。全部プラス思考ね、変わってきた。(5-2-3)

Cさんは、ここでも「いま」と、「まえ」を比較して子どもの変化を語ってくれた。「いまは」車いすの人を見かけたら、子どもは必ず「押してあげて」という。「まえは」もう、〔電車のなかで〕帽子を深くかぶってマスクして、もう、それこそ銀行強盗やるんかなというくらい〔酸素吸入用の鼻腔カテーテルを〕隠してたんが、「この頃は」マスクは全然しないというふうに。(「まえは」、「いまは」、という表現の仕方については、第三章で検討する)。人を思いやる心、人の痛みというのがわかってきた「いま」と、「まえ」とは、子どもはちがってきた。恥ずかしいとかふっ切れた。子どものこの変化は、母Cさんに「感謝」で、この頃、全然ちがう。全部プラス思考ね、変わってきた」と語らせた。

「銀行強盗」という、比喻による表し方は、聴くわたしの眼や耳をそこに向けさせる力がある。人の痛みがわかってきた「いま」と、〔電車のなかで〕帽子をかぶってマスクしていた子どもとは、ちがってきた。マスクは全然しないし、その恥ずかしいとかふっ切れた。「銀行強盗」という比喻表現が、子どものこの変化を、際立たせていた。「もう、それこそ」という強調を表す表現の仕方も同様に、聴くわたしの耳や目をそこへ向けさせる。その耳や目でわたしは、Cさんの、「感謝で、この頃、全然ちがう。全部プラス思考ね」ということばの意味を聴いた。また歯切れよく語る声を聴いた。さらに、「全部プラス思考ね」ということばの自信に満ちたことばを聴いて、わたしはCさんの顔を見つめた。それは、かつての苦しみの極限ともいえる状況から脱出した、Cさん親子の「いま」を映し出している。それは、子どもが変わってきたことへの、母Cさんの歓びと幸せであり、それへの感謝を表していた。

1. 5 海外旅行行ったら

長いあいだ家に閉じこもっていた子どもが一步外へ出て、パソコンに打ち込む姿に、Cさんはほっとしていた。そのようなときに、障害者の母親や親戚、他のみなからも「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃないか」とか、「気の毒に、なぜそんな苦しみを背負わなければならないのか」などといわれた。このような状況のなかで、Cさんは自分の生きることや価値観について語られた。

あのね、身障のお母さんにも、「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃない」といわれたときに、あら、このお母さん、なに考えていらっしゃるのかな。[……]、海外旅行行ったところで、娘の心が癒されるもんかどうか、というもんがあるし、ただ、あたしにしたら、毎日外に出てくれるという感じが、ああ、もう、いやだいやだと思ってたんが、[それを] 忘れて一つでも打ち込んで [いる]。人間の価値観てね、生きてるあれって、海外旅行行って楽しくて、そんなんに、(間) あれがあるのかな一つて思うと、そうじゃなくてかすかな望みに向かってしんどいけれど、どういかな、苦しいけどやっっていくね、そんなんに [ある]、いまやったらやってるつもりやけど、1日でもと思って。なんか、世のなかって、自分が思うようにいっしょではないんだなと思って。だけど、わたしだったら、海外旅行行くぐらいやったら、一抹の望みをかけてね、手術してもらおうという、ただ死ぬのを待つのはいやだなという感じで。あの子自身もなにもせずに、というのはたまらないだろうなと思うから。(2-8-9)

障害者のお母さんにいわれた、「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃない」ということばは、Cさんの心の奥にあった価値観や生き方を引き出すことになったと、わたしにはとえられた。このことばは「あら、このお母さん、なに考えていらっしゃるのかな。海外旅行行ったところで、娘の心が癒されるもんかどうか」という疑問をCさんに抱かせた。Cさんは、「ただ、[子どもが] 毎日外に出てくれる」、「いやだいやだと思ってたんが、[それを] 忘れて一つでも [パソコンに] 打ち込んで [いる]」だけでよかった。「毎日外に出てくれる」「いやだいやだと思ってた」ということばには、それぞれ背景がある。子どもが家に閉じこもって一歩も外に出ないし、来客にはインターフォンでしか対応しなかった。また、子どもが「みんなの負担になって生きているのはいや」(第三章で後述する)といった背景があった。「海外旅行とか行ったほうがいいじゃない」ということばは、ただ、子どもが毎日外に出る、パソコンに打ち込むいまを、大切に思うCさんの思いと、また、その背景をも踏みこむものとなった。「あら、このお母さん、なに考えていらっしゃるのかな。海外旅行行ったところで、娘の心が癒されるもんかどうか」というCさんのことばが、それを表している。

Cさんは人間の価値観、生きていることを、ただ、子どもが毎日外に出る、パソコンに打ち込んでいることのなかに見いだしていた。そして、Cさんの人間の価値観、生きていることは、「海外旅行行って楽しくて、そんなんに」あるんじゃなくて、「かすかな望みに向かってしんどいけれど、どういかな、苦しいけどやっっていくそんなんに [ある]、いまやったら [そのように] やってるつもりやけど、一日でもと思って」という、そこにあった。このことばは、わたしにはあまりにも厳しく重い。これが、わたしたちの価値や生きることの原点、あるいは根源的なあり方を表している。

「人間の価値観てね、生きてるあれって、海外旅行行って楽しくて、そんなんに、(間)

あれが、あるのかなーって思うと」ということばの、「そんなんに（間）、あるのかなーって思うと」という、表現の仕方は、Cさんがそれを話しているそのときにCさんが思ったことを語られたものとしてわたしには捉えられた。また、それは、「人間の価値観てね、生きてるあれって、海外旅行行って楽しくて」ということばを、Cさん自身が眺めているような、或る意味では自分への問いかけのように見えた。

そして、Cさんは、「なんか、世のなかって、みんな自分が思うようにいっしょではないんだな」、と思った。このことばの意味を、Cさんは身に染みて感じたのではないだろうか。わたしは、Cさんのいう、「一抹の望みをかけて」ということばに、ここでも、胸を衝かれるようだった。〈一抹〉とは、一刷毛を表す。つまり、この意味での〈一抹の望みをかけて〉手術をしてもらおう。このことばの意味は、すでに述べたように、子どもの手術の成功率が40%で、再発の可能性もある、ということを暗に示している。そのうえでの〈一抹の望みをかけて〉である。「ただ死ぬのを待つのはいやだなという感じで。あの子自身もなにもせず、というのはたまらないだろうと思うから」。このことばにわたしは、息詰まるような思いをした。それは人間のもっともつらく悲しい現実を描いている。そして、また、それは、子どもと母Cさんの、生きることへの強い意思の現れであった。Cさんの語ることばは、Cさん自身の生き方そのものであった。

1. 6 生に向かって一日でも

Cさんは、身体障害者のお母さんの話のあと、電車のなかでの人の目、みな目や、親戚の人の目について語ってくれた。それに対して、Cさんは、子どもの病気によって、自分は学ばせてもらっている。子どもは、生に向かって一日でも充実している。それに付き添える自分を幸せだと母Cさんは語ってくれた。

電車のなかでも、それぞれの目あるんですよ。ふだん、あの子が病気になったことで、痛みとか苦しみで、人に対する接し方もね、すごく学ばせてもらって。わたしはあの、みなから見ると、「いや一気に毒やね、なんでそんなん背負わないかんのん」ということばを聴くと、あ、そういう意味でしか見られないのかなって思う。「でも、そうじゃないんだよ、もっとちがう、終りにきてね、気づいてなかったこと、経験できなかったこと、この子の病気によってね、まあ、ありがたいんだよって」。自分にいうて聞かすだけですけどね。最初は落ち込んでいたけどね。

親戚なんかでも、「なにも悪いことしてないのに」って。同情してくださっているんやけど、人生なんてね、価値観なんてね、その人自身が感じることであって、そばからいうの、やっぱり、だから、わたしもへんな同情は絶対してはダメだな（強い口調で）と、最大学ばせてもらった感じ。（笑い）だから歩いていても、なんか、気づけよーと

いうてもらっている。だから、なんか、その、娘がとぼとぼと歩く後ろにね、この子なりに考えてるんだな、最初的时候はすごく不安だったけど、この子はこの子なりに生に向かって一日でも、どういうんか、充実しているんだなと思って。それに付き添える自分を、すごく幸せやなと思って。もし、もう、このまますーっとふつうにいった、こういう経験もなしに、接触することもなしに、年老いて、ね、「お母さんさいなら」で終わりやったけど、いま、全然ちがいますよね。(2-9-10)

「電車のなかでも、それぞれの目あるんですよ」⁴¹とは、職業技術専門学校に送り迎えをするとき、車中の乗客の目のことを指している。その目に向けて「ふだん、あの子が病気になったことで、痛みとか苦しんで、人に対する接し方もね、すごく学ばせてもらっている」と、Cさんはいった。親戚の人の「いや一気の毒やね、なんでそんなん背負わないかんのん」ということばに、「でも、そうじゃないこの子が病気になったことでね、ありがたいんだよ」といった。このことばには、あらたな生き方を見だし、それを確かな足取りで歩いているCさんがくっきりと見える。このことばを、Cさんは「自分にいうて聞かすだけ」といった。Cさんは、「気の毒に」という人にとっては、「気の毒」だとしても、Cさん自身にとっては〈ちがう〉。〈ありがたいんだよ〉というそれは、子どもが病気になったからこそであって、それがCさんには「ありがたい」のである。Cさんはそれを、「自分にいきかせるだけ」いう。このことばをきいて、わたしは、わたしの心の奥深くにあるなにかが動かされた。というのは、ことばではいい尽くせないような、子どもとCさんのつらい経験が、このことばの背景にあることを、わたしは知っているから。

Cさんは、親戚の目についても語ってくれた。「親戚なんかでも『なにも悪いことしてないのに』って、同情してくださっているんやけど」、ということばに対して、Cさんはいま述べたのと同じようなやり方で応えられた。「人生なんてね、価値観なんてね、その人自身が感じることであって、そばからいうの、やっぱり〔おかしい〕、だから、わたしもへんな同情は絶対だめだな(強い口調で)と、最大学ばせてもらった感じ」と。

親戚の人の「なにも悪いことしてないのに」ということばは、みな「いや一気の毒やね、なんでそんなん背負わないかんのん」ということばと関連している。両者は、一組になっている。「いや一気の毒やね、なんでそんなん背負わないかんのん」、「なにも悪いことしてないのに」というかたちで。

「なにも悪いことしてないのに」とは、なにも悪いことしてないのに、子どもが病気したしたのはなぜか、ということばが伏せられている。親戚の人の「同情してくださっているんやけど」という姿勢を、Cさんは同情とは認めてはいない。それは、へんな同情だからである。そばから、このへんな同情をするのは「絶対だめ」とCさんはいう。「人生なんてね、価値観なんてね、その人自身が感じることであって、そばからいうの、やっぱり〔おかし

⁴¹ 子どもは、酸素ポンプを運ぶカートを引いている。酸素吸入用のカニューラを隠すためにマスクをし、帽子を目深にかぶっている。人の目とは、それを見ている人の目である。

い]」、と。親戚の人のことばをとおして、同情の意味を考え、そこから逆説的意味も含めて、Cさんは、最大学んだ、という。「だから、歩いていても、なんか、気づけよーと、いうてもらっている」、と。このことばやそのいい方は、最大学んだことで、Cさんの心が拓け、突然広々とした世界が現れたのかもしれない。それは、人としての〈だれか〉からでもなく、どこからともなく聞こえてくる〈なんか気づけよー〉であった。この現象は、Cさんの感覚が研ぎ澄まされ、人でも自然でも、逆境からでも学べるという、Cさんの、澄んだ心を表している。〈だから〉、「なんかその娘がとぼとぼと歩く後ろにね、この子なりに考えているんだな、最初のときはすごく不安だったけど、[……]、それに付き添える自分を、すごく幸せやな、と思って」ということばが、ここに現れたのではないだろうか。このことばもまた、Cさんの「価値観、生きること」の一つだといえるだろう。

ところで、「だから、なんか、その」といい淀みながら語るいい方に、わたしはオヤツという感覚を覚えた。その感覚は、「娘がとぼとぼと歩く後ろにね、この子はあの子なりに考えているんだな、最初のときはすごく不安だったけど」ということばとつながる。すなわち、「娘がとぼとぼと歩く〈後ろ姿に〉」、不安だった最初のころの子どもの姿が映し出された。この「最初のころの、すごく不安だった」それが、Cさんのいい淀みとなって現れたといえるだろう。〈けど〉、Cさんはつぎのように語った。「この子はこの子なりに生に向かって一日でも、どういうんか、充実してるんだな、と思って。それに付き添える自分をすごく幸せや」と。とすると、このことばを引き起こしたのは、「娘がとぼとぼと歩く後ろにね、この子はあの子なりに考えているんだな、最初のときはすごく不安だったけど」ということばと、いえるのかもしれない。「この子はこの子なりに生に向かって一日でも、どういうんか、充実してるんだな、と思って。それに付き添える自分を、すごく幸せ」ということばの意味するものも、やはり、Cさんの「価値観、生きること」の現れといえるだろう。このことばに、わたしは、はかり知れないほどの深さと重みを感じずにはいられなかった。幸せな自分を語ったあと、Cさんはつぎのように語ってくれた。「もし、もう、このまますーっとふつうに行って、こういう経験もなしに、接触することもなしに、年老いて、ね、『お母さんさいなら』で終わりやっただけど、いま、全然ちがいますよね」と。「[……]、いま、全然ちがいますよね」という、弾むような、力強いCさんのことばは、「まえ」とはちがう自分を「いま」見ている。それは、Cさん自身が自分を自覚し、その自分を認めていることの現れだといえるだろう。それはまた、Cさんという一人の人間に、あらたな世界が拓けたことの現れだとも、わたしはとらえた。

2 話すことで、子どもが病気したことで、聴いてもらうことで

本章1では、Cさんのことばと所作をとおして、Cさんの体験の意味が現れるのを見てきた。しかし、Cさんが語ったそのことについて、Cさんとわたしは、語り合うことはなかつ

た。そこで、インタビューが終わろうとしているときに、わたしはCさんに尋ねた。「今日で終わりなんですけど、5回おじゃまさせてもらっていろいろ話してもらったんですけど、それでなにか気づかれたこと、感じられたこととかおありですか？ こんなこと思っていたとか、ご自分でなにか感じが変わったとか、なにかおありですか」と。これに答えてくれたCさんの話しは、いままでとは異なっていた。したがって、ここでは、本章1で見てきたようなCさんの語りをCさん自身が振り返り、そこに現れた言葉が主題となる。

2. 1 こう在りたいと願う道

Cさんは、わたしの問いにすかさず、という感じで応えてくれた。〈話すことで、子どもが病気したことで、聴いてもらうことで〉、「自分がこう在りたいと願う、指針・道が方向付けられた」と。わたしの問いかけに対するCさんのその応答に、わたしは意外な感じがした。いままで、子どもの病気に関する話が主だったけれども、一転して、子どもの話には触れず、Cさん自身の話だった。Cさんは、「人にいえるようになった、というのは変わりましたよね」と。そして、その変容ぶりを以下のように話してくれた。

あの、人にいえるようになった、というのは変わりましたよね。[……]これからの、まだ、老いてゆく順序だてというのが、話しするということで、やっぱり目標いうのおかしいけれど、最終的に仏さんがあるんか神さんがあるんか知らんけど、ふつうになにもなく過ごしていたら、ただそのときをその場を楽しく過ごせて、元氣にころっと逝けたらいい、という単細胞な考えだったけれど、あの子が病気したことと、聴いていただくことでね、自分を分析する、いうたらおかしいけれど、こう在りたいと願う、指針いうか道みたいなのが、方向づけいうんかが〔できた〕、顧みて。(5-7-8)

話をするというところで、あの子が病気したこと⁴²と、聴いていただくことで、「こう在りたいと願う、指針いうか道みたいなのが、方向づけ」〔ができた〕ということばに、わたしは、またまた驚いた。これはどういうことであろうか。わたしには、これが不思議でたまらなかった。話すこと、子どもが病気したこと、聴いてもらうことと、Cさんが、こう在りたい、と願う指針・道が方向づけられたことと、どのように関連づけられるのか、わたしには解せないのである。「話しする、いうことで、あの子が病気したこと、聴いていただくこと」と、〈こう在りたいと願う、指針いうか道みたいなのが、方向づけ〉をつなぐものは、Cさんのことばで言えば、最終的には、Cさんもあずかり知らない〈仏さんか神さんか〉であった。それはCさんのなかでは、自分の意思の力によってではない、なにか別の力が働いて生じたことと感じていることを表していると考えられた。それはまた、Cさんのことば

⁴² 「子どもが病気したことで」については、本章1. 6で検討した。

にしたがえば、インタビューで「話したことで、子どもが病気になったことで、聴いてもらうことで」、自分のこれらの体験が、自分自身がこう在りたいと願う、指針・道が方向づけられたということになる。では、話すことのなになが、子どもが病気することのなになが、聴いてもらうことのなになが、Cさんをこのような道へ方向付けたのだろうか。この点があらたな疑問となった。

2. 2 もっと人生には深いもんがある

では、〈話したことで [……]〉、自分自身がこう在りたいと願う指針・道が方向づけられたとは、具体的にはどのようなことであろうか。以下に述べる C さんのことばから見てみる。

もし、そのままいてたら [子どもが病気になっていなかったら]、不満や不服がつあったかもしれないけれど、些細なことであっても、もっと人生は深いものがあるんだよって、ありがたく感謝すべきだよって。なんでも裏表あるように、いいように解釈することでらしくなれた。だから、Nさんにお話しすることで、あんがい、日々そのまま過ごしてしまうことでも、より深く考えられるようになれた。そこんとは変わったんじゃないかな。ただ、花を見て美しいと思うんじゃないで、美しい花を咲かすためには、いままでいろんな人のアイディアとか、そんな受けながら自然の恵みを受けながら、いま咲かしているんだよって感じ。花も愛でてもらって、悦んでいる姿だなという感じ。だから (間)、ただ単に感激する (間)、たぶん、いままでだったらそれ止まりだったと思うけど、だから Nさんとお話しすることでやっぱりどういうんかな、[……]、自分自身がこうあらねばというような指針いうたらおかしいけれど、方向づけ [られた]。(5-8)

Cさんのこのことばに、わたしは驚嘆した。特につぎのようなことばに。「もし、そのままいてたら [子どもが病気になっていなかったら]、不満や不服がつあったかもしれないけれど、些細なことであっても、もっと人生は深いものがあるんだよって、[……] 日々そのまま過ごしてしまうことでも、より深く考えられるようになれた。[……]、美しい花を咲かすためには、いままでいろんな人のアイディアとか、[……] 自然の恵みを受けながら、いま咲かしているんだよって感じ」、ということばに。

Cさんのこのことばから感じる、なんとも言えない暖かさと、見えるもののなかにある見えないものを見る Cさんの心の在り方を、わたしは見た。それは、具体的なことばの一つひとつだけではなく、それらのことばに表されている、あらたな Cさんだった。Cさんがいうように、「そこが、変わった」のである。その意味では、Cさんが語ってくれたことば

の全体が、その雰囲気、わたしにとっても大切だった。

「ただ単に感激する(間)、たぶん、いままでだったらそれ止まりだったと思うけど」、ということばに込められた意味は、人や自然の力にもまなざしが向けるようになった、その自分を、Cさん自身が確かめたことにある。「そこんところが変わったじゃないかな」という、或る確信をもったいい方が、それを表している。それは、Cさん自身の生き方そのものが変わったことの現れのようにであった。

Cさんは、自分の変化を「～になった」といういい方で語っている。このことばを手がかりに、Cさんは、実際にはどのような変容をしたか見てみる。

2. 3 めぐり合いとタイミング

Cさんは、この場面に引き続いて、「タイミング」や「めぐり合い」、「聴いてもらうこと」について語ってくれた。

ちょうどタイミングよく入ってくださった。もし、めぐり合いがなかったら、誰にも話さんとじーっと抱え込んでいたことが多々あるけれど、聴いていただくことで、また自分がよりよい方向へ方向付けられたという感じ、ね。(5-8)

「ちょうどタイミングよく入ってくださった」とは、筆者がインタビューでCさんの自宅に、はじめて伺ったときのことを指している、それがCさんにとっては、タイミングが良かったということであろう。このことばは、Cさんが〈話せる状態になりつつあった〉、そういうときに、「タイミングよく入り込んできた」ということである。つまり、「タイミングよく」というのは、わたしがインタビューで訪問した〈時期〉のタイミングだけではなく、Cさんがちょうど〈話せる状態になりつつあった〉という、心の状態のタイミングをも表している。そのような意味での〈ちょうどタイミングよく〉であった。また、〈めぐり合い〉とも関係している、「もし、めぐり合いがなかったら」ということばの〈めぐり合い〉とは、「誰にも話さんとじーっと抱え込んでいた」時期から、〈話せる状態になりつつあった〉ちょうどそのとき、たまたまわたしと出会った、ということでもあった。このめぐり合いは、Cさんにとってだけではない。わたしにとっても、めぐり合いであった

Cさんは、「もし、めぐり合いがなかったら、誰にも話さんとじーっと抱え込んでいたことが多々あるけれど聴いていただくことで、自分がよりよい方向へ方向付けられた」といった。このことばは、めぐり合いや聴いてもらうことで、Cさんはよりよい方向へ方向付けられた、ということである。それは、すなわち、Cさんが話すこと、子どもが病気になったこと、聴いてもらうことには、Cさんをよりよい方向へ向かわせるような〈力〉があった、ということであろう。

2. 4 人にいえるようになった

まえの場面で語られた「めぐり合いがなかったら、誰にも話さんとじーっと抱え込んでいた」ということばが気になっていた。そこで、それについてわたしは「ほかのだれかとか、そういう方たちに、話されるということはなかったのでしょうか」、とたずねた。それに応えて、Cさんは以下のように語ってくれた。

でも、あの、親戚なんかもあんまりね、聞かれたら答えるだけで、こちらから、「こうこうだよって」いうことはなかったと思うけれど、お話することで、このあいだ、たまたま本家に寄ったらね、「どう〔子どもの様態は〕？」と聞いていただいたから、「実は、こうこうなんです。でもいまは、いましてやれることはなにかとか、自分で考えられるようになって、だから〔子どもの〕送り迎えをしているんですよ。往復はしんどいけれど、向こう〔職業技術専門学校〕で過ごす時間はすごく楽しいって、〔子ども〕がいうしてくれるから、それがなによりのね、いまのわたしの力なんよ、(大きな声で、笑いながら)」といえるようになった(うれしそうに)。たぶん、いままでやったら、「ええ、相変わらずよ」で終わっていたかもしれない会話が、お話することで、多々ある日常の景色なんかも、こんなときだったらどうかな、とか、また今度ね、お会いしたとき、これも話したいな(ほんとに話したい、という感じで)、と思えるようになった。そこが違ったことでしょうね。だから、あの子どもも上を向いて歩いているけれど、わたしも顔、上向いて歩けるように(笑いながら)なってきたという感じですよ。だから、たぶん、Nさんとこういうお話の機会がなかったら、隠しとおしていたかもわからない。(5-8-9)

上記のCさんのことばのなかで、なにがどのように〈なった〉か、を明らかにして見よう。それに先立って、「誰にも話さんとじーっと抱え込んでいた」とはどういうことかを見てみたい。「誰にも話さんと」とは、「親戚なんかもあんまりね、聞かれたら答えるだけで、こちらから、『こうこうだよって』いうことはなかった」という意味だった。つまり、親戚に対しても、子どもの病気については、聞かれたら答えるだけで、こちらから、話すということはなかったということである。また、「たぶん、いままでやったら、子どものことを聴かれても、『ええ、相変わらずよ』で終わっていたかもしれない」ということであつた。つまり、子どもの病気については、Cさんは親戚の方にも自分から話さないということだっただろう。わたしたちは、あまりにもつらい体験をしたとき、それを語ろうとはしない。それを語るには、話せるようになる時間と場が必要だった。また、それには、タイミングよく出会うこともかかわっていた。

ところで、Cさんは〈筆者に〉話すことで、「～になった」と何度も語ってくれた。この「～になった」とは、どのようになったのか。それをCさんはつぎのように語ってくれた。

「どう〔子どもの様態は〕？と聞いていただいたから、実はこうこうなんですよ」と考えられるよう〈になった〉。「往復はしんどいけれど、向こう〔職業技術専門学校〕で過ごす時間はすごく楽しいって、〔子ども〕が言ってくれるから、それがなによりのね、いまのわたしの力なんよ」っていえるよう〈になれた〉。お話しすることで、多々ある日常の景色なんかも、こんなときだったらどうかとか、また今度ね、お会いしたとき、話したいなと思えるよう〈になった〉、など。

Cさんは〈～になった〉ことを、自分自身の変化として「そこが違ったことでしょうね」ということばで表された。Cさんはこのことばを明快な調子で笑いながら語ってくれた。自分の変化をこのように〈笑いながら〉うれしそうに語るさまは、Cさん自身がその自分を謳っているかのように感じられた。

しかし、そのあとの、Cさんの「だから、たぶん、Nさん〔筆者〕とこういうお話の機会がなかったら、隠しとおしていたかもわからない」という最後の一言に、わたしは驚きと不思議さを感じた。たしかに、ことばとしては、特別ななにかがあるわけではなくことばどおりである。しかし、「だから」は、前のことばとあとのことばが、どのようにつながるのか。この〈だから〉が、わたしには唐突だった。Cさんは、なにをいおうとしているのであろうか。あらためてCさんのことばをふり返ってみた。Cさんのいう「隠しとおす」とは、「子どもの病いの状態」を隠すことを指している。ということは、話をする機会がなかったら、子どもの病気について話すことはなかったということであろう。話す機会があったからこそ、子どもの病気について話すことができた。いいかえれば、子どもの病気は、母Cさんにとって、親戚の方たちにすすんで自分から話しかけることではなかったということであろう。これを話すには、出会いとタイミングがCさんには必要だったということであった。

本章のまとめ

本章1では、病いの子どもと生きるCさんの体験の意味を、ことばと所作のなかに見いだそうとした。たとえば、「頭がおかしくなる」ということばで表される意味を、わたしはことばと身体的身ぶりや音声的所作のなかに見いだした。そこには、子どもとCさんの、いのちの危機を生きる〈生涯続く苦しみや悲しみ〉があった。しかしそれは、〈しんどいけど苦しいけど、かすかな望みに向かって一日でもと生きる〉、そこにCさんは、人間の価値観、生きることの意味を見いだすことになった。Cさんのことばや身ぶりや音声的所作に現れるあらたな意味は、Cさんが自分の体験を語るということのなかから生まれたものであった。

本章2で明らかになったのは、〈Cさん自身がこう在りたいと願う道が方向付け〔られた〕〉ことであった。その道とは、人や自然など、より深く考えられるように〈なれた〉の

は、子どももわたし〔Cさん〕も上を向いて歩けるように〈なった〉ことによってであった。Cさんはこのような自分の変化を「そこが変わったことでしょうね」と、或る確信を感じさせるいい方で話してくれた。そのいい方は、わたし〔筆者〕に対してだけでなく、Cさん自身にも向けられているようだった。

本章1で語られたことは、子どもとCさんの生きざまそのものであった。それをふり返えることによって現れたのが、本章2で語られた〈～になった〉Cさんだった。この両者は、Cさんのあらたな世界を表していた。わたしは、Cさんのことばや所作に驚き感動した。それは、わたし自身の転調でもあった。

第三章 聴くとはどういうことか

聴くとはどういうことか、Cさんのことばを聴いているわたし自身の聴き方をおして考えていく。一つは、Cさんのことばを聴くわたしの体験の意味が明らかになったことである。これについては、わたしは、Cさんの話を聴いているわたし自身のことが気になった。それは、つぎのようなことであった。わたしはCさんのことばを受けとめられなかった。Cさんの「でも」ということばに、わたしは、あわてふためいた。ある場面で、わたしはCさんのいいたいことを最後まで聴き取れなかった。もう一つ、Cさんの体験の意味が明らかになったことである。そこでは、Cさんのことばが、あるとき、違って見えたことである。また、Cさんのことばが、わたしには理解できなくて、Cさんに問いかけた。それに応えていくなかで、Cさんにあらたなことばが生まれたのである。

したがって、ここでは、このようなことが起こるわたし自身の態度や在り方を見ていくことになる。それは、語るCさんにとって、また、Cさんのことばを聴くわたしにとってどのような意味があるのかが、明らかされることになる。このようなことを検討するにあたっては、いま述べたようなことが起こった場面を取りあげる。

ここで、お断りしておきたいことがある。Cさんのことばは、インタビューで語ってくれたものである。そこにはインタビュアーとしてではない、看護者としての態度が、含まれている、このことである。それは、「1 聴くわたしの体験の意味が明らかになった」のなかで見えてくる。

本章の構成はつぎのとおりである。

- 1 聴くわたしの体験の意味が明らかになった
- 2 Cさんの体験の意味があきらかになった

1 聴くわたしの体験の意味が明らかになった

ここには、Cさんのことばや所作の意味を受けとめられなかったわたしや、Cさんの「でもね」によって、Cさんの立場を無視したわたしが映し出された。また、わたし自身がわたしを見ていないわたしを知った。それらの体験は、聴くわたし自身を明らかにすることになった。それは一人の人間としてのわたし自身が明らかになることであった。

1. 1 Cさんのつらさを受けとめられなかった

初日のインタビューで、Cさんは、自分の健康について話をはじめられた。しばらくして、

わたしは、「子どもさんのことではずいぶんご心配なさいたんですよね」といった。子どもさんの病いについては、すでに電話で教えてもらっていたので。すぐに、子どもさんの病いの話に移った。医師から聴いた診断名や治療法を、Cさんは話してくれた。そして、Cさんは、「子どもが『みんなの負担になって生きているのはいや』というときは」と話し出された。とつぜんの「みんなの負担になって生きているのはいや」ということばに、わたしは、衝撃を受けた。わたしはCさんのつらさを、受けとめられなかった。

インタビューが終わって、Cさんの家を出てすぐわたしは、Cさんが一番つらいのは、病いの子どものことだと思った。そして、Cさんのつらさを受けとめられなかった自分を、忸怩たる思いで振り返った。受けとめられなかったことはしこりとなり、インタビュー終了後もずっと引きずることになった。三回目くらいから、モヤモヤしたものを感じたが、それがなにか、わたしにはわからなかった。Cさんのつらさを受けとめられなかったことを気にしてのことだったと気づいたのは、五回のインタビューが終了したあとのことだった。

1. 1. 1 「生きているのはいや」という子どものことばに衝撃を受けたわたし

Cさんのことばを受けとめられなかったそのときのわたしとは、なんだっただろうか。Cさんのことばと身体表現としての所作、およびそのときの聴くわたしの体験を検討する。

C もうね、[子どもが]「みんなの負担になって生きているのいや」っていうたんですよ。

N (わたしはハッとして) 最初はそうまで。

C だから、「あなた[子ども]生きているだけで値打ちがあるんだよう」いうて、[……]「パソコンでも習って、あと、も、友達つくって、自分しか残せないこといっぱいあるんだから」って。そしたら、そっちの方を向いて行ってくれたからすごく安らげますけどね。でも最初⁴³は、「もう、お金かけてみんなの重荷になって生きていたくない」というときは、(間)、つらかった(消え入るような声で)。(1-3-4)

Cさんが、「もうね、[子どもが]『みんなの負担になって生きているのいや』っていうたんですよ」といったとき、わたしはハッとした。わたしは少なからず動揺した。Cさんの子どもは「みんなの負担になって生きているのいや」という、それほどまで追い詰められていたのか。子どもがみずからいのちを絶つかもしいないと思ひ、それがわたしには衝撃だった。母Cさんもこのときのことを「いつ自殺するか、目がはなせなかった」と、三回目のイン

⁴³ 「最初」とは、医師から病気の診断や治療法などを告知されたころのことである。ちなみに、わたしが一回目のインタビューをさせてもらったのは、発病してから八ヶ月後であった。

タビューで語った。Cさんは再度、[子どもが]「お金をかけてみんなの重荷になって生きていたくないというときは」、とくり返された。くり返された「生きていたくない」ということばは、すでに衝撃を受けていたわたしに、さらに追い打ちをかけた。また、「『みんなの負担になって生きていたくない』というときは」、ということばのあとの〈間〉は、母Cさんのなかに、底しれぬ深い闇を孕んでいるようだった。この〈間〉につづく、消え入るような声でいう「つらかった」ということばには、母Cさんのつらさがにじみ出ている。わたしは、自分の受けた衝撃に囚われていた。Cさんのつらさを受けとめられなかったと思ったのは、わたしのこのような事態のなかで生じたものである。

子どものことばに動揺し、衝撃を受けていたわたしには、Cさんのつらさに応えるだけの余裕はなかった。余裕がどうか、いえる状況ではなかった。以下のわたしのことばとそのいい方に、それが直接現れている。

N つらかったねー。

C 本人がね、いちばん。

N 親御さんだったらねー。(1-4)

「つらかったねー」といいながら、わたしは、自分のことばと声の調子に強い違和感をもった。このとき、わたしは、子どもの苦悩をともに生きている母Cさんのつらさを、「受けとめられなかった」自分を再確認した。というのは、わたしの「つらかったねー」の「ねー」ということばとそのいい方が、いかにもそらぞらしく宙に浮いているのを、わたし自身が感じたからである。Cさんの「本人がね、いちばん」、ということばに対するわたしの応答もまた、なんともはつきりしない「娘さん、親御さんだったらねー」ということばだった。わたしのこのことばやそのいい方には、ころころこころこころと、そこにはどこか他人事のようなよそよそしさがあった。わたし自身がざらつとした感触をもったことを覚えている。この宙に浮くような、他人事のようなわたしのいい方と、「間」や消え入るような声でいう「つらかった」ということばとのあいだには、大きなギャップがあった。

1. 1. 2 母のつらさ

このあとのCさんは、いままでの重い語り方から急展開するように、急に大きな声で「だから」、とつづけられた。病いの子どもからいわれる「お母さんごめんね」ということばに、母Cさんはどんな思いを抱いたのだろうか。

C だから、(急に声が大きくなって) 真剣に向かったらそんな話になるから他の話

ばかりしてね、(涙を浮かべて)「お母さんごめんね」⁴⁴ といったらね、わたしもう、たまらない。だから、「なにいってんの」いうぐらいで(声のトーンが落ちて)。

(1-4)

真剣な話になることを避けようとして、他の話ばかりしていたところ、Cさんの声が急に大きくなった。それは、逆に、母としてのCさんの深いつらさを表していた。つづいてCさんは、涙を浮かべて『お母さんごめんね』といったらね、わたしもう、たまらない」といった。病いの子どもからいわれる「お母さんごめんね」ということばは、母にとっては、まさに、「たまらない」ことばである。だから、「なにいってんの」、と軽く受け流すふうに返している。「お母さんごめんね」ということばに込められた子どもの思いは、このとき、母Cさんにはよくよくわかっていた。「親孝行せなあかんのに、こんなんなくてごめんね。自分が迷惑かけている」ということばを、子どもから聴いていたから。

1. 1. 3 過去の記憶と否認

Cさんのつらさを受けとめられなかったとは、どのような事態なのか。このことばの背景になにがあるのか。受けとめられなかったと思った前後の文脈をとおして考えてみる。

いま述べたように、わたしがCさんのつらさを受けとめられなかったと思ったのは、「つらかったねー」という、わたしのことばとそのいい方にあった。それはわたしには、いかにもとってつけたように宙に浮いていた。このいい方は、わたしがCさんのつらさを受けてとめていたとはいえない。

ところで、わたしがCさんの苦しみを受けとめられなかったという場合、それを、わたし自身がわかっていることが前提である。では、わたしはCさんのつらさを受けとめられていなかったと、わかっていたのか。「つらかった」というCさんのことばと、その所作としての(間)や消え入るような声に、Cさんのつらさが現れていた、とわたしは述べている。

「つらかった」というCさんのことばと、所作としての(間)や消え入るよう声を、わたしはわたしの身体で感じとっていた。だとすると、わたしがCさんのつらさを感じていたということと、わたしがCさんのつらさを受けとめられなかったこととをどうとらえたらいいのだろうか。そもそもCさんのつらさをわたしが受けとめられなかった、と思ったのは、「[子どもが]『みんなの負担になって生きているのいや』いうたんですよ」というCさ

⁴⁴ Cさんは、四回目のインタビューで、「ごめんね」という言葉について語ってくれた。Cさんは、『みんなの負担になって生きているのいや』いうて。それをいうたあと、『生きていたくない』という言葉は、[母を]ものすごく傷つけたことを、[子どもは]察知したんですよ。それから、『ごめんね』という言葉をよく使うようになったんですよ。お母さんに親孝行せなあかんのに、こんなんなくて『ごめんね』って。自分が迷惑かけているというように。もうね、(泣いているような声で)ごめんねって言わんとって欲しいとかいうてね」。

んのことばを聴いたときのわたしの動揺と衝撃にあった。そして「つらかったねー」というわたしの、そらぞらしく宙に浮きたい方にあった。問題は、わたしが C さんのつらさを感じ取っていたにもかかわらず、それをわたしが受けとめられなかった、ととらえたことから生じていた、と考えられる。これはどういうことか。わたしが C さんのつらさを感じとったことと、それをわたしが受けとめられなかったこととのあいだになにがあったのだろうか。

C さんが「つらかった」といったとき、あらためてその時点に遡って、わたしになにが起こったのか思い起こそうとした。わたしは、C さんが、間や消え入りそうな声で「つらかった」といった場面を思い出すことはできた。けれども、そのときのわたしの思考や感情は、何度試みてなにも浮かばなかった。不思議なことに、代わりに浮かんできたのは、ずっと昔、わたしの妹が死んだとき、母が泣き叫んでいる場面⁴⁵であった。母が妹の名を呼びながら身体を揺ると、妹の頭はがくがく動いた。それは一つの物のようだった。その場面は、折あるごとになに度となく浮かんできたが、その瞬間のわたしの体験はまったく記憶にない。ここで疑問になるのは、つらい、という C さんのことばを聴いた、そのときの体験をわたしが思い出せないということである。また、その体験を思い出そうとしたとき浮かんだのが、妹が死んだときの場面だったことである。これはどういうことだろうか。

考えられることは、わたしが C さんのつらさを感じとったとき、わたしのなにかが、それを打ち消すように働いた、ということである。なにかとは、そのとき、わたしがそれを自覚していたわけではないが、死への不安と怖れだったのではないだろうか。すなわち、怖れや不安を避けようとして、わたしはそれを打ち消していた。怖れや不安をわたしが打ち消すということ、それが C さんのつらさを受けとめられないことにつながったのではないだろうか。

わたしはこれを否認ととらえた。C さんのつらさを感じたその瞬間に生じた死への怖れと不安を打ち消そうとしたということは、死を怖れ不安に駆られた自分を、わたし自身が知っていたということである。このことから、わたしが C さんのつらさを受けとめられなかったのは、わたしに生じた死への怖れや不安をわたし自身が否認したことによるものといえるだろう。

1. 1. 4 塞がらないころの傷

C さんが「つらかった」といったときのことを思い起こそうとしたとき、妹が死んだときの場面がわたしに浮かぶというのはどういうことか。たしかに、C さんがわが子の苦しみを苦

⁴⁵ わたしの妹が死んだとき母は、稲妻が空気を切り裂くような悲鳴をあげた。なにごとにも悲しんだりするはずのない母が、幼いわが子の死をこれほど苦しむものかと思った。けれども、そのときわたしにどのような感情が起こったのかは記憶にない。その場面は今でもはっきりと目に浮かぶのに。

しむつらさと、妹が死んだときの母のつらさが、子どもの死につながるつらさとしてはよく似ている。だからといって、Cさんのつらさを思い起そうとして、妹が死んだときの母の激しい悲しみの場面が浮かんでくるというのはなんなのか、わたしには理解できなかった。「子どもが生きていたくないといったとき、自分も自殺しようかとか、子どもが自殺しやしないか目が離せなかった」と、Cさんはあとになって語られた⁴⁶。それほどの緊迫した状況と恐怖や不安を抱えていたCさんのつらさを、わたしは、Cさんの所作そのものを感じとってはいた。ということはそれが、妹の死を見たときの母の激しい悲しみを、暗にわたしに思い出させたのかもしれない。わたしにはそれが、底知れぬ恐怖だからこそそれを否認し、時間が経ってもその傷口を塞いでしまうことはなかったということである。塞がれることのない過去のこのころの傷は、わたしには意識されないままわたしを動かしていたと考えられる。インタビュー終了後につづいたモヤモヤが、それを表していた。モヤモヤは、妹が死んだときのことを思い出すまで、消えることはなかった。つまり、いま、Cさんのつらさを受けとめられなかったことと、妹の死の体験とが結びつくということは、その体験をわたしが否認していたことの現れとして捉えられるだろう。妹の死の場面を思い起こすのは、今回にかぎったことではない。死にまつわる何事かが起こるそのたびに、妹の死とそのときの母の姿が浮かび上がってきていた。このことが、いまでもなおわたしを引きずり回し、エネルギーを消耗させていることをわたしは知っている。とすれば、つらいといったときのCさんの深い苦しみや悲しみを感ずるとき、わたしがそれを受けとめられなかったのは、妹が死んだときの塞がれなかった過去の恐怖と不安が浮かび上がってきたからかもしれない。それが、受けとめようとするわたしの力を削ぎ落としていたと考えられる。このように妹の死についての体験を打ち消していたわたしであったとすれば、Cさんのつらさを感じていたにもかかわらずそれを否認し、受けとめられなかったのはとうぜんのなりゆきだった。

1. 2 「でもね」によって、Cさんとわたしはそれぞれ自分を知った

「人の本質を学ぶというのは、つらいこととか苦しみなどのなかにある」、とわたしが言ったとき、「でもね」というCさんのことばに驚いた。同時に、わたしはわたしの意図をはっきり知った。いまのCさんの状況をわたしはまったく配慮していなかった自分を知った。いまCさんにあるのは、子どもが先に逝った場合の、生きている限りつづくつらさと悲しみであった。それに気づいたわたしは、あらためてCさんの話を聴く姿勢になった。その姿勢を感じとられたのかCさんは、数々の体験を一気に語ってくれた。それにわたしは驚き感動し、了解した。この体験から学んだことは、Cさんと一致することでも、わたしの考

⁴⁶ 「だから、前なんかは、やっぱり自殺せーへんかなというのが、すごく（強い調子で）あったんですよ。だから、そばにだれかいて、目が離せなかった。[……]、なんでなんでわたしでいいじゃないの、聴いてくれる人があったら、「間」、なんでいけずするのよって、いうくらいつらかった」、と。

えに固執することでもなく、それぞれの体験が顕在化されることであった。

1. 2. 1 「でもね」に驚き、あわてふためく

わたしのことばに、Cさんは「でもね、雨はやむときがあるけど、[……]」といった。そのとき、わたしは自分のやっていることがなんなのか、わかった。わたしは驚き、そして我に返った。しどろもどろになってそれを修復しようとした。そこからあらためてCさんに向き合った。そのあとに語ってくれたCさんのことばは、子どもが先に逝った場合の生きていくかぎりつづくつらさや悲しみであった。

N 人の本質を学ぶというのは、つらいこととか苦しみなどのなかにあると。

C でもね、雨はやむときがあるけどね、悲しみとか苦しみというのはね、あたしの場合なんかはね、ずーっとね、そんな口にしたくないけど、もし、先に逝った場合、つづくんじゃないかなって思うんですよね。やっぱり親の方が先に逝きたいという気持ちありますよね。で、あれもこれもってね。だから、ま、仏教的にもそんな雨は必ず止むとかね、いうけれど、苦しみ悲しみというのはね、忘れる、忘れるじゃなくて、こう、瞬間的には消え失せているかもわからないけれど、我に返ったときにはね、まだ、やっぱり、こう、あたしの（……聞き取れない）それを慈しむとかね、気持ちにはまだなれない、まだ。

N ああ、うーん（そうか、そうだろうなという感じで）。

C そういう過ごしたことがね、懐かしく思えるってね、ああだったなんてそういう段階の境地にいたってない、（間）まだ。

N それはね、だって、いま⁴⁷、娘さんのことで、いまがつらいわけやし、そして手術してもほんとに保証がない、そのつらさというのは、それはわたしね、なんもいいようのない、親としては、子どものね、病気がほんとに保証のできないような手術をしなきゃいけない、そりゃね、ほんと、いいようのないと思いますよ。

C だから、自分が無になってしまったら、もう、完全に消滅するかもわからないけれど、生きていく限りね、ずーっと、ま、それが自分に与えられた試練とか、ね、自分にしかできないことをやってるんだと、自分にいい聞かせててもね、その、つらさとかね悲しみというのはね、つづくんじゃないかな。（5-1）

1. 2. 2 Cさんの「でもね」は、わたしとCさんのあらたな側面を見せてくれた

⁴⁷ 「それはね、だって、いま」というわたしの言葉は、「わたしが間違っていた、しまった」という、うしろめたさを和らげるための言葉である。

この日、わたしは、インタビュー終了後テープを聴きなおした。わたしのいった冒頭の「人の本質を学ぶというのは、つらいこととか」のあとの、Cさんの「でもね」に、わたしはエッと驚きあわてた。このとき、わたしとCさんになにがおこったかふり返った。どんなわたしだったか。インタビュー当日のことを、フィールドノートから抜粋し、それを以下に記述した。

Cさんが「でもね」といったときのわたしは、エッ、わたしになにかCさんの意に添わないことをいったのかな。どういうつもりでこんなことをいってしまったのか、とんでもないことを言ってしまった、という感じだった。テープを起してみてもっと別ないい方があった、と思った。わたしの思う、苦しさから抜け出せる道はその苦しきのなかにある。それを受け入れることでらくなれる⁴⁸、とわたしはCさんにいいかけたのだ。「でもね」と、反論されるようなことをいうつもりはなかった、と思った。しかし、じっくり思い返してみると、わたしは、まさに、そんなことをいうつもりだったのだ。Cさんは、ことばにしていないうわたしの意図—それをいっているときは、わたしは、自分の意図を明確に自覚していたわけではない—を、正確に受け取っていたのである。だから「でもね」だったのだ。

Cさんは、いまおかれている自分の状況を、「でもね」につづいて語ってくれた。それは、「雨は止むときがあるけど、悲しみとか苦しみというのは、[子どもが]先に逝った場合、Cさんにとっては、ずーっとつづくつらさとか悲しみであった。いまそれを生きているのであった。エッと思って、わたしがいったことをふり返ってみると、わたしの意図と、Cさんがいま生きている状況とのあまりの距離の大きさに、わたしはあわてふためいた。いまのCさんの状況を慮ったり確めたりもせず、わたしはわたしがいま、いたいことをいっていたのだ。それに気づいたそのときのわたしは、そのまま「それはね、だって、いま、娘さんのことで、いまがつらいわけやし、[……]、そりゃね、ほんと、いいようのないと思いますよ」ということばに現れている。支離滅裂なことばは、いまいったわたしのことばを取り消したい思いに駆られていたわたしそのものである。そのような自分に気づき⁴⁹、わたしはあらためて、Cさんのいおうと

⁴⁸ しかし、もしかりに、苦しみを受け容れればらくなれるとしても、それは、そうそう簡単に受け入れられものではない。「苦しみを受け容れればらくなれる」ということは、言葉のうえでの話でしかない。実際に「苦しみを受け入れる」とはどういうことか。それは、どのようにしてか。なによりも、Cさん自身が「苦しみを受け容れる」ということに関心があるかどうか、それが問われなければならないだろう。

⁴⁹ このような態度は、わたし自身何度となくくり返してきたことであった。語る人にいまなにが起こっているのかを聴くことなく、わたしの考えを先にいうことが、いかに無駄なことか、多くの体験から知っていた。Cさんの場合のように、今その人になにが起こっているのかを無視して、聴く者が「このようにしたらどうですか」、ということばは、その人にとっては、害はあってもなんの益にもならない。たまたま、いま、それを必要としている場合は別として。

たとえば、健康相談の場で、「朝食は食べない」という人がいた。わたしは、「お母さんに朝食を作ってもらったらいかがですか」といった。彼は、「母はまだ寝ている。その母に朝食を作ってくれとは言えない」といった。わたしはハッとした。そうか、彼には彼の考えがあって朝食を摂らなかつたのだとわかった。わたしは、彼のおかれている状況や朝食を摂らないことをどう思っているかなど、彼自身の考えを尋ねな

していることに目を向け、集中して聴く姿勢になった。

この記録をふり返って気づいたことは、わたしがいかに自己中心的で、自分の考えを一方的に押し付ける態度をとっていたか、であった。わたしのことばと態度に対する「でも」は、Cさんのつぎのことばが明確にその意味を表している。「でもね、雨はやむときがあるけどね、悲しみとか苦しみいうのはね、あたしの場合なんかはね、ずーっとね、[……]、つづくんじゃないかなって思うんですよね。[……]、我に返ったときにはね、まだ、やっぱり、こう、あたしのそれを慈しむとかね、気持ちにはまだなれない、まだ」ということばが。〈それを慈しむとかね、気持ちにはなれない、まだ〉ということばが示すように、このときのCさんは、悲しみや苦しみを受け容れることなど考えることすらできない状況にあったのである。また、「そういう過ごしたことがね、〈懐かしく思えるってね、ああだったなんてそういう段階の境地にまだなっていない〉」Cさんだったのである。もし、Cさんがいま、どのような状況におかれているかを、わたしが少しでも思う気持ちがあったならば、Cさんから「でも」ということばを聴くことにはならなかっただろう。

Cさんは、最後に「でもね」の意味について、改めて「だから」と、つぎのように語ってくれた。「だから、自分が無になってしまったら、もう、完全に消滅するかもわからないけれど、生きていく限りね、ずーっと、ま、それが自分に与えられた試練とか、ね、自分にしかできないことをやってるんだ、と自分にいい聞かせててもね」、と。「悲しみとか苦しみ」についてCさんが口にするのは、いい方は少しずつ違ってはいるものの、三度目である。このことは、子どもが先に逝った場合、生きていく限りつづく、つらさや悲しみを伝えたかった、受けとめて欲しかったのではないかとわたしは思った。

もし、Cさんの「でもね」ということばがなかったら、「でもね」はいま生きているがままの自分を表現するCさんの力を、その豊かさを見ることはなかった。わたしはCさんの「でもね」に助けられ、救われたのだった。

1. 2. 3 くいちがいはくいちがいのままで

「人の本質を学ぶというのは」（このことばを口にするたびに、わたしはこころが寒くなるのだが）というわたしのことばに対して、Cさんがいった「でもね」は、そのときのわたしの体験をあらわにした。つまり、Cさんの「でもね」によって、わたしは、Cさんのいまの状況を配慮していない自分、自分の考えを一方向的に伝えようとしている自分を知ったのである。もし仮に、Cさんが「でもね」と言ってくれなかったら、「一番つらい、子どもが

かった自分を悔いた。相手の考え方や食事の習慣などを尋ねないやり方が、いかに非効果的であるかを、身をもってわかっているはずであった。「聴くということ」を主題にしたのは、このようなわたしの苦い体験をなんども重ねたことに端を発している。

先に逝ってしまった場合」のことを、聴かせてもらえなかつたらう。これらのことばから、Cさんのはかり知れない苦しみ悲しみがどれほどのものか、わたしは、さらに深く知ることになったのだった。Cさんの「でも」は、いいかえれば、いままでに体験したことのない生涯つづくCさんの苦しみ悲しみを、わたしが改めて捉えなおすことに可能にしたのであった。

わたしの独りよがりで行ったこの出来事は、わたしに、Cさんのいまの苦しみや悲しみを配慮していない自分を、まざまざと目に浮かぶように、わたしに知らせたのであるが、それは、別な視点から見ると、また違ったものが見えてくる。わたしの一方的な「人の本質を学ぶということは」ということばと、Cさんの「雨はやむときがあるけどね、悲しみとか苦しみいうのはね、[……]、つづくんじゃないかな」というCさんのいまの心情とが、わたしにくいちがいとして明確な姿で見えたということである。Cさんの視点から見てはいなかったわたしに気づいたいまのわたしは、もう、Cさんの視点から見ているわたしである。そのわたしは、Cさんの話を、ただただ聴こうとするわたしである。いまのわたしは、わたしの視点に固執することでもなく、わたしの経験と、Cさんの経験とが、それぞれ明らかにされたということである。結果から見てのことであるが。それぞれの思いが明らかにされたいまでは、わたしの考えはすでに意味をもたなくなっていた。「でもね」というCさんと、あわてふためいたわたしとが、自分を思っていることを語るなかで、それぞれが自分をとり戻し、そのあいだに、あらたに生まれたものが「雨はやむときがあるけどね、悲しみとか苦しみいうのはね、[……]生きている限りつづくんじゃないかな」ということばだった。そして、三度もくり返えされたCさんの「悲しみ苦しみ」を、わたしの身体は了解した。「人の本質を学ぶとは」ということばを投げかけたわたしの意図とはまったく異なった、Cさんの悲しみ苦しみをあらわにした。それは、わたし自身をあらわにすることでもあった。それらから、Cさんとわたしとが一つの全体として見えたように思えた。それに、わたしは十分納得した。というよりむしろ、ある感動を伴う驚きであった。

1. 3 ものすごいもんがくるんじゃないかな

語る人のことばを聴き取ることが、語る人を理解するためには、もっとも重要なことである。このことは、語る人と聴く人がお互いを信頼することにつながると考えられる。しかし、ここでは、わたしがCさんのことばを的確に聴き取るということは起こらなかった。わたし自身が混乱していた。

1. 3. 1 Cさんのことばを聴き取れなかった

以下の対話は、聴くわたしが、Cさんのことばを聴き取れなかった場面である。

C 子どもが先に逝った場合、そのつらさとかね悲しみいうのはね、自分が消えうせるまでね、はい、生きてる限りは、はい続くんじゃないかな。そりゃ気持ちのもちようで、楽しかったときとか思い浮かべて懐かしめるときがあっても、やっぱり十分すぎる、満足することは永遠にないんじゃないかな、と。もっともって、やってもやり過ぎ（間）ない（いいよどむ）があるんじゃないかなって、日々思うんですよね。

N やってもやり過ぎないということは？

C けっきょく、短くって、終えてしまうでしょう？ もし、あの、（間）。

N 子どもさんが？

C 手術でね、なんかで、そんなときに孫の成長見ながらね、もし、あの子が生きてたらとかね。

N ああー、えーえーえー。

C もし、あの子だったらどうするかなとか。

N うーん。

C いうのがね、つねにね。

N 自分が生きてる限りはずっとずっと、なにかの折にふっと子どもさんが生きていたらって思うやろなって [……]。

C だから、そんなとき、（間）悔しかったやろなと（涙ながらの声で）その若くして、あれしたんが悔しかったやろなって、あとからね、悲しみとかつらさというかね、なんかものすごいもんがくるんじゃないかなあって [……]。

N うーんうーん、決して、その（間）その娘さんがいなくなって気持ちが安らぐことは決してないんじゃないかっていうね。

C そうそう。

N 気があるわけですね。

C そうそう、うん、いまのいまって思っても、その、過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがたくさんあるし、あの子どもどういうんかね、まえはこう、ぶつけてたんが、悟り開いてきたいうんかなんか、言っちゃいけないことば⁵⁰ というのがわかってきたから、もう、言わないんですよ、（間）そうだったらもっというてくれてたほうがいいのにな、思うけれどね、いわれたらつらいしね、ごめんねとか、お母さん、いまにね、温泉いっしょに行こうねとかいわれたりすると、（間）もう、どういうんかな、ほんまに「生きていたくない」、もう、ひとの、「みな

⁵⁰ 「言っちゃいけない言葉」とは、「みな負担になって生きてるのいや」という子どもの言葉を指している。このとき、母Cさんがどれほどつらい思いをしたのか、子どもが感じていたようだった。だから、Cさんは、「言っちゃいけない言葉」といった。

担になって生きていたくないのー（のーに力を込めて）」というときはね、ほんまに首をしめてほんとに自分も死のうかなくて、思うくらいつらかった。だから、悔しかったんやろね。（5-1-2）

「やってもやり過ぎない」ということばの意味がわからず、わたしは C さんに問いかけた。それに対して、C さんは「けっきょく、短くって終わってしまうでしょう？」と応えてくれた。このことばが理解できなくて、わたしはまた、「子どもさんが？」と問いかけた。このあとのわたしと C さんのやりとりも、わたしには C さんがなにをいいたいのか、わからないままだった。わたしの「自分が生きているかぎりはずっとずっと、なにかの折にふっと子どもさんが生きていたらって思うやろなって」というわたしのことばは、C さんのことばを受けとめたことを表してはいない。「うーん」ということばにならないことばを三度も挟んでいるのは、わたしが C さんの意図を聴き取れなかったことを表している。にもかかわらず、C さんは、「だから、そんなとき」とつづけられた。この「だから」とは、わたしのいったことを、暗に「そうです」と認めていることを表している。

C さんの「だから、[子どもは] こんなとき、悔しかったやろね（涙ながらの声で）、その若くして、あれしたん[病いにかかったりしたこと]が、悔しかったやろなって、あとからね、悲しみというかつらさというかね、なんかものすごいものがくるんじゃないかなあって」、というこのことばに、わたしは驚いた。特に、子どもは「悔しかったやろな」ということばと、「ものすごいものがくるんじゃないかな」ということばに。というのは、話の内容やその語り口にしろ、いままでの C さんとはちがう、なにかをわたしに感じさせたからである。いままでは、苦しんでいる子どものことばや所作を、母 C さんが悲しみ苦しむ話についてであった。しかし、C さんがいま語っているのは、若くして、短く終えてしまう子どもの悔しさについてである。このような話は、これまでの C さんにはないことであった。

「だから、そんなとき」のあとの、(間)・沈黙と、涙ながらの「若くしていのちを終えてしまう」ということばは、C さん自身の悔しさではなく、〈子ども〉の「悔しさ」を思う、母 C さんの悲しみそのものを表している。その悲しみは、まさに、〈ものすごいものがくる〉であった。この「ものすごいものがくる」という表現のし方は、母 C さんのなかの、ある強力な情動の塊があるように感じられた。しかし、どのような「ものすごいものがくる」のか、それについて、わたしは問いかけなかったし、語ってもらうこともできなかった。「あとからね」という一言は、C さんの悲しみをより深く重く感じさせた。

1. 3. 2 過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがある

「いまのいまって思っても、その過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがたくさんあるし」ということばに、わたしは強く惹きつけられた。それはどういうことかと。

「過ぎ去ってしまわないことには気づかないこと」の意味は、つぎのことばが示している。「あの子どももどういふかね、まえはこう、ぶつけてたんが、[……]、もう、いわないんですよ。(間)、そうだったらもっというてくれてたほうがいいのにな」ということばが。まえにぶつけていた「みな負担になって生きていたくないのー」ということばを、子どもは、いまはぶつけなくなった。そうであれば、「もっというてくれてたほうがいいのにな」と、Cさんは思う。ということは、Cさんにとっては、「ほんまに首をしめてほんとに自分も死のうかな」って、思うくらいつらかった、「みんな負担になって生きていたくない」ということばを、言わなくなったいまのほうが、もっとつらいのであった。それをCさんは、過ぎ去ったいま気づいたのである。Cさんは「みな負担になって生きているのはいや」いうてくれてた方がいいといいつつ、「いわれたらつらい」という。このことばは、なんともいいがたいCさんの揺れ動く哀しみを表している。

「過ぎ去ってしまわないことには気づかない」ということばは、子どもに「ごめんねとか、お母さん、いまにね、温泉いっしょに行こうね」とかいわれたそのとき、Cさんが思うこととして語られているように、わたしには感じられた。子どもから、「お母さん、ごめんね」ということばをきく母としては、いっそ、「もっとぶつけてくれたほうがいい」、と思うほどつらいことばだったことを表している。このような意味が『ごめんね』とか、『お母さん、いまにね、温泉いっしょに行こうね』とかいわれたりして」といった瞬間「間」・沈黙となった。そして、「[……] もう、人の、『みな負担になって生きていたくないのー』というときはね、ほんま首をしめてほんとに自分も死のうかなって、思うくらいつらかった」ということばが、ほとぼしるようにCさんから飛び出した。〈飛び出した〉ということばが示しているように、このことばは、『ごめんね』とか、『お母さん、いまにね、温泉いっしょに行こうね』ということばをCさんが発したとき、Cさんのなかからおのずと浮かび上がる、あるいは引き出され押し出されたことばのようにわたしには思われた。それは、一つのセットを成しているようにも見えた。

Cさんがいいかかったのはつまるどころ、「若くしてあれしたんが悔しかったんやろな」、この一言だったと、わたしはとらえた。それにしても「若くしてあれしたんが悔しかったんやろな」や、「過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがたくさんある」ということばで表された、Cさんにとっての意味は、わたしのことばにし得ない、母Cさんの思いの含蓄の深さを感じずにはいられなかった。

1. 3. 3 Cさんのことばを聴いていないわたし

この場面でのやりとりでは、わたしはほとんど、Cさんの意図が理解できないままであった。それは、Cさんのことばを、わたしが聴き取れないからだと思っていた。Cさんのことばに応えるわたしのCさんへの相づちは、見てのとおり、Cさんのことばを聴き取ったう

えでのものではない。Cさんのことばだけを見ていくと、Cさんは混乱どころか、一貫して自分のいいたいことを語っていた。Cさんに応えるわたしのことばそのものに、違和感があることをわたし自身が感じていた。それを、わたしは、わたし自身がCさんを混乱させていると思っていた。しかし、この場面を何回も見直しているうちに、混乱しているのは、Cさんではなく、わたし自身だったことに気づいた。このときのわたしは、Cさんのことばの意味が理解できなくて、Cさんのことばばかりに目を向けていたのである。ということは、Cさんのことばを聴いているわたし自身を、わたしは見えていなかったということである。

わたしがCさんのいいたいことを確実に聴き取り理解するためには、わたしは、みずから「若くして病気になったことが、〔子どもは〕悔しかったやろな」というCさんのことばの意味を把握していることを知る必要があった。そして、Cさんのことばを把握している自分を認識し、わたし自身がみずからそうであると意識していることが求められた。しかし、これは、Cさんのことばを聴いているそのときのわたしには、考えられないことであった。Cさんのことばの意味を理解するため行動するということはなかった。Cさんにとって最も大事な「若くして病気になったことが、〔子どもは〕悔しかったやろな」のことばの意味を明らかにすることはなかった。

Cさんのことばを、わたしが最後まで理解できなかったと思ったとき、わたしは、わたし自身の聴き方を見直すことにした。それは、Cさんを見たり聴いたりしている自分はなにをしていたのか、その自分に気づくことであった。それはわたしが、Cさんのことばを聴いているわたしの方へ向きを変える必要があった。それによって、Cさんのいいたいことがなんだったかを見いだした。〈若くして短く終わってしまう子どもの悔しさ〉を思うCさんの意図を。また、〈いまのいまって思っても、その過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがたくさんある〉というCさんの思いを。それらは、子どもを思う母としてのCさんの在り方を表していた。それはまた、Cさんという一人の人間が、あらたな次元を開いたことをわたしに感じさせるものであった。

2 Cさんの体験の意味が明らかになった

あることがきっかけで、わたしはCさんの苦しみや悲しみの意味を、ほんとうにはわかっていないことに気づいた。また、「まえは、でもいまは」ということばが気になりはじめた。それを検討するなかで、Cさんの真の姿を見いだせた。もう一つは、Cさんのことばが理解できなくて、「どういうことですか」と問いかけた。それによって、Cさんは母として生きるあらたな道を見いだすことになった。それは不思議な光景だった。

2. 1 あるとき、Cさんのことばが違って見えた

わたしは、Cさんの苦しみや悲しみの面ばかりに目を向けていた自分に気づいた。同時に、Cさんの喜びや幸せの側面が浮かび上がってきた。また、あるとき、「まえは、でもいまは」という、まえといまを対比して語るCさんのいい方が気になってきた。そのとき、わたしは、自分がCさんのことをわかっていなかった自分に気づいた。そのときCさんの全貌が見えたようだった。その光景は新鮮だった。これはなにを意味するのだろうか。

2. 1. 1 わたしの或る個人的体験

はじめに、Cさんのことばを見なおすきっかけとなった出来事を述べる。その出来事が、わたしに自分自身をふり返えさせることになった。そのふり返りは、いままで病いの子どもとともに生きてきたCさんを、わたしが、ほんとうにはわかっていなかったことを教えてくれた。また、わたしの生きてきたあれこれのすべてが間違っていたことにも気づかせてくれた。そのとき、病いの子どもとともに生きるというCさんにとっての意味がわかったような気がした。以下は、そのきっかけとなったエピソードである。

エピソード1

秋のある日、わたしはA先生の快気祝い・出版記念祝賀会に参加した。ホールには先生方の顔や多くの友人の顔があった。そこでわたしに見えたものは、年を重ねて生きてきた人々が目の前いっぱい広がっている一枚の絵のようだった。ある友人は、自分はがんだといった。妻を亡くした人もいた。また、他の友人は「子どもを事故で亡くした」といった。どこかでCさんのことを思いながら、「つらいな、わたしも親を亡くしたから」と彼にいった。すかさず彼は、「それはちがう」といった。わたしは、〈ああ、そうだ、ちがうのだ、子どもが親を亡くすのと、親が子どもを亡くすのとでは〉、と思った。わたしの知らない、子どもを亡くした親の深い深い悲しみがあるのだ、と思った。そしてCさんもそうなのだ。がんだといった最初の友人は、いつになくわたしに声をかけ、駅までの道を一緒に歩いた。その友人は「来てよかった」といった。帰り際に、これもはじめてのことだが、しっかり握手をし、さようならをいった。手の感触を残して。まるでもうこれが最後であるかのように。この日の出来事はある衝撃をもってわたしのこころに残った。生きる時間の短い面々。そして極めつけは、どんな人でも包容するあたたかさや深さをもったA先生が、なんと元気のなかったことか。この日、きっと、わたしはわたし自身の死の間近さを見たのだ。

エピソード2

その祝賀会から帰った翌日、わたしに嵐が襲った。わたしはそれを、自分一人では受けとめられなかった。大学の情報処理室で論文を書いていた友人に、「話を聴いてほしい」と言って、休憩室に行った。数人の学生が、ちらっと見ているのに気づいたが、ほとんど気にならなかった。怒涛のように押し寄せる情動に、わたし自身が圧倒された。ぼろぼろと涙を流しながら、母が死んだときのことなどを話していた。具体的になにを話したかは覚えていない。

エピソード3

エピソード2の体験のあと、最後のインタビューで、Cさんが「生きている限り自分が消滅しない限り、子どもが死んだ悲しみ苦しみは決してなくなる」といったことばの意味がわかったように思えた。そう、「悲しみはなくなるのだ」と。

わたしは間違っていた。ずっとずっと間違えてきた。わたしは「なくなる」と思っていたのだ。「死や悲しみを受容する」とはよく聞かしく、自分も言ってきた。その意味は、わたしにとっては受け入れたらなくなる、という意味だった。悲しいことや苦しいことが起こったとき、それを受け入れようとしてきた。それを消すために。確かにそれで一時はらくになるし、生きやすくなった。しかし、根本的には決してそれは無くなってはいなかったのだし、変わってはいなかったのである。受け入れるということはこれまで、わたしにとっては手段だったのである。しかし、受け入れるということは、悲しみは「無くならない」のであるからこそ、それを「引き受け」、悲しみと「共に生きる」ことである。そう思ったら、わたしが生きてきたあれこれのすべての間ちがいが連なって浮き上がってきた。わたしは、親を亡くす悲しさを生きるということは知っているが、子を亡くす親の気持ちはわからない。しかし、いま、Cさんが子どもの悲しみとともに生きるという意味はわかるような気がした。ここでやっと、悲しみを生きるCさんと、その悲しみをわかろうとするわたしの思いが重なったような気がした。Cさんが初回のインタビューでいった「娘のとぼとぼ歩く姿を見て、なにを考えているのだろう」からはじまって、最後の「娘が先に逝ったら」にいたる苦しみと悲しみの意味の全体を、わたしは了解した。

2. 1. 2 Cさんのことばを一つの体験としてとらえる

このとらえ直しは、わたしをどこか変えてしまった。「子どもが親を亡くすのと親が子どもを亡くすのはちがう」というこのことは、わたしのなかに深く刻まれた。わたしは、Cさんをほんとうにはわかっていなかったと思った。その思いが、Cさんがほんとうにいいたかったことはなにかを知るようわたしを駆り立てた。わたしは、Cさんのことばをかつてな

いほど集中して見直した。Cさんの悲しみつらさがほんとうに思いやられてしかたがなかった。この見直しによってわたしが感じとったのは、最初のインタビューで語られた、子どもが「生きていたくない」といったときのCさんの不安や怖れであった。また、「娘が逝ってしまった場合」の苦しみ悲しみであった。インタビューの四回目までは、これを語るための序章だったのではないかとさえ思った。治癒の見込みのない子どもの病いのもたらす、悲しみ苦しみが、母にとってどれほど深く重いか、わたしはそれを改めて感じるようになった。

一方、強い口調で語られた「どんなことをしてでも生きている限りは」「なにをしてでも生き延びなくちゃならん」「娘のおかげで充実している」というCさんの前向きなことばの意味が、わたしのなかで大きく膨らんできた。にもかかわらず、読み直す前には、前向きのこれらのことばを、わたしは、苦しみや悲しみほどには重視していなかったのである。ほんとうは、わたしは、これらのことばに込められた、Cさんの強力ないのちの息づかいを感じていたにもかかわらず、である。Cさんの「なんとしてでも生き延びる」という姿勢を、わたしは持ち合わせていないな、と密かに思いながら。

一面しか見ていない自分に気づいたとき、Cさんの苦しみ悲しみは、わたしのなかで、「なんとしてでも生き延びる」という前向きなことばと同一の線上に置かれた。すなわち、わたしは、Cさんの苦しみと喜び、その両方が、Cさんの一つの体験だったと捉え直したのである。そのとき、わたしは、全貌が見えた気がした。その光景は新鮮だった。極論すれば、いまはじめて見た、という感じだった。それにわたしは驚いた。

このようなCさんの一つの全体像が見えてきたところで、もう一つ気になることばが出てきた。それは、Cさんがなにごとかを語ろうとするときに使われる、「まえは、でもいまは」「いまは、でも最初は」ということばである。たとえば、「娘がとぼとぼと歩く後ろにね、〈最初のときは〉すごく不安だったけど、この子はこの子なりに生に向かって1日でも、充実しているんやなと思って、それに付き添える自分を幸せだなと思って。[……]、いま、ぜんぜんちがいますよね」、のように。あるいは、「いまは」、車いすの人見かけたら、子どもは必ず『押してあげてー』って。人を思いやるころ、人の痛みがわかってくる。〈まえは〉、〔車中で〕帽子を深くかぶって、マスクして〔酸素吸入のための鼻腔カテーテル〕、隠してたんが、〈この頃は〉、マスクは全然しないし、その恥ずかしいとかふっ切れて、〈この頃〉、全然ちがう。全部プラス思考ね、変わってきた」のように。つまり、「まえは」、「いままでは」、「最初は」、とCさんがいうときは、子どもの苦しむ様子を見て、Cさん自身がつらい思いをしていた頃のことを語るときに使われる。「いまは」、「この頃は」ということばは、子どもが前向きになって、歩く努力をしたり、人を思いやるようになったときのいい方である。〈まえ〉と〈いま〉とを対比する語り方を、わたしはなんども聴いた。これは、一つの特徴ともいえるCさんの表現の仕方である。

Cさんの「まえは」、「いまは」ということばを聴くたびに、わたしは、それはどういうことかなと、ちらっと、思っただけで、にもかかわらず、わたしはそれを主題としては取り上げなかった。ところが、前述の、苦しみと喜びを全体としてとらえたあと、このいい方が、な

ぜか気になってきたのである。それは、単に「まえは」苦しかったけれども「いまは」いい方向へ向かっている。このように、ただ、それだけを伝えるためのことばなのか。Cさんには、なにか意味があるのではないか。「最初の」苦しみや悲しみと、「いま」の幸せや感謝、それを対比して語るとき、Cさんは、バランスを取ろうとしているのではないかと、わたしは推測した。いま述べた例でいえば、「娘がとぼとぼと歩く後ろにね、〈最初のときは〉すごく不安だった、というとき、Cさんは、「娘がとぼとぼと歩く後ろ姿を見て、すごく不安だった、そのとき、その場に立ち帰り、そのときのすごい不安を、いま生きているのではないか。とすれば、Cさんのいまの不安は、前向きの「この子はこの子なり生に向かって、一日でもと充実している」〈いまを〉語ることによって、自分を生気づける。そのことによってCさんは、こころの平衡を保とうとしているとも考えられた。

あるいは、苦しく悲しくつらい「最初の頃の」体験と、「いま」の幸せと歓び、その両方を生きたCさんは、自分自身がその転変に驚嘆している、それを伝えたかったのではないだろうか。そして、そのように生きてきた子どもと自分を、Cさん自身が愛おしくも思っている、それを伝えたかったのではないだろうか。それこそが、Cさんが望んでいたことであつたから。けっきょく、「まえ」と「いま」を比較するというこの意味は、子どもが病いにかかったことによって、苦しみや悲しみと幸せと歓びの両方を生きた、その自分を語り、伝えたかったのではないかとわたしは推測した。それは、前章2「話すことで、子どもが病気になったことで、聴いてもらうことで」におけるCさんのことばからも考えられることであつた。

2. 1. 3 体験の統一は、あらたな領域を創りだした

Cさんの苦しみと歓びの両方を一つの体験としてとらえたそのとき、全貌が見えた気がした。その光景は新鮮だった。極論すれば、いまはじめて見た、という感じだった。それにわたしは驚いた。同時にわたしはそれを了解したのであつた。それは、わたしがわたし自身になった体験でもあつた。このようなことが起こつたのは、Cさんのことばをかつてないほど集中して見直すことによってであつた。それにしても、集中するというわたしの行為のなにか、Cさんの苦しみと悲しみの深さと重さを改めて感じさせることになつたのか。また、幸せや感謝という歓びを浮かび上がらせたのだろうか。

わたしがCさんのことばをかつてないほど集中して見直す、つまり、注意するということは、苦しみや悲しみのことばだけではなく、幸せや歓びのことばが、初回から語られ、すでにそこにあつたのである。それがいま、わたしのなかで図として浮かび上がってきた。それによって、わたしは苦しみや悲しみと幸せや歓びとの両方のなかに、一つのあたらしい分節化を実現したのである。所与としての幸せや歓びのことばは、いままでは単に地平として先にことばにされていただけだった。それがいまでは、苦しみや悲しみも幸せや歓びも合わ

せて、その全体のなかで、あらたな領域を真に形成するようになったのである。しかし、これはあくまでもわたし自身のなかでのわたしにとっての解釈である。Cさんにとっては、インタビューの最初から、「まえは、でもいまは」というその体験やその意味は、すでにCさん自身のものとして獲得されていたのかもしれない。Cさんの苦しみや悲しみのみを注視していたわたしにとってのあらたな領域の形成であった。それが、わたしが、いまはじめて見る新鮮なCさんの姿だった。それにわたしは驚き、わたしはそれを了解したのであった。

Cさんの苦しみと悲しみの深さと重さを改めて感じさせ、また、幸せや喜びが浮かび上がってきた、というそれは、すでにそこにあったものが、図として浮かび上がったということになる。そしてそこに浮かび上がった幸せや喜びによって、わたしはそのなかに、苦しみや悲しみと、幸せや喜びという、一つのあたらしい意味として創りだした」のである。その所与は、いままでは、単に地平として先に語られていただけのものであった。しかしそれは、いまやCさんの苦しみや悲しみと幸せや喜びとの全体的世界のなかで、苦しみと喜びを生きるというあらたな領域を真に形成するようになったということである。それは、Cさんのことばをかつてないほど集中し、見直したことによって形成されたものといえるだろう。

ところでもう一つ、わたしが気になった、「最初は、でもいまは」と対比するいい方について、わたしはつぎのように述べた。まえといまの両方を語ることによって、こころの平衡を保とうとしていた。また、「最初の頃の」つらい体験と、「いま」の幸せと喜び、その両方を生きたその転変に、Cさん自身が驚嘆していた。あるいは、そのように生きてきた子どもと自分を、Cさん自身が愛おしくも思っている。Cさんはそれらを伝えたかったのではないかとわたしは推測した。しかし、Cさんが語ったこと自体は、Cさんが、それを現に生きたことである。そしてそれらは、二章においてCさんみずから語ったように、Cさん自身が「こう在りたいと願う指針、道を方向づける」ものであった。

語るということは、自分のいいたいことを、そこにいるだれかに伝えるということである。それは、いってみれば、Cさんの生き方そのものを表すものとして捉えられた。それはCさんのことばを聴いてきたわたし自身のある偏りを示すものであり、その偏りがわたしを、わたしならしめていた。それは、わたしがわたしを知ることであった。そしてそれは、わたしの喜びでもあった。

2. 2 「どういうことですか」

話のなかで、Cさんがなにをいいたいのかわからないとき、わたしが、問いかける。それによって、Cさんは自分のいったことを、あらためて語りなおすことになった。そこにくり広げられた内容と語り方は、驚くほど明快だった。また、Cさんの情動的所作の表現は、聴くわたしにとっては、ことばより以上にCさんのいいたいことを表していた。これは聴くわたしのオヤツという感覚が、それを可能にしたのだといえるだろう。それについて二つの

場面をとおして検討してみたい。

2. 2. 1 オヤツという感じ

語られる C さんのことばに、わたしはオヤツとなにかを感じる。わたしは「どういうことですか」、とたずねる。それに応えて C さんは自分の体験を語りなおされる。そこで明らかになったのは、子どもの病いの過酷な現実であった。その話のあと、C さんは「でも、母にしてみたら、いまのいま、子どもがやろうとしていることに手助けしてあげなければならぬ」と、決断したかのように語られた。このことばは、C さんに、おのずから現れたあたらしい道であった。

子どもが職業技術専門学校に通うとき、C さんはその子に付き添って行く。朝、電車が来ていても、子どもは呼吸が苦しくて、いったんベンチに座って一服しなければ歩けない。それで、つぎの電車に乗ることになる。C さんは車内に入って席を確保し、子どもが乗って来るのを待っている。そのようなときのことを C さんは次のように語ってくれた。

C ギューツとしがみついても〔電車内に〕入って、空いたところにピヤツと座って子どもが入ってくるのを待っているんですけど、そのときでも、こんなときになんでこないまでしてとかね、と思うときがあるんですけど、「お母さん二年我慢してね、二年我慢してね」で、「肺の手術すんだら一とお返しするからね」と、いうてるけれどね、もう、そういう話しになるとダメ、この子なに考えてるんやろう、(泣いているような声で) 元気になれるんやと信じてるんやとかね、思いもって、(うーん) だから、もっとね、あれやったら、ほかのことしてやったほうがいいちがうかなとか、考えながらもね、(うーん) いまのいま頑張っているんやなーって。

N どういうことですか？

C というのは、肺の手術しかいまの感じではないですよ、それも手術の〔成功の〕確率というのは40%、成功率低いんですよ、〔手術〕しても、再発の恐れはある、だから、まあ、いうたら、なに年生きてなに年あれでという保証というのは、なにもないですよ。いまは、酸素ついているから、行動できるいう状態で、あたし、やから、らくして電動車いすでもなんでも、あれして車いすでもしてやったらと思うけれど、あの子なりに自分で努力してる (うーん)。ゆっくりでも歩かないと筋肉が衰えるし、(間)、だから、「なにもこない一所懸命しんどい思いしてやったところでなにをするの」って、人から質問される場合があるんですよ。でもね、親にしてみたら、いまのいま (うーん) やろうとしていることに手助けしてあげなければいけない。(2-8)

わたしが「どういうことですか」と問いかけたのは、Cさんのことばや所作にエッとオヤツとかいう感じをもったからだった。「ギューツとしがみついても」ということばのあと、「そのときでも」というCさんのことばに、わたしはエッ、どういうこと？ と、疑問になった。「お母さん二年我慢してね、二年我慢してね、[……] 元気になれるんや、と信じているんやな」と思いもって「思って」ということばは、わたしには、その前後のことばとの関連がわからなかった。また、「もう、そういう話になるとダメ」という否定のことばとその声の調子に、わたしの身体は一瞬、こわばった。「この子なりに考えているんやろう、元気になれると信じているんやな」ということばは、母Cさんが、暗に子どもの病いはもう治らないと思っていることを表わしている。子どもはそれを知らないのであろうか。わたしはこのことばのもつ意味に、暗然とし、胸が締め付けられる思いをした。「ダメ」という強い声、泣いているような声で話すCさんの身ぶり、音声的所作は、ことば以上に意味そのものを表している。そして、「だから、もっとね、あれやったら、ほかのこととしてやったほうが」という「あれ」、「ほかの」とは、なにを指すのか。また、「だから」とは、まえとそのあとのことばと、どのような関係を表わそうとしているか、やはり疑問だった。二度の（うーん）という身体から押し出されるような、わたしのことばにならないことばは、Cさんがなにをいいたいのかはっきりしないことへの、わたしの感じを表わしている。そんな状況のなかでCさんが、とうとうにCさんが「いまのいま頑張っているんやなーって」、といった瞬間、わたしは「どういうことですか」と問いかけた。この問いは、Cさんのことばに、何度かオヤツと感じていたわたしの疑問が、一気に噴き出した感じだった。ここで語られたCさんの表現全体が、断片的であいまいであったから。Cさんのあいまいな表現の仕方そのものが、一つの所作としてわたしに語りかけた。なにか重大なことが秘められているように感じられた。それがわたしを強く惹きつけた。しかし、けっきょくのところで、最後の「いまのいま頑張っているんやなー」ということばが、わたしに強い違和感を与えた。この感じが、問うようわたしを駆り立てた。「どういうことですか」と。これらはわたしの明確な意識のもとに起こったものではない。身体で感じたそれが、わたしを突き動かしたのである。

2. 2. 2 明らかになった体験

「どういうことですか」というこの問いかけに、Cさんは、すかさず、「というのは」と、あらたまったいい方で自分の体験を語り直された。そこに表わされたものは、実に具体的に明快であった。「というのは、肺の手術しかいまの感じではないんですよ。それも手術の確率というのは40%、成功率低いんです。[手術]しても、再発の恐れはある、だから、まあ、いうたら、何年生きて何年あれでという保証というのはなにもないんです」。このことばとその表現の仕方には、無駄なものは一切なかった。しかも、子どもの病いの現実を的確に表していた。そのうえに、「まあ、言ってみれば」とCさんみずから、「あと何年生きられる

か、保証がない。酸素吸入をしているから行動できている状態で」と、結論づけるかのよう
に語られたのだった。断片的で、それでいて重大なにかが隠されているように感じられてい
たものが、ここに明らかにされたという感じだった。「あと何年生きられるか保証がない」
という子どものいのちにかかわる話であった。わが子のいのちにかかわる体験を語ろうと
する母にとって、それはあまりに過酷ともいえる。Cさんはつらく、ことばにするのをため
られずにはいられなかった。「どういうことですか」と、わたしが問うまでのあいまいな
表現は、過酷な現状をあらわにするのがためられた、その現れであったのかもしれない。
そして、「というのは」と、あらたまったいい方ではじめられた、そのいい方は、わたしに
は、なにかあるものを〈思いきる〉かのように感じられた。ためらいを捨て、いま思ってい
ることを語ろうと、意を決したかのように。それにしてもこの厳しい現実を、あまりに的確
に表すCさんの姿にわたしは、どこか身ぶるいするような凄ささえ感じた。

「何年生きられるか保証がない、やから〔だから〕、らくして電動いすでもなんでもして、
と思う〈けれど〉、あの子なりに努力している、ゆっくりでも歩かないと筋肉が衰えるし」
ということばのあとの沈黙の「間」は、なにを表わしているのだから。わたしは、それがな
んとも気になってしかたがなかった。何年生きられるか保証がない、この動かしがたい現実
を改めて再確認したいま、「なにもこない一所懸命やったところでなにをするの」という他の
人から質問が刺激となり、その瞬間に、「でも、親にしてみたら、いまのいま〔子どもの〕
やろうとしていることに手助けしてあげなければならない」ということばが浮かび上がっ
たということであろうか。このことばは、冒頭にCさん自身がいった「そのときでも、こ
んなときに、なんでこないまでして、とか思うときがある」ということばと重なる。つまり、
Cさんは、他の人と同じことを思っていたということである。「なんでこない一所懸命〔…
…〕、と他の人がいう」と、Cさんがいつているそのとき、Cさんは、自分自身でさえも、
らくした方がいいと思っていたことに、あらためて気づいたのかもしれない。苦しい思いを
しないでも、らくしたら、というCさん自身の考えと、筋肉が衰えるからと、歩く努力を
している子どもの考えとは相容れない。Cさんは、自分が「あの子なりに努力している、歩
かないと筋肉が衰えるし」といった瞬間、子どものその姿が、まるで絵のように鮮明に見え
たのかもしれない。「だから」ということばは、「一所懸命やったところでなにをするの」とい
う他の人に対してであると同時に、自分自身に対することばだったのではないだろうか。そ
のときCさんの口から、「でも、親にしてみたら、いまのいま〔子どもの〕やろうとしてい
ることに手助けしてあげなければならない」ということばが発せられた。というより、こと
ばが飛びだした。Cさんは、このことばを発したことによってあらためて、子どもと自分
のおかれている現実が明確になったのだと、わたしにはとらえられた。「でも、親にしてみ
れば、〔……〕」ということばとその語調は、母Cさんにあらたな意味をもたらした。「間」は、
このことばが現れるための「間」だったのかもしれない。

ところで、「でも、親にしてみれば〔……〕」ということばとその語調は、わたしにはCさ
んがいま、それを決断したかのように感じられた。これはどういうことであろうか。これが

また、あらたな疑問となった。

2. 2. 3 でも、親にしてみたら

Cさんは、子どもの病いの現実を目に浮かぶように見た。Cさんは、そのことに、強く撃たれたのではないだろうか。だからこそ、他の人がなんといおうと「わたしはこの子の親である」と、まざまざ実感したのかもしれない。その意味での「でも、親にしてみれば、[……]」だったのではなかったろうか。このことばは、これから先、母である自分が、いまいまこの子がやろうとしていることを手助けする親として「身を据えた」ことを表しているように、わたしには捉えられた。それはまた、「いまのいま [子どもの] やろうとしていることに手助けしてあげなければならない」親として、Cさんがあらためて決意した瞬間だったのではないだろうか。

Cさんが「でも、親にしてみれば、[……]」と、とつぜんのようにいったその背景には、先に述べたように、他の人だけではなく、「そんな無理してね、しんどいのに苦しまなくてってもね、ほそぼそでもいいんじゃないか」という、夫 [病いの子] の両親のことばがあった。また障害者の親から、「海外旅行にでも行った方がいいんじゃない」、といわれたこともあった。このようなことばにCさんは、一つの圧力のようなものを感じていたのではないだろうか。そのような状況のなかで、「だから、なにもこない一所懸命したところでなにをするの」という他の人のことばは、母としてCさんのところを突き動かした。とっさに「でもね、親にしてみれば、[……] 手助けしてあげなければ」ということばが飛び出した。すなわち、「子どもの手助けをしなければ」、というCさんの決断ともいえることばは、昨日今日の思いつきではなかったのである。「でも、親にしてみたら、[……] 手助けしてあげなければ」ということばを、わたしはCさんが「いま決断したかのように」、といった。しかし、決断は、いま、だとしても、その決断にいたるには準備過程があったであろう。医師の診断以前から息苦しさを訴え続けている子どもとともに生きてきた過程のなかで、少しずつ準備されていた。また、他の人のことばやまなざしのなかで生きてきた、それが決断にいたる或るなにかとして蓄積され、準備されてきたものであったのかもしれない。したがって、他の人の「なにもこない一所懸命してなになるの」ということばは、潜在していたものが、機が熟したかのように一気に噴き出すそのきっかけとなったことの現れ、といえるかもしれない。潜在していたものは、そのときのわたしには、見えもせず、聞こえもしなかった。ただわたしには、「間」や「だから」、「でも、親にしてみたら」などのことばやその表現のし方が、わたしになにかを感じさせた。そしてそれはわたしをくぎ付けにした。Cさんのそれらの表現がいま、決断したかのようにわたしに感じられたのだった。潜在していたものとは、単にインタビューで語られたものだけではなく、インタビューの場面では語らなかったもの、あるいはまったく語られなかったさまざまな出来事をもはらんでいたということだ

あろう。

ここまで来てはじめて、「でもね、親にしてみれば、いまのいまやろうとしていることに手助けしてあげなければならない」ということばの意味が、いま生まれたのだと、わたしに理解できた。この経験は、Cさんに「人間の価値観や生きること」について語らせることにもなり、Cさんにとってあらたな道を拓く大きな出来事ともなった。

本章のまとめ

本章1においては、三つの場面をとおして検討した。また、本章2では、二つの場面を検討した。前者では、Cさんのことばを受けとめられないわたし、Cさんの状況を見無視して一方的な態度をとったわたし、Cさんのことばを最後まで聴き取れなかったわたしについて検討した。Cさんのことばを受けとめられないのは、死の怖れを否認するわたしの過去の体験がかかわっていることが、明らかになった。一方的な態度をとったわたしは、Cさんの「でもね」によってわれに返った。そのとき、Cさんは自分のあらたな体験を一気に語ってくれた。それはCさんとわたしの両者の体験を顕在化させ、一方を他方によって了解することであった。わたしはCさんの「でもね」に助けられ、救われた。Cさんのことばを最後まで聴き取れなかったわたしは、自分自身が混乱していることを知った。わたしはCさんのことばばかりを見て、Cさんのことばを聴いているわたし自身を見ていなかったのだ。Cさんのことばを聴こうとするわたしは、それを聴いているわたしに向きを変えることが必要だった。後者においては、友人の一言が、Cさんの苦しみや悲しみをほんとうにはわかっていないわたしを知らしめた。それは、苦しみや喜び、あるいは〈まえ〉と〈いま〉との両方を現に生きた、それを祝祭するものとして語り、伝えているCさんを、わたしは見いだした。また、Cさんのことばの意味をわたしは理解できず、わたしが問いかけたことで、Cさんは、子どもが何年生きられるか保証がない現実を明らかにした。それが、Cさんに「親にしてみれば、子どもがいまのいまやろうとしていることを、手助けしなければならない」ということばが生まれることにつながったのかもしれない。

第四章 創造としての語ることと聴くこと

語るということとはどういうことかについて、Cさんが語ってくれたことばと所作をおして検討した(第二章)。また、聴くということとはどういうことかを、Cさんのことばを聴くわたしの体験をおして明らかにしてきた(第三章)。これらはなにを表そうとしているのか。本章では、それを主にメルロ＝ポンティの言語論と身体論を援用して考えてみたい。

構成はつぎのとおりである。

- 1 語るということ
- 2 聴くということ
- 3 他者とのかかわりのなかで
- 4 話すことで、聴いてもらうことで
- 5 木村 敏の「あいだ」

1 語るということ

Cさんが語ってくれたのは、病いの子どもの苦しみと歓びの体験についてであった。また、それらを顧みて、そこに現れたあらたなCさんの生き方だった。それらをCさんは、「頭がおかしくなる」とか「もっと人生には深いもんがある」などのことばで表された。Cさんの体験の意味が明らかになる、語るということとはなにを表わすのだろうか。それをことばの創造、情動的所作と身ぶり、表現することという視点から見てみたい。

1. 1 ことばを創造する

呼吸が苦しくて肩で息をする子どもの姿を見てCさんは、「生かしてやっているのが酷」とまで思うほど苦しんでいた。どんな姿勢を取ってもしんどいという子どもを目の当たりにして、いのちの危機を感じてもCさんにはなにもできない。このようななかかなら突然飛び出すように現れたのが「頭がおかしくなる」ということばであった。それをわたしは、ことばの「創造」としてとらえた。「代われるもんなら変わってやりたい」「でも、親にしてみれば、いまのいまやろうとしていることを手助けしてあげなければならない」ということばも同様に、あらたに見いだされた創造としてのことばとわたしはとらえた。ではこれらのことばが、どのような意味で「創造」といえるのか。

メルロ＝ポンティは、所作についてつぎのように述べている。「もしも言葉が真正な言葉

であるならば、言葉はあらたな意味を立てるのであり、それはあたかも、もしも所作が初めての所作であるならば、所作はじめて一つの人間的意味を対象にあたえるのと事情はおなじである。のみならず、いま獲得された意味が実はあたらしい意味であった、というふうでなければならない」(PhP1 317) と。いま述べた C さんのことばは真正なことばである。つまり「呼吸が苦しくて肩で息をする子どもの姿を見て C さんは、「生かしてやっているのが酷」とまで思うほど苦しんでいた。[……]、いのちの危機を感じても C さんにはなにもしない」ということばで表される状況は事実である。そのなかからはじめて C さんに現れたあたらしい意味をもつ「頭がおかしくなる」ということばであった。このことばを、わたしはメルロ＝ポンティのいうところの「真正なことば」ととらえた。

このような C さんの生きたことばをわたしは、「語る言葉 (parole parlante)」⁵¹ ととらえた。語ることばとは「意味的意図が発生状態で見いだせることばである」(PhP1 321)。ここでいうところのことばの創造とは、辞書にも記されていない「新語を造るということではない」。C さんが「もう、どういうんか、ほんまにね、こう、こうしてこんな感じですよ」といいつつ、犬ころのような感じで苦しむ子どもを見て、C さんは、その姿を自分の身体で表して見せることによってしか、自分のいいたいことを伝えられなかったからであろう。あるいは、そのときの切迫したつらい心情が、ことばで説明するより、直接動作で見せるという仕方を促したのかもしれない。そのような状況のなかで現れた「頭がおかしくなる」ということばであった。C さんは、なんともことばにし得ない状態のなかで、なんとかことばにしようとするとき、C さんは、すでに自分の手持ちのものとなっている「頭がおかしくなる」ということばが飛び出した。ただし、その意味や使い方を変えるという仕方である。このようにして C さんは、いま経験している子どもの苦しみという意味をあらたにとらえたのである。もちろん、「頭がおかしくなる」ということばは、特別に目あたらしいことばではなく、一般的に使われていることばである。「創造」というには異をとらえたくることばかもしれない。しかし、C さんがいま体験している状況を表すことばの意味は、他のだれでもなく、C さん固有の体験のなかからあらたに見いだされたことばである。わたしのいうことばの創造とはこのような意味での創造である。したがって、「子どもの首をしめて自分も死のうか」や「代われるもんなら代わってやりたい」、「親にしてみれば、いまのいま、子どものやろうとしていることに手助けしてあげなければならない」ということばも同様に、わたしにはことばの「創造」としてとえられた。

⁵¹ 語る言葉について、メルロ＝ポンティはつぎのように述べている。「言語 (langages)、つまり構成された語彙ならびに統辞の体系、経験的に存在している〈表現手段〉は、言葉 (parole) の行為の寄託物であり沈殿物であって、この行為の中でこそ、まだ定式化されていない意味が外部に表現される手段をみだすだけでなく、またさらに対自的な存在ともなるのであり、真に意味として創造されるのである」(PhP1 321) と。そして「語る言葉 (parole parlante)」とは「意味的意図が発生状態で見いだせるような言葉である。ここではいかなる自然的対象によっても定義づけられないようなある一つの意味のなかで、実存が分極作用をおこすのであり、実存がふたたび自己と合体しようとするのも〔自然的〕存在の彼岸においてであり、それゆえ実存は、己れ自身の非＝存在の経験的支えとして、言葉を創造するわけである」(PhP1 321-322) と。

1. 2 情動的所作と身ぶり

第二章 1. 1 「頭がおかしくなる」で記述したように、Cさんは子どもの呼吸の苦しさを表すのに、ことばだけではなく、声の調子や自分自身の身体で表現した。つぎのような仕方。「こう、こうして、こんなですよ」「横になったら横になるがしんどいっていうんですよ」、「ハーッと深く息を吸い込んで、ほんで、これが一番らくだ、いうんですよ」と。「～ですよ」ということばは、子どもの苦しさをCさん自身が苦しみ、それをわたしに訴えるかのように聴こえた。

また、「こう、こうして、こんなですよ、といいながら、正座して両手をまえにつき、まえかがみになり、その姿勢を実際にやって見せた。「これでも肩で息してるんですよ」と、Cさん自身が自分で「ハーッと深い息を吸う」動作をして見せた。Cさんが「～ですよ」と、訴えるようないい方をしたり、実際にハーッと肩で息をする動作をして見せる、それは、Cさんが、こどもの呼吸の苦しさを見て、Cさんが強い不安や怖れを感じているのが伝わった。「わーどうしようかなという感じ、なににもできないでしょう」ということばが、それを表していた。

Cさんのこのような、ことばにともなうアクセントや顔の表情などの身体的所作は、Cさんの体験の意味を、より深く伝える力をもっているように、わたしは感じとれた。

1. 2. 1 所作を理解する

Cさんが自分の体験を表現するとき、ことばだけではなく音声的所作や身ぶりに、より一層Cさんのいいたいことが現れていることを感じとってきた。たとえば、「生きているのはいや」という子どものことばを聴いたときの体験をCさんは、消え入るような声、急に大きくなった声、トーンの落ちる声、泣いているような声で表された。また別な場面で、呼吸が苦しくて犬ころが上を向くような子どもの姿を見たそれを、Cさんは自分の身体で実際にやって見せるという仕方でも表された。このような音声的所作や身体的所作から、わたしは「生きていたくない」ということば、「子どもが上向きで」ということば以上に、「消え入るような声、急に大きくなった声」、あるいは、自分の身体で実際にやって見せるという所作のなかに、Cさんのつらさや哀しみそのものを読みとった(第二章)。

このようなCさんの所作の意味は、メルロ＝ポンティによると、「与えられるのではなくて了解されるのであり、つまり、観察者自身の一つの行為によって把握し直されるのである」(PhP1 303)。ここでの「了解する」「一つの行為によって把握し直される」ということとは、どういうことであろうか。「了解する」⁵²ということばをわたしたちは、日常的に使っ

⁵² 「了解するとは、その全体的な志向を奪還することであって、この場合の全体的志向とは、[……] たとえば知覚物の〈諸特性〉とか [……] に表現されている、それ独自の存在仕方である」(PhP1 20)。

ている。しかし、その意味は？ とあらためて問うてみると、つねにあいまいなもので、「おっしゃることはわかりました」くらいの認識しかない。いま述べた C さんの「消え入るような声」などの所作の意味は、「与えられるのではなくてわたしに「了解される」のである。それは、C さんのことばを聴いているわたし自身の「最初はそうまで」、と語りかけるわたしの「行為」によって「把握し直される」のである。つまり、C さんのことばを聴き理解したうえで、それをわたしはわたしの見方に即して把握し直すのである。別ないい方をすれば、C さんの所作を読み取ろうとするわたしの積極的存在仕方である

この「了解する」ということばの意味をもっと具体的に見てみよう。「了解する」とは、「生きているのはいや」という子どものことばを聴いて、「子どもの首をしめて自分も死のうか」ということばで表現されている、「それ独自の存在仕方である」(PhP1 20)。C さんにとっての「それ独自の存在仕方である」とは、どういうことであろうか。「生きているのはいや」という子どものことばが、「子どもの首をしめて自分も死のうか」と母 C さんに思わせた。それは母 C さんにとって、子どもは、まさにかげがえのない C さん独自の存在であるから。子どもの「生きているのはいや」ということばを聴いて、母 C さんもいっしょに死んでしまいたいと思うのは、ごく自然なことであろう。このような意味で、「子どもの首をしめて自分も死のうか」ということばで表現されているそれは、C さんの在り方を表していたのである。このような C さんの所作が、C さんの独自の在り方だとわたしにわかったとき、それは C さんとわたしとの両者に、所作の了解が獲得されたのだとわたしには考えられた。

このように C さんの所作をわたしが了解するということそれは、わたしの知識を媒介するということはない。C さんが体験したことを見たり聴いたりしたときに、わたしの身体が感じる、それをとおして了解するのである。

1. 2. 2 情動的所作は思想の源泉である

C さんが語ってくれる体験の意味は、いま述べたように、ことばだけではなく、音声的所作や身体的身ぶりによっても表された。それらの所作は、消え入るような声、急に大きくなった声、トーンの落ちる声のように、情動的意味を表していた。このような情動的所作が C さんの体験の意味の根本をなしているようにわたしには捉えられた(第二章、第三章)。このような意味で、情動的所作のもつ意味は、語ることに聴くことにおいては重要な位置を占めるものといえるだろう。

「みんなの負担になって生きていくのはいや」という子どものことばのあとの一瞬の「間」—これも一つの所作であるが—は、C さんにとっては、ことばではいい表せないつらいなにかをはらんでいるかのようだった。母 C さんの泣くしぐさ、消え入るような声や急に大きくなった声など、音声的所作や身ぶりに現れる情動的所作は、C さん自身が「子どもの首を

しめて自分も死のうか」というほどの苦しみを表していたのであった。このような音声的所作や身体的所作は、ことばではいい表せない意味の深さや重み拡がりを表す。

メルロ＝ポンティは、所作についてつぎのように述べている。「会話がことばだけでなしにアクセントや調子や所作や表情などによっても意味作用を行うのと同じように、また、こうした意味の補足が開示するところがもはや話者の思想ではなくてその思想の源泉、彼の根本的な存在し方である」と (PhP1 251)。このことばにわたしは驚き打たれた。「アクセントや調子や所作や表情など」が、「思想の源泉、彼の根本的な存在し方である」ということばに。それはわたしの想像をはるかに超えた観方であった。所作についての、このような指摘にわたしは、ある深い感慨を覚えた。語る人の所作の意味が、不十分なところをおぎない付けたし、明らかにする。それが語る人の思想のみなもとであり、根本的な存在し方を明らかにするとは、驚きながらも共感できる、納得できるものとして捉えられた。わたしたちが日々生きているなかでのなにげない所作—この所作はアクセントや調子や表情を含む—が、思想のみなもと、根本的な存在仕方の明らかにする、ということ。

わたしは、いままで所作のもつこのような働きを重視してきたが、所作に対するメルロ＝ポンティの考え方を知ったいま、所作の意味をあらためて問い直すことを求められることになった。

わたしの経験において、自分がなにかを語ろうとするとき、先に感情がこみあげ、ことばはとぎれとぎれになる。あるいはことばを発した瞬間、涙がどっと溢れる。同時に、わたしの発したことばは「これぞわたしのいいたかったことだ」ところから思う。そして、そのことばの表すものがわたしそのもの、ほんとうのわたしだと、あとづけだけれど、そう思えるのである。そのような状況のなかで現れる情動的所作が、語る人の思想のみなもと、根本的な存在の仕方を表すもの、それは、語る人のみならず話を聴くわたしにとっても、いままで以上に見逃せない、聴き逃せない貴重なものとなった。

1. 3 表現すること

「語るとはどういうことか」とわたしが問うとき、ことばだけではなく、音声的身体的所作のなかにも意味を見だしてきた。たとえば、「頭がおかしくなる」ということばが見いだされるまでには、「もう、どういふんか、ほんまにね」などの言語的所作にも意味を感じとった。それらのことばと所作はどれも生きいきとしてわたしを惹きつけ、驚かせ不思議を感じさせた (第二章、第三章)。自分の体験の意味をこのように表現する、それは、どういふことであろうか。メルロ＝ポンティの言語に関することばや考え方を援用してその意味を見いだしたい。

1. 3. 1 人間の価値観と生きること

障害者の母親から「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃない」ということばを聞いたときのことを、Cさんは「人間の価値観、生きていることとは、かすかな望みに向かってしんどいけど、苦しいけどやっていく、一日でも」、と語ってくれた。Cさんの「人間の価値観、生きていること」ということばが現れたのは、「[子どもが] 毎日外に出てくれるという感じが、ああ、もう、[生きているのは] いやだいやだと思っていた子どもが、それを忘れて一つでも [パソコンに] 打ち込んでいる」、このいまの日々の暮らしと対比してのことばであった。子どものこの暮らしから見て、「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃない」ということばは、Cさんにとっては、「このお母さんなに考えていらっしゃるのかな、海外旅行行ったところで娘が癒されるもんかどうか」と、異議を唱えたいことばであった。そのようななかで、Cさんにおもわずという感じで現れたのが、「人間の価値観、生きていることとは」ということばであった。そして「かすかな望みに向かってしんどいけど、苦しいけれど、一日でもやっていく、そこにある」、「この子はこの子なりに生に向かって一日でも充実している。それに付き添える自分を幸せ」という体験は、Cさんにとってはじめてのことであつたろう。また、その体験を人間の価値観や生きていることとしてとらえるのもはじめてのことであつただろう。このことは、Cさんの経験に「一つのあらたな領野または次元をきり開く」(PhP1 300) ことになったと考えられる。

また、Cさんが「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃない」、という障害者の母のことばを聞いたとき、Cさんは、「海外旅行行ったところで、娘のところが癒されるもんかどうか」、と自分の考えを語ってくれた。そしてCさんは、「人間の価値観、生きていること」について、つぎのようにいった。「かすかな望みに向かってしんどいけど、苦しいけどやっていく」ことにある、と。自分の体験をこのように表現するということは、Cさんにとっては、Cさん自身が自分の価値観を、自分自身が生きているということの意味を獲得したのだ、とわたしはとらえた。障害者の母のことばを聞いたとき、自分の体験の意味を語っているCさんのそれは、「そうしないでは無言のままではしか現前しないところの意味を、わたしたち [ここではCさん] が習得し獲得してゆく操作だ」(S1 141) といえるだろう。「そうしないでは無言のままではしか現前しないところの意味」とは、もし、Cさんが障害者の母のことばを聞いたとき、自分の体験の意味を誰にも、もちろんわたしにも語らないままであつたなら、その意味をCさんが習得し獲得することはなかつただろう。

1. 3. 2 語られないことば

「頭がおかしくなる」ということばと、このことばが発せられるまでの所作は、かつて、わたしが経験したことのないものであつた。「頭がおかしくなる」ということばは、とつぜ

ん、口を衝いてでた、という感じで現れた、その現れ方にわたしは驚いた。また、このことばが現れるまでの、C さんのことばやことばに伴う声のトーンや身体で表すさまざまな動作に、わたしは驚嘆したのだった。自分の意図をこのようなかたちで表す、この「語る行為」とはなんなのだろうか。それを、C さんが実際に語ってくれたことばや所作をとおして、あらためて考えてみたい。

「もう、どういうのかな、ほんまにね」と、いい淀むような表現の仕方は、なにかを語ろうとしているが、なにをいいたいのか、C さん自身がわかっていない、あるいはいいたいことがなにかはわかっているが、それをどのように表わすか、それがわかっていない、そのような語り方に見えた。ためらいながら語りはじめた C さんのこの行動は、「なにかを意味しようという志向のまわりを手さぐりしている」(S1 69) ようだった。こう、こうしてこんな感じですよ」と、犬ころが上向く感じの姿勢を、正座して両手を膝の前について前かがみになるその姿勢を、実際にやって見せる。また、「ハーッと」息を深く吸い込む子どもの様子をして見せる。「こういう感じが一番らく、これでも、肩で息してるんですよ。横になったら横になるのがしんどいっていうんですよ」と、訴えるように語りかける。子どもの苦しむ姿を伝える。このことばや所作は、いま、子どもに起こっている出来事を目前にした C さんの知覚経験、それを生きた C さんの体験を表している。しかし、呼吸が苦しくて肩で息をし、横になるのがしんどい、という子どものことばやしぐさを、C さんが見たり聴いたりしたそのとき、C さんの体験は、ここで語られたことばや所作以外に、ことばでは表しきれない数多くの「発言される以前のことば」⁵³ であっただろうことが想像できる。この「発言される以前のことば」の意味は、C さんがことばや所作で語ってくれた、ことばとことばの、あるいはさまざまな所作のあいだににじみでているのが、感じとれる。たとえば、すでに述べた「もう、どういうのかな、ほんまにね」と、いい淀むように語りはじめたそのいい方に。また、「こう、こうして」といいながら、C さんは自分の身体を使った動作で、子どもの苦しげな姿で表したり、訴えるようないい方に。これらのことばや身体的身ぶりによる表現の仕方は、直接的ではないが、いまにも子どもの呼吸が止まってしまいそうな不安や怖れが、その背景にある、とわたしには感じられた。

そして C さんは、「ほんで犬ころが上向く感じで、だから哀れというかなんかね、生かしてやってることが酷、という感じ」といった。このことばは、いままでの呼吸の苦しきについてのことばとは異なった感じがした。犬ころが上向く感じの子どもの姿を「哀れというかなんかね、生かしてやってることが酷」ということばは、なにを意味しているのだろうか。

「生かしてやっっていることが酷」ということばは、「生きているより、いつそ死んでしまったほうが、子どもにはらくだ」、という意味を暗に示している。それは C さんが、子どもの

⁵³ 「我々は発言される以前の言葉を、言葉をとり巻くことを止めずそれなしでは言葉が何ものも語ることのないあの沈黙の背景を考察しなければならぬ。[……]、空隙もなく、語り止めぬ沈黙もない。だが、出来あがりつつあるいいまわしの意味は、[……] 語のあいだににじみでる側面的ないし斜面的意味である。――それは言語ないし物語の装置から新しい音を引き出すためにそれをゆり動かす新しい方法である」(S1 69-70)。

苦しみが、死を超えるほどの痛みだと感じていることの現れでもあるといえるだろう。

子どもの呼吸が止まってしまいそうな不安や怖れと、犬ころのような子どもの姿が哀れで、生かしてやっけることが酷というほどの C さんの苦しみと、この二つの苦しみが混じりあいそこに現れたのが、「頭がおかしくなる」ということばだった。このことばは、力強い声の調子で突然飛び出すような勢いで現れた。その瞬間、わたしは C さんがいいかかったのは、まさにこのことばだったのではないかと、わたしは思った。もちろん、C さんも同様に感じたのではないかと、わたしは考えた。

ちなみに「頭がおかしくなる」ということばは、極度の不安や怖れ、生かしてやっけるのが酷というほどの哀しみや苦しみに見舞われ、精神が壊れてしまうような状況を表すことばだと、わたしはとらえた。このような状況は、C さんの身体的情動的な所作からかもし出される強力ななにかを感じさせ、その時点で「頭がおかしくなる」ということばを発する準備状態がつくられつつあったと、わたしには感じられた。しかしそれは、このことばを聞いたあとにわたしが思ったことである。

2 聴くということ

前項では、「語るということ」とはどういうことかについて検討してきた。ここでは、C さんの話を聴くわたしの体験について、それはどういうことかを検討する。そこで明らかになったのは、聴くわたし自身であった。「C さんのことばを受けとめられなかったわたし」とか、「C さんのことばを聴いているわたしを見ていないわたし」が見えた。わたしがそのことを自覚したとき、C さんの体験の意味があらたな姿でわたしに現れたのだった。このようなことが起こるのは、そこにある力が働いているように考えられた。それはなになのか見てみたい。それを明らかにするために、「感覚する」、「話を導くもの」、「聴くわたしを見ていないわたし」ということばを手がかりにして考えてみよう。

2. 1 感覚する

「ギュッとしがみついても〔電車内に〕入って、空いたところにピヤッと座って、子どもが入ってくるのを待っているんですけど、[……]、だから、もっとね、あれやったら、ほかのことしてやったほうがいいちがうかなとか、考えながらもね、いまのいま頑張っているんやなーって」(第三章 2. 2 「どういうことですか」参照) という C さんのことばを聴いて、わたしは〈オヤッ〉と感じた。オヤッというこの感覚は、わたしに明確ななにかをわたしに与えてはくれない。しかし、C さんの「元氣になれると信じているんやな」とか「もっとね、あれやったら」ということばに、重大ななにかをはらんでいるのを感じさせた。それ

らのことばは、それがなにを表わそうとしているのか、それに向かうようわたしを駆り立てた。それが「どういうことですか」という、わたしの問いかけとなった。Cさんのことばから感じとれるこの感覚は、「わたしが現に見ているものの向こうになおなにか存在があること、[……]、そして感知できる存在ばかりではなく、さらにどんな感覚的によっても汲みつくせない対象の深みがあるということ」(PhP2 22)を感じさせる。このときのわたしは、見ているものや聴いているもののなかに没入しているわけではなかった。なにが起こっているのか、漠然とした感覚のままである。この感覚は、すぐさまわたしを、それがなにかを明らかにする方へ向かわせる。あるいは、それはなにかをよく見ようとし、よく聴こうとする。その目はある一つのことや物に注がれ、耳は、ある一つのことばの音声的所作に聴き耳を立てる。それは行動となる。

わたしが感じたオヤッという感覚は、それがなにを表わすものか、Cさんのことばなり、所作なりをよく見ようとするわたしを、「どういうことですか」と問う行動へ向かわせた。わたしのこの問いで、子どもの病いの現実にはCさん自身が向き合うことになった。Cさんが明確に知った子どもの病いの現実にはCさんを動かし、「親としてみれば、いまのいま、子どもがやろうとしていることに手助けしなければならない」ということばを発することになったと考えられる。そしてこのことは、Cさんのあらたな生き方を開くことになったとわたしはとらえた。それは同時に、わたしが「どういうことですか」と問う、その問いの働きを、わたしが知ることでもあった。この体験は、自分のとったそのときの言動に立ち帰り、そのときの経験をあらためて見なおし、その意味を明らかにしようとするこの反省は、「わたし[Cさん]の存在の可能性の一つとして出現させる」⁵⁴ 力があることをわたしに教えてくれた。

2. 2 話を導くもの

Cさんがなにごとかを語りはじめると、その話はある着地点に着いたときに終了する。着地点とは、自分のいいたいことがなんであれ、Cさんがいいたいことが言えたときである。それは、とつぜん現れる。そこに現れたことばの意味と、そのいい方にCさんが納得し了解したことが、わたしに伝わってくる。それは、Cさんが話しているうちに自然と方向づけられ、そこにあらたななにかが生まれる。このような話の展開は、第二章や第三章で記述したCさんのどの話にもつうじるものである。目には見えなくても話を導くなにかが見える、それはなんなのであろうか。また、そのときCさんの話を聴いているわたしはどのような存在となるのか。それを明らかにしてみよう。

⁵⁴ 「徹底的な反省、すなわち自分自身を理解しようとする反省の任務は、逆説的に言って、世界の非反省的な経験をふたたび見いだして、そのなかへ検証の態度と反省的操作をつれもどし、こうして反省をわたしの存在の可能性の一つとして出現させることにある」(PhP2 58)。

そのために、「どういうことですか」という主題で記述した場面（2-8）を再度とりあげて考えてみる（第三章参照）。この場面は、話しはじめと着地点とその過程がよく見える。ここでは、話の展開がわかるようにその場面を要約しながら進めていく。

Cさんの最初のことば⁵⁵は、Cさんがなにをいいたいのかわからなかった。わたしは「どういうことですか」と問いかけた。それに応じてCさんは、病いの子どもは、あと何年生きられるか保証がないという現実を語った。そのような状況のなかにいる子どもに、車いすにしようか、筋肉が衰えないように歩く努力をしている子どもの想いを優先するか、思いあぐねていた。そこに「なにもこない一所懸命やったところでなにをするの」、と他の人にいわれた。その直後、Cさんは「でもね、親にしてみたら、いまのいまやろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」と、いった。このことばが、Cさんの着地点だった。あらたな生き方が現れた。このような展開を、時間性という観点から、メルロ＝ポンティのいう時間性という考え方を援用して考えてみたい。

Cさんがはじめに語ってくれたことばは、Cさんがなにを語ろうとしているか、わたしにははっきりとはわからなかった。それで、わたしは「どういうことですか」と問いかけた。Cさんは、子どもの病いが、何年生きられるか保証がないという現状を、これ以上ない明確なことばで語ってくれた。このことばは、いま置かれている子どもと自分の現実を、Cさん自身が知るところのものとなったと考えられる。そのうえで、「車いすにした方がいいか、筋肉が衰えないように歩く努力をしている子どもの想いを優先するか」という、Cさんの問題をここで語った。それはさらに、「なにもこない一所懸命しんどい思いしてやったところでなにをするの」という、他の人からのことばを聴き、その瞬間Cさんに、「親にしてみたら、いまのいまやろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」ということばが見いだされた。それがCさんの着地点だった。

このような話の展開が、冒頭で述べた、「Cさんがなにごとかを語りはじめると、その話はある着地点に着いたときに終了する」ということの実際である。この展開は、病いの子どもの現実と、車いすにするかどうかの問題となった。そして、「なにもこない一所懸命しんどい思いしてやったところでなにをするの」という人のことばとが総合され、そこに一つのあらたな意味が現れた、ということではないだろうか。「親にしてみたら、いまのいまやろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」という未来を拓くことばが。このことばはCさんが、あらたに拓いた未来だったのである。

ところで、このような展開のなかでの、「どういうことですか」というわたしの問いは、Cさんにとって、そして聴くわたしにとってどのような意味をもつのであろうか。それはすでに述べたように、みずから語った子どもの病いの現状を、Cさん自身が、明確なことばで表現したことにあるといえるだろう。明確なことばで表現されたそれを、Cさんは自分の耳で聴き、そのとき、子どもと自分の置かれている状況が明らかになった。同時に、その自己

⁵⁵ 最初のことばとは、第三章2. 2. 1における、「ギューッとしがみついても [……]」というCさんのことばを指す。

を自己として知ることにもなった。そのとき C さんに、あらたな「親にしてみたら、いまのいまやろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」という道が開けたと考えられた。

このことばは、わたしの問いかけが、少なくとも、一つのきっかけにはなつたと、わたしは思っている。それと、その後の現実をあらわにすることばが、C さんの話の展開を決定づけたといえるだろう。このような結果を導くようなことになる、聴くものの「問いかけ」の働く力を、わたしはこの体験から、あらためて学んだ。C さんのことばのなかで、自分のオヤツという感じを敏感に感じ取り、それを見逃さず問いかけるという行為は、思いもかけないことばが語られる可能性を秘めているのをわたしは知った⁵⁶。したがって、聴くという行為は、ただ、語る人のことばを聴くというだけにとどまらない。語っている人自身が、なにも気にしないことであっても、聴く人が気になることであるならば、それをきっかけに問いかける行為は、語る人をより深く理解する可能性が開けることを、わたしは学んだ。このオヤツという感じからはじまり、いくつかの過程を踏み、それを一つの意味に集約する、それらの一つ一つを子どもも C さんもわたしもともに生きる、そこにあらたなことばを見いだす。そこには、話を導く力が働いていたのであった。

2. 3 聴くわたしを見ていないわたし

「過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがある」という C さんのことばを聴き取れなかった（第三章 1. 3 「聴くわたしを見ていないわたし」参照）。この場面でのやりとりでは、わたしはほとんど、C さんの意図が理解できないままであった。それは、C さんのことばを、わたしが聴き取れないからだと思っていた。C さんのことばに答えるわたしの C さんへの相づちは、C さんのことばをよく聴き取ったうでのものではなかった。C さんのことばだけを見ていくと、C さんは混乱どころか、一貫して自分のいいたいことを語っていた。C さんに答えるわたしのことばは、そこに、違和感があることをわたし自身が感じていた。それで、わたし自身が C さんを混乱させていると思っていた。しかし、この場面を何回も見直しているうちに、混乱しているのは、C さんではなく、わたし自身だったことに気づいた。このときのわたしは、C さんのことばの意味が理解できなくて、C さんのことばばかりに目を向けていた。ということは、C さんのことばを聴いているわたし自身を、わたしは見ていなかったということである。

若くして病気になることを子どもは悔しかっただろうと、C さんが思いやっていることを、わたしは知ってはいた。しかし、そのことばの意味するものが、C さんにとって、どれほどのものかを、わたしは掴んではいなかった。C さんのこのことばの意味を掴むことができないわたしを、わたし自身気づいていなかった。気づいていない自分に気づいたのは、

⁵⁶ 第二章 2 においても、同様の体験について記述した。

Cさんの「悔しかったろうな」ということばを聴いたとき、わたしが感じた違和感があったことが浮かんできたことによつてであった。また、Cさんのことばや所作を記述したそれをなんどもふり返ったときであった。

Cさんのことばを、わたしが最後まで理解できなかつたと思ったとき、わたしは、わたし自身の聴き方を見直すことにした。それは、Cさんのことばを聴いている自分はどんな自分かに気づくことであった。それはつまり、「知覚している自分の方へと向きを変えること」(PhP2 53)であった。わたしが自分に目を向けたとき、Cさんのいいたいことがなんだったかが見えてきた。若くして早く終わってしまう子どもはどれほどの悔しかったろうか、その悔しさを、Cさんはひしひしと感じとっていた。「いまのいまって思っている、その過ぎ去ってしまわないことには気づかないことがたくさんある」ということに気づき、Cさんは哀しかった。このようなことばは、子どもを思うCさんの生き方そのものを十分表している。しかし、わたしはCさんのこの深い想いを聴きとげ、受けとめることもできなかつた。この経験は、哀しいことではあるが、わたしがわたしを知る貴重な場でもあった。

3 他者とのかかわりのなかで

Cさんやわたしに現れたことばは、他者とのかかわりのなかで見いだされたものであった。たとえば、Cさんが、人間の価値観や生きていることの〔意味〕を「かすかな望みに向かってしんどいけど苦しいけどやっていく」、そのなかに見いだしたのは、「海外旅行行ったら」という障害者の母親とのあいだにおいてであった。また、「でもね」というCさんのことばによつて、わたしがCさんの話に集中して聴く姿勢に戻ると、Cさんは、あらたな体験を爆発するかのように語ってくれた。さらに、Cさんが話すこと、それをわたしに聴いてもらうことによつてCさんは、「Cさん自身がこう在りたいと願う指針・道が方向付けられた」のであった(第二章、第三章参照)。このような体験は、Cさんの場合にしろ、わたしの場合にしろ、他者とのあいだに、いいかえれば、他者との対話のなかから生まれたあらたなことばであった。

では、他者との対話のなかからこのようなことばや意味が生まれるとはどういうことであろうか。対話のどこにそのような働きや力があるのでしょうか。「Cさんとわたしのかかわり」、「Cさんと障害者の母とのかかわり」を順に見ていこう。

3. 1 Cさんとわたしのかかわり

Cさんのことばは、口から飛び出すように生き生きと現れた。「頭がおかしくなる」、「代わられるもんなら代わってやりたい」ということばで。このようなCさんのことばや所作で、

Cさんはなにをしたのか、なにをしようとしたのか、あらためてその問いが浮かびあがった。このことを「頭がおかしくなる」ということばで表された意味をとおして考えてみよう。

これは、呼吸の苦しさに喘ぐ子どもの姿を見たり、聴いたりしたときの、Cさんの体験についての話だった。そこで目立ったのは、子どもの苦しむ様子についての、〈訴えるような〉いい方であった。「こう、こうしてこんな感じですよ」、「これでも肩で息をしているんですよ」、「横になったら横になるのがしんどいっていうんですよ」、「これが一番らくだ、いうんですよ」のように。この〈ですよ〉といういい方は、単に「苦しんでいる子どもを見るつらさを訴えているだけではなくて、そのつらさを〈分かってもらいたい〉というメッセージでもあっただろう。

また、「代われるもんなら代わってやりたい」ということばも、やはり、〈分かってもらいたい〉という意図を強く感じさせた。子どものいのちが、あと二年くらいで消えてしまうかもしれないと思ったときのことばである。「身体のだこも悪くならないで経過せねばならないでしょう？」のように、問いかけるような、同意を求めるようないい方だった。〈でしょう〉といういい方は、手術で亡くなるかもしれない、という不安を強調していた。そこにまた、つらさを〈わかてもらいたい〉というCさんの意図が見えかくれしていた。ここに、Cさんのことばがなにをしようとしたかが語られている。けっきょく、子どものいまの状況は、場合によっては死にいたるかもしれない。その苦しさつらさを訴えたい、それを〈わかてもらいたい〉というのが、Cさんが「したかった」ことだったと、わたしはあらためて感じた。

メルロ=ポンティのつぎのことばは、上記のわたしの問いに類似している。「ことばがわれわれのためになにを遂行してくれるのか」(PM 183)という問いである。Cさんが語ってくれたことばがなにを遂行してくれたのか、それは、いま置かれている子どもの状況は、場合によってはいのちが消えてしまうかもしれない。Cさんのそのつらさを、いま、そばに居るわたしに伝え、わかてもらいたい、というCさんの意図を遂行したと、わたしは考えた。

いまCさんがここで語ったことばや所作は、子どもの置かれている状況から現れる特異な体験である。それを表現することばや所作も、Cさん固有のものである。このことは、つぎのメルロ=ポンティのことばが、その意味をよく表している。「ことばとはわたしのもっとも固有なものとして有しているもの、わたしの生産性ではあるが、にもかかわらずそれは、生産性によって意味をつくり、それを伝達せんがための生産性でしかないのである」(PM 183-180)。これをCさんに置きかえてみる。ことばとは、Cさんのもっとも固有なものとして有しているもの、Cさんの生産性であるが、にもかかわらずそれは、生産性によって意味をつくり、それを伝達するための生産性でしかなかった。ということは、ことばとはCさんのもっとも固有なものとして有しているもの、Cさんがつくりだすものであるが、そのつくりだすものによって、意味をつくり、それを他のだれかに伝えるための生産性でしかない。この意味をもっと明確にしてみたい。伝達するとは、人から人へ伝達するのであり、Cさん個人の手から離れ、伝達した人と共有することになる。ことばとは、個人がつくりだすので

あっても、それを伝達すると、ことばは他者と共有し共通の意味となる。ことばの固有性と、それを伝達することで共通のことばとなる。

ここに、ことばが「なにをしたか」というわたしの問いに対する答えがある。ことばとは固有のもので、Cさんが産みだし、生産性によって意味をつくり、それを他者に伝達するためだった。しかし、ことばは伝えるだけではなく、その意味を「理解してもらい、受けとめてもらう」ことをなすためのことばでもあると、Cさんのことばが教えている。それがCさんがここで「なしたこと」であった。

メルロ=ポンティは、「聴いたり理解したりする他者が、わたしのもっとも個人的な部分でわたしに結びついてくる」(PM 187)という。このことは、「ことばとはわたしのもっとも固有なものとして有しているもの」ということばと関連づけられる。ここには、ことばのもっとも重要ななにかが潜んでいる。この二つのことばを関連づけてみよう。Cさんのことばを聴いたり理解したりするわたしが、Cさんのもっとも個人的な部分でCさんに結びついてくる。Cさんがわたしに語ってくれることばは、どれも、Cさんのもっとも固有なものとして在り、Cさんのもっとも個人的な部分でCさんに結びつく。そのことばにわたしは圧倒され、惹きつけられた。それは本論文執筆へと生气づける基となった。

3. 2 Cさんと障害者の母とのかかわり

「海外旅行とか行った方がいいんじゃない」という、障害者の母親のことばに、Cさんは、「[……]、ただ、あたしにしたら毎日外に出てくれるという感じが、ああ、もう、いやだいやだと思ってたんが、[それを]忘れて一つでも打ち込んで [いる]」、「人間の価値観てね、生きてるあれって」といった。わたしはCさんの「人間の価値観てね、生きてるあれって」ということばに驚いた。というのは、いままでのCさんだったら、「ただ、あたしにしたら毎日外に出てくれる感じが、ああ、もう、いやだいやだと思ってたんが、[それを]忘れて一つでも打ち込んで [いる]」、という実際に知覚したことに対してCさんが感じたり思ったりしたことばだけで終わっていた。それなのに、「人間の価値観てね、生きてるあれって」とつづく人間の生き方に関することばが語られたことに、わたしは意外な感じがしたのである。そして、Cさんはその価値、生きていることの現実を〈かすかな望みに向かってしんどいけれど苦しいけどやっていく、そんなんにある〉と語った。このことばは、わたしたちの生きることの、その価値の、ある意味では原点、あるいは根源的な在り方をいい表しているようにわたしには思えた。Cさんはまた、みな、親戚の人の「気の毒やね、なんでそんなん背負わなあかんのん」、「なにも悪いことしてないのに」ということばにたいしても、「人生なんてね、価値観なんてね」と、いった。そして、Cさんはその〈人生や価値観〉を、「[……] [この子は] この子なりに考えているんだな、最初はすごく不安だったけど、この子はこの子なりに生に向かって一日でもというんか、充実しているんだな」と思って。それに付き

添える自分をすごく幸せ」だといった（第二章1.5「海外旅行行ったら」および1.6「生に向かって一日でも」参照）。このことばはわたしには、わたしたちが生きていく上での原点あるいは根源的な在り方を表しているように思えた。しかし、この〈人間の価値観〉とはなんなのだろうか。Cさんのことばの一つひとつをていねいに見なおし、そこにあるものとおして、その意味を考えてみよう。

障害者の母の「海外旅行とか行った方がいいんじゃない」ということばに対して、Cさんは、それを「あら、このお母さん、なに考えてらっしゃるのかな。海外旅行行ったところで、娘のところが癒されるもんかどうか」と疑問を呈した。つまり、障害者の母のことばを否定し、認めていない。そして、ただ、あたしにしたら、「〈子どもが〉毎日外に出てくれるという思いが、もう、いやだいやだと思ってたんが、[それを]忘れて一つでも打ち込んで[いる]」、その姿がそこにある、それだけでCさんにはやすらぎであり、大切に思われるのであった。このような思いのなかから、「人間の価値観てね、生きてるあれって」ということばが浮かびあがったと、わたしには感じられた。このことは、「子どもが毎日外に出てくれる、いやだいやだと思ってたんが、それを忘れて一つでも打ち込んでいる」、この事実としての状況を評価した。それを、Cさんが「価値のなかに入り込ませた」(S1 110)、と考えられる。もし、Cさんが、価値のなかに入りこませたとすれば、「その行為は、つねに範例的なものとして残り、他の状況のなかで別の外観のもとで生きつづける」(同上)のであった。その例が次のCさんのことばである。Cさんが、みなに「気の毒やね、なんでそんなん背負わないかんのかん」、といわれたり、親戚の人に「なにも悪いことしてないのに」ということばを聴いたとき、やはり、Cさんは〈人生や価値観〉について語られた。この場合のCさんの価値観とは、「[この子は] この子なりに考えているんだな [……]。この子はこの子なりに生に向かって一日でも充実しているんだな」と思って、それに付き添える自分をすごく幸せ」だと思ふことであつた。ということは、すなわち、Cさんの「一日でも」と生に向かう、また、子どもに「付き添う」という行為は、その行為自体がCさんにひとつの場を開き、そればかりか、ひとつの世界を築きあげ、ある未来を描いた、といえるだろう⁵⁷。

ところで、「海外旅行とか行った方がいいんじゃない」ということばを投げかけられたとき、それに対してCさんは、「あら、このお母さん、なに考えていらっしゃるのかな。海外旅行行ったところで、娘のところが癒されるもんかどうか」と疑問を呈した。また、まわりの方の「いや一気の毒やね、なんでそんなん背負わないかんのかん」や「なにも悪いことしてないのにね」ということばに向かつて、Cさんは、「あ、そういう意味でしか見られないのかな」と、他の人とはちがう自分の思いを語った。〈でも、そうじゃないんだよ、子どもの病気によってありがたいんだよ〉と。このときのCさんは、「自分にいつて聞かすだけ」ということばが示すように、そのとき自分の思いを他の人に直接返したわけではなかった。C

⁵⁷ 「彼〔ヘーゲル〕が目ざしているのは、内的なものが外的ものと化すその瞬間であり、われわれが他人や世界のなかに入りこみ、他人や世界がわれわれのなかに入りこむ回転ないし方向転換である。いいかえれば、行為である。行為をとおして、わたしはあらゆるものに責任ある存在になる」(S1 100)。

さんはインタビューでそれをわたしに話しているときに語られたものである。すなわち「そうじゃないんだよ、この子の病気によってありがたい」、ということばで語られた C さんの思いは、それ以前に、まだ表現されていない C さんによる C さんの体験だったのである (PhP2 296)。

このような体験についてメルロ＝ポンティは、つぎのように述べている。「黙せるコギト、自己への自己の現前は、実存そのものであり、あらゆる哲学に先立っているが、それが己を認識するのは、ただ脅かされた場合の限界状況においてだけ、たとえば、死の不安とかわたしに対する他者のまなざしの不安とかにおいてのみである」 (PhP2 297)。つまり、C さんの体験、C さんという自己が C さんの目の前に現れるということは、C さんに対する他者のまなざしの不安がなかったら、C さんの価値観、生きることとしての「かすかな望みに向かってしんどいけれど苦しいけどやっていく」ということばが、C さんに生まれるということとはなかっただろう、とわたしには思えるのである。C さんに対する「他者のまなざしの不安」とは、「海外旅行とか行った方がいいんじゃない」とか「気の毒やね、なんでそんなに背負わないかんのん」、「なにも悪いことしてないのにね」という他者のまなざしに、C さんは不安を感じていたのではないだろうか。「海外旅行とか行った方がいいんじゃない」ということばは、暗に〈もう治るといことがないなら〉という思いが込められているようにも見える。「気の毒やね、なんでそんなに背負わないかんのん」「なにも悪いことしてないのにね」ということばは、C さん自身が「同情してくださっているんだけど、へんな同情は絶対だめ」ということばが示すように、〈かわいそうな人〉と決めつけるような「他者のまなざし」が、C さんに、反発やくやしきや不安を抱かせたのではないだろうか。このような思いが、C さんに〈人間の価値観、生きていること〉について考えさせたのではないだろうか。

C さんがこのような価値観、生きることについて語るということは、C さんがみなのことばに対して、さまざまな体験をした、それをことばにしているうちに、自然と現れた C さんの価値観、生きているということに言及することになった、ということのようだった。このような体験を C さんが語ろうとするとき、そのときどきを現に生きてきた C さんの体験が、「すでにいわれたものを上まわっている」 (S1 128) ことを表しているようにわたしには捉えられた。「すでにいわれたものを上まわっている」とは、C さんの体験が既存のことばを上まわっているということである。病の子どもとの生活のなかでさまざまに起こった具体的な体験は、既存のことばでは表現しきれない。だから、創造的なことばが出た。〈かすかな望みに向かってしんどいけれど苦しいけどやっていくそんなにある〉〈この子はこの子なりに生に向かって一日でも、充実しているんだなと思って、それに付き添える自分をすごく幸せやなと思う〉ということばが。そしてこのことばは、C さんにとっての人間の価値、生きることであった。このことは、メルロ＝ポンティのつぎの言葉が、よくいい表している。「個人的生、表現、認識、それに歴史、これらは目的や概念に向かって斜行的に進むのであって、直進するのではない。あまり意識的に求められたものは獲得されぬ。ところが逆に、その瞑想生活のなかで、観念や価値の自然発生的な源を解き放ち得たものにとっては、

それらは欠けることがない」(S1 128) と。Cさんの「価値観、生きること」ということばは、自分の体験をどのように表わそうかと意識的に考えられたものではない。体験を語ろうとすると、ことばがひとりで口を衝いて出たという感じだった。

このことは、他者の「海外旅行行ったら」ということばを聴いて、「娘のところが癒されるかどうか」や「世のなかって、自分が思うようにいっしょではないんだな」など、Cさんは他者のことばに疑問を呈し、自分の考えを表現している。また、電車のなかでも、「それぞれの目がある」という。そして、「いや一気の毒やね」とか、「なにも悪いことしてないのにね」ということばに対して、Cさんはこういった。〈そういう意味でしか見られていないのかな、でもそうじゃないんだよ、もっとちがう、終わりにきてね、気づいていなかったこと、経験できなかったこと、この子の病気によってありがたいんだよ〉と、自分の考えをはっきりと語った。その考えも、Cさんが感じた〈気の毒に、つまり、かわいそうに〉のような「同情」とはまったく違った、〈[人生の] 終わりにきてね、気づかなかったこと、経験できなかったこと、この子の病気によってありがたいんだよ〉という感謝のことばであった。そして、「自分にいうて聞かすだけですけれどね」ということばやその表現の仕方は、他の人に、そしてそれを聴いているわたしに語りかけているように感じた。というより、Cさんが自分自身を見つめ、そこにあるものが自然とことばになった、それが〈人間の価値観や生きること〉だったのである。それは、日常生活のなかでは意識に昇って来ない。そこにはCさんの観念や価値観の自然発生的な源を解き放つ、ある力が発揮されたかのようであった。

4 話すことで聴いてもらうことで

そもそもこのテーマを取り上げた理由は、インタビューの最後に、わたしの問いかけに応じてくれたCさんのことばにあった。つまり、「今日で終わりですが、なにか感じたこと、気づかれたこと、変わったことなどありませんでしたか」という問いかけに対して、〈話すことで、聴いていただくこと[以後聴いてもらうこととする]で、こう在りたいと願う指針、道が方向付けられた」(第二章2参照)と応えられたのである。これはどういうことか。話すこと、聴いてもらうことのなになが、どのようにして、Cさん自身が〈こう在りたいと願う指針、道〉を方向付けたのか、と。

Cさんの〈こう在りたいと願う指針・道が方向付けられた〉ということばが見いだされたのは、Cさんが〈話したこと、聴いてもらったこと〉に与かっている。この〈話したこと、聴いてもらうこと〉とは、Cさんが明確なかたちでいったわけではないが、Cさんが過去に語ってくれたさまざまな体験である。それはCさんが、「顧みて」といったことばから推測できる。話したことは、たとえば、〈みなに負担をかけて生きているのはいや〉という子どものことばを聴いたときの「子どもの首をしめて自分も死のうかしら」、という苦しみの体験であった(第三章1 体験の意味を聴き取れなかった、を参照)。また、Cさんのことば

が理解できなくて、「どういうことですか」と問いかけたときのCさんの「何年生きられるか保証がない」という体験であった。あるいは、本論では語られなかった体験もあったかもしれない。これらの体験を「話すことで、聴いてもらうことで」Cさんは、「自分自身が願う指針、道が方向付けられた」。

ところで、過去の体験を話し、聴いてもらうことで、Cさんが「こう在りたいと願う指針、道が方向づけられた」とするならば、話したことのなにがどのようにして、方向付けたのかを明らかにすべきだろう。その手がかりを、Cさんの「話したことで聴いてもらうことで」ということばのなかから見いだしてみよう。

いま述べた「みなに負担をかけて生きているのはいや」という子どものことばを聴いたとき、「子どもの首をしめて自分も死のうかしら」と思ったという体験を、Cさんはなんどもくり返し語られた(第3章)。また、Cさんのことばが理解できなくて、「どういうことですか」と問いかけたとき、Cさんは、子どもが何年生きられるか保証はない。電動車いすにしてらくするか迷っている。「なにもこない一所懸命しんどい思いしたところでなにをするの」という人の声も聞いた。その直後Cさんは、「でもね、親にしてみたら、いまのいま〔子どもが〕やろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」ということばを発した。このことば、Cさんの未来に向けての、未来を拓くことばであった。とすれば、Cさんが話したこと、聴いてもらったことは、このような苦しみと同時に喜びでもある体験の意味であったのである。とすると、Cさんが〈話したことで聴いてもらうことで〉というとき、これらの過去の体験は、たとえ、それがどれほど苦しくつらい体験であっても、Cさんには、ある意味ではすでに受け入れられていたのではないだろうか。また、苦しみやつらさの体験があったればこそ、喜びの体験の意味はこころに残るものではなかったろうか。

とすれば、Cさんの体験を「話すことによって」というのは、すでに述べた子どもの苦しみや喜びを見たり聴いたりした事実としての状況を、Cさんがみずから自己のものとしていたということかもしれない。そのとき、Cさんは〈Cさん自身がこう在りたいと願う道〉へ向かうCさんへと「変革」⁵⁸していたのではないかとわたしはとらえた。

Cさんが自分の体験を話し、聴いてもらうことは、かならずしも一つのことだけを語るわけではないだろう。自分の体験を話しているうちに、別ななにかがに入り込む。それは、語るCさんが意識してそうするのではなく、とつぜん、Cさんに湧き上がってくるということもあるだろう、それらは最後には、ある一つの意味をつくりだし、あらたなことばが産みだされる(PhP1 281-282)かもしれない。

ところで、「語ること」については多くの人に語られているが、「聴いてもらうということ」については、わたしはほとんど聞いたことがない。「聴いてもらう」ということばは、語る側からのことばである。わたしはこのことばにも言及しておきたい。なぜなら、「聴いても

⁵⁸ 「われわれは現にあるとおりのものとして存在しているのは、かならず事実的状况を土台としてのことであるが、しかもその事実的状况をわれわれはみずからおのがものとし、一種の脱出(échappement)によってたえず変革してゆくのである」(PhP1 281-282)。

らう」ということは、語る人にとっては、引いては聴く人にとっても大きな意味があるとわたしには思えるからである。わたしの体験では、自分が語ったことを、どのように聴いてもらったかが、もっとも肝心なことである。それは、語るものは、自分の語っている意味をしっかりと聴いてくれているか、肌で感じながら、自分のいいたいことを自然と加減するようになる。つまり、聴いてもらうものにとっては、語る人のどんな些細な身体的な所作も、身体全体で感じとるのである。「一言でも発し、じれったそうな身ぶりをするだけで、すでに、彼はわたしを超越することを止めることになる。そこに声があり、思惟がある」(PhP2 230)と、メルロ=ポンティがいうように。

上記のことは、聴く人は、語る人のことばだけではなく所作によっても意味を感じとることである。このことは、自分のいいたいことを聴いてもらっていない、受けとめてもらえていないと感じたら、もう、話を聴いてもらいたいという気持ちは消えてしまう。聴く人への信頼は瞬時に消えてしまうこともあるだろう。それに対して、話を聴いてもらっていると感じたら、語ろうと思わなくてもことばが口から飛び出すように語りつづける。そのとき、語るものは、いいたいことがいえて、〈聴いてもらった〉という気になるのである。Cさんの〈聴いてもらうこと〉ということばのもつ意味は、このような聴き方を指しているようにわたしには思えた。

Cさんは、自分が話したことを聴いてもらうことで、けっきょくは、〈こう在りたいと願う指針、道が方向付けられた〉のであった。

このような感覚が語る人にも聴く人にも感じられたとき、両者に安心と信頼が生まれ、あふれんばかりのことばや所作がおのずから現れ、語る人も聴く人も、それを見ることになるだろう。Cさんの、〈こう在りたいと願う指針、道が方向付けられた〉というこのことばは、このような状況下で生まれたと考えられる。

4. 1 めぐり合いとタイミング

このような自分の変化をCさんは、みずから「そこが違ったことでしょうね」(第二章2.4 人にいえるようになった) といった。それは、子どもが発病した当初の厳しい状況をのり越えて、いま生きることの意味がCさんに捉えなおされたことを表している。そのときCさんは、〈Cさん自身がこう在りたいと願う道を方向づけられた〉ことを、Cさん自身が確信したことの現れだとわたしは見た。それはCさんが自分の願う道を獲得したことを表してもいるといえるだろう。

しかし、Cさんがこのように変化したのは、Cさんのことばによれば、〈ちょうどタイミングよくわたしがCさんの家に入りこんだ〉ことにあった。また、CさんとCさんの話を聴くわたしが〈めぐり合った〉ことで、上記のようなCさんに〈なれた〉のだとCさんは話してくれた。もし、〈めぐり合い〉と〈ちょうどよいタイミング〉がなかったならば、

Cさんは〈誰にも話さんとじーっと抱え込んでいたかもしれない〉のだった。また〈話すのは機会がなかったら、隠しとおしたかもしれない〉のだった。この〈ちょうどタイミングよく〉ということの意味は、Cさんがいうには、Cさんが〈話せる状態になりつつあった〉そういうときに、たまたまわたしがCさんをたずね、Cさんに〈めぐり合った〉ということであった。Cさんのこのようなことばにわたしは、偶然のなせる巧妙な業、その痛快さ、不思議の念を禁じえなかった。しかし、メルロ＝ポンティのつぎのことばを見ると、わたしのこの不思議さは、なるほどそうかという感じに変わった。「人間存在というものは、[……]それはひき受けの行為とつうじて、必然を偶然にまで変化させる運動だからである」(PhP1 281)ということばに。

5 木村 敏の「あいだ」

語ることの意味の構造化を検討するにあたって、まず木村敏の「あいだ」について考えてみたい。木村は精神科医と病者の関係を「あいだ」として、それを構造としてとらえている。木村は、現象学的研究方法にとって、「あいだ」の構造の解明が最初の出発点とならざるを得ないし、また、その窮極の目標でなくてはならない、と述べている (Ji 267-268)。「あいだ」とは、看護においては病者と看護者との「あいだ」のことともいえる⁵⁹。看護の研究においても、看護者と病者との関係を中心にした看護論もあり⁶⁰、看護においては基本的なことである。木村の「あいだ」の構造は、語ることの構造を考えるうえで一つの示唆をあたえてくれるだろう。

5. 1 精神医学と現象学

木村は、現象学と精神医学における現象学的方法の本質的差異を指摘し、精神医学全体の中において現象学的方法が占める位置を考えるうえで少なからざる意味をもつ (Ji 263) と述べている。したがって、「あいだ」の構造に入る前に、木村の述べる「本質的差異」について見ておきたい。木村はその差異を2点述べている。一つは、それぞれの学が向ける眼のちがいである。二つ目は問いが生じる場所と問われるものの生起する場所のちがいである。木村は、このちがいが両者の対象領域の差異にとどまらず、学としての現象学的精神医学の成立の根拠そのものにかかわる重大な差異だとしている。哲学的現象学において第一次的に問われているのは問うその人自身の問題であるが、精神医学的現象学においては、彼が第一次的に眼を向けるのは、決して彼自身の意識や彼自身の現存在ではない。「彼が問おうと

⁵⁹ J.トラベルビー 長谷川浩・藤枝知子訳『人間対人間の看護』医学書院、(1974)。

⁶⁰ H.ペプロー 小林富美枝他訳『人間関係の看護論』医学書院、(1973)。

しているのはなによりも彼自身にとって他者である精神病者の内に生じている病的事態であり、またそのような病的事態の生起している場所としての病者の意識、ないしは病的事態を生起せしめている病者の現存在のあり方なのである」(Ji 259)。二つ目の差異について、木村は次のように述べている。ある事柄を現象学的に問おうとするとき、われわれはその事柄に直接に無媒介的に向い合わなくてはならない。「それ自体としてあたえられたもの」、「それ自身をそのもの自体において示すもの」をそれ自体から見えるようにしてやるために、全て現象学的直観にとっての障碍となるものを排除しなくてはならない (Ji 261)。そして、木村は現象学的直観診断の可能性を述べているのであるが、この直観診断では、精神医学における現象学者の眼は、哲学的現象学の眼のように、彼自身の内部における意識や現存在を問うのではなく、彼がそこで直接に他者の人格に触れ、他者における人格の病理として分裂病的事態それ自体が明証的に彼に現前してくるのでなければならぬような場所へと、つまり、自己と他者の「あいだ」へと向けられることになる。精神医学においては問いの生じる場所と問われるものの生起する場所とが互いに別々の人に属しているという差異を、木村は精神医学における現象学的方法の特殊性として位置付け、そこで「あいだ」の構造の解明がなされることになる。

木村の「あいだ」の構造が直接、看護における語ることの構造と結びつくか、という疑問が生じるかもしれない。しかし、精神医学的現象学が向ける眼は、看護が向ける眼と類似しているといえるのではないだろうか。すなわち、精神医学的現象学と同様に、看護が向ける眼は看護者自身の意識や現存在ではなく、看護者自身にとって他者である病者のうちに生じている健康や病気を生きる体験そのものであり、またそのような体験自体の生起している場所としての病者の意識、ないしその体験を生起させている病者の現存在のあり方に対してである。また、看護者が直接看護を必要としている人の人格に触れ、病者における健康と病気を生きる体験それ自体が明証的に看護者に現われてくるような場所へと、つまり、自己と他者の「あいだ」へと向けられるのも、精神医学的現象学の眼との類似性があると言える。精神医学の「あいだ」の問題は、看護の「あいだ」の問題としてもとらえることができるだろう。

5. 2 「あいだ」の構造

診察者と病者の二人の人間の「あいだ」の場所というのは、どのような構造をもっているのか。木村は「あいだ」の構造を、「あいだ」の共有、および「あいだ」としての自己の二つの観点から述べている。この「あいだ」の共有、および「あいだ」としての自己をとおして、「あいだ」の構造について検討する。

5. 2. 1 「あいだ」の共有

「あいだ」の場所というのは、診察者の主観が客観としての他者の現出を対象的に知覚するような場所としての診察者自身の意識野のことではない。精神医学的現象学は、むしろ病者との出会いに際して診察者に与えられる—つまり病者のうちにある (beim Kranken) —「精神病」なる事柄それ自体にかかわるべきものなのである。つまり分裂病の現象学的診断に到達するような「あいだ」の場所は精神科医の側の内面にのみかかわるものではなく、病者とともに両者の「あいだ」を「厳密な意味で共有している」のでなくてはならない (Ji 268-269) と。そのことをつぎのように述べている。

現象学的立場に立つ診察者が直接に病者の人格の内面に触れて、そこに生じている分裂病性の事態をみずからに本源的に与えられたものとして明証的に知覚しうるためには、診察者は病者と共に両者の「あいだ」を間人格的・間人間的・間ノエシ的な場所として、厳密な意味で共有しているのでなくてはならない。いい換えれば、診察者にとって明証的に与えられているのと同じ「あいだ」の様態が、病者自身にとっても (強調原文) —病者がそれを十分反省して言語化するか否かは別にして—全く同様に明証的に与えられているのでなくてはならない (Ji 269)。

この「あいだ」は、診察者と病者という二人の人物が、対象的に共有することを意味しているのではない。木村によれば、「あいだ」はそれを形成する二人によって真の意味で共有されるためには、それがノエマ的对象として構成されているのであってはならない。それはむしろ両者の共主観的あるいは間主観的、あるいは共ノエシ的・間ノエシ的な作用の場として「共同対自的」に経験されているのでなくてはならない。つまり、この共有は客体的「共有」ではなくて主体的共有でなくてはならないのである (Ji 270)。

「あいだ」の構造における「あいだ」の共有のなかで、わたしにとってもっとも意味あるものとして関心をもったのは、「厳密な意味で共有している」という場合、医師のみでなく、「病者自身にとっても」共有されているということであった。わたしたちは往々にして看護者自身の側の印象で病者を見ている。その限りでは、それは対象としてノエマ的に構成されたもので、「病者自身にとっても」とはいえないし、病者の主体的共有にはなり得ない。病者の問題や対処の選択肢、およびそれを決める背景の意味や関心、状況すべては、先に述べたように、病者自身のうちにあるのであるから、看護者が病者の人格の内面に触れて、そこに起こっている事態をみずからに本源的に与えられたものとして明証的に知覚し得るためには、木村のいう、厳密な意味での「あいだ」の共有は、それらが看護者に与えられるのと同様、「病者自身にとっても」明証的に与えられることを必要とするということである。このことによってこそ、すなわち、両者は共通の「あいだ」としての場所において、ともに主

観的で、互いに作用し合い、そこではじめて「あいだ」は、「病者自身にとっても」全く同様に明証的に与えられるのである (Ji 268)。

5. 2. 2 「あいだ」と自己

木村は、「あいだ」の構造のもう一つの観点としての「あいだ」と自己について、次のように述べている。「診察者としてのわたしが病者との「あいだ」を間主観的に共有する場合、この「あいだ」はもはや物理的あるいは心理的距離や間隔といったノエマ的・即自的な存在者ではなく、わたしにとっても、病者にとっても、それぞれの自己がそこではじめて自己となりうるような場所として、自己が自己にたいして現前してくる対自として、現存在の「現」そのものとしてみずからを示してくる」(Ji 271)。つまり、それぞれの自己がはじめて自己になりうるのは、ノエマ的対象としての「あいだ」ではなく、「あいだ」の様態が、先に述べた厳密な意味での共有、つまり、診察者にとってだけでなく、病者自身にとっても同様に明証的に与えられているという場合だということである。そして木村は、「あいだ」は、それ自体としては自己ではない。しかし、このような自己が自己でありうるためには、自己は他者を必要とするとして、木村は次のように述べる。

自己が自己でありうるためには自己は他者を必要とする。他者が他者として現われてこない限り、自己は自己になりえない。自己が自己として現前しうるためには、自己は自己ならざるものとしての「あいだ」の場所において他者と出会うことを通じて、そのつど他者のノエシスから自己のノエシスを分離し、自己を自己自身と一致させていかななくてはならない。自己とは決して最初から自己自身と自己同一的に一致しているものではない。自己はつねに自己ならざるものを、自己にとっての否定的契機を自己存在の根拠としている (Ji 271-272)。

木村によれば、「自己は単に相対的な他者に出会っただけでは、単に自己同一的・自己充足的な即自存在としての自己になり得るにすぎない。しかし、意識としての自己、自覚としての自己、世界内存在としての自己は、[……] けっして単なる自己同一的な存在者ではない。自己とはむしろ自己自身の内的な差異であり、自己自身を限りなく超越している脱自態である」(Ji 273)。内的差異というのは、「あいだ」は自分の外部に、他人とのあいだに拡がっている外部空間的なものではないからである。木村は、「あいだ」がノエシスのノエシスとしての「絶対の他」として、まさに自己存在そのものの根拠であるならば、「あいだ」は、むしろ自己の「内部」における「自己自身とのあいだ」として、「対自性」の「対」の条件として、内的差異として考えねばならなくなる、と指摘する (Ji 287)。

この「内的差異」は、健全な常識の働きによってつねにそのつど止揚されつづけることによってみずからを内的差異として維持し続けている (Ji 287)。重要なのは、ノエシス的に

とらえた自己そのものがノエシ的な内的差異を作り出しているそのはたらきそれ自身を、いっさいのノエマ化を加えることなく純粹にとりだすということだろう (Ji 289-290)。

他者である病者の意識がいかにして診察者において無媒介的にみずからを示すものとなり得るか、というのが木村の最初の疑問であった。木村の答は、「あいだ」の共有とその共有によって診察者と病者にとって同時に、等根源的に自己が構成され、病者の自己そのものが診察者にみずからを示すのである。

5. 3 木村の「あいだ」と看護

この意味において、「あいだ」の構造は看護においても主要な問題となる。病者は、病気というあらたな状況のなかでは、まだその状況における自己を自己となし得ない場合が多い。病者にとって、病気という状況は、ときとして死にかかわる。

病者は、あらたに、健康や病気にとまなう生活上のさまざまな苦悩を経験することになるが、その経験は病者にとってはまだ自己ではなく、そのような自己を拒否している。しかし、その苦悩の経験を厳密な意味で共有する看護者という他者の存在があれば、そこで病者は、その経験の意味をまざまざと見ることが可能になり、その差異を差異として認め、苦悩する自己を自己と一致させることになるのである。そのとき、病者は、病気というあらたな状況下の自己を自己として引き受けて生きることが可能になると考えられる。すなわち、病者と看護者とは、厳密な意味で「あいだ」を共有することによってこそ、そのような状況下におけるそれぞれの自己が自己になりうる場所として、自己が自己に対して現れ、対自として、現在という、いまここという場所で世界に開かれ、病気を生きている自己をみずから示してくるのである。

病者と看護者が、厳密な意味で「あいだ」を共有するためには、看護者だけではなく、「病者自身にとっても」共有されることが不可欠であった。その共有には、病者と看護者はお互いが、なにを求めているのかをわかり合うことが求められる。それを実践するのは、ことばや身体表現によるコミュニケーションである。語ることと聴くことがなければ、病者と看護者の共有にならないし、特に、「病者自身にとっても」共有されることは望むべくもないものとなるのは必至である。

看護においては、病者と看護者は、なにをするにも語ること聴くことにはじまり、語ること聴くことで終わる。本論で検討してきた語ること聴くことが、ここで役立てられるだろう。

本章のまとめ

ここでは、第二章における C さんのことば、第三章における C さんのことばを聴くわたし

のことばをまとめ、それを記した。

呼吸が苦しくて肩で息をする子どもの姿を見て、Cさんは「頭がおかしくなる」といった。このことばをわたしは創造ととらえた。呼吸が苦しくて「ハーッ」と深く息をする動作や、〈～ですよ〉、と訴えるような所作は、Cさんの苦しみの深さや重さをより強く感じさせた。そこに、一つの人間的意味があり、所作の意味を十分に明らかにした。それは、Cさんの「思想の源泉」、Cさんの「根本的な存在のし方」を表していた。ためらいがちに話しはじめたCさんのいい方は、なにかを表そうとする志向のまわりを手さぐりしているようだった。

Cさんの話を聴いているとき、わたしは〈オヤッ〉とか〈エッなに?〉とかいう感覚を感じる。そのときわたしは疑問をもち、「どういうことですか」、と問いかけた。この問いに応えることによって、Cさんは、〈子どもが何年生きられるか保証がない〉という現実を知ることになった。そこに、「親にして見れば、いまのいま、子どものやろうとしていることを手助けしてあげなければならない」、ということばが現れたようだった。そのことばは、Cさんが未来を切り拓く、あらたな世界への幕開けのように見えた。

わたしは、Cさんの話の意味を聴き取れないことがあった。そのときわたしは、自分の聴き方を見直し、知覚している自分の方へ向きを変えた。そのとき、子どもを思いやる、母Cさんの深い思いが伝わってきた。この体験は、わたしがわたしを知る貴重な経験であった。

このようなことばは、わたしたちになにをしてくれたのだろうか。ことばは固有なものでわたしたちが産みだし、意味をつくり、それをお互いに伝達するためであった。それだけでなく、その意味を受けとめ、理解するためであった。

Cさんはインタビューの最後に、話すことで、子どもが病気になったことで、聴いてもらうことで、〈Cさん自身がこう在りたいと願う指針・道が方向付けられた〉と語ってくれた。

第五章 語ることに聴くことと看護

第一章から第四章まで、語ることに聴くことについて検討した。この語ることに聴くことで本章では病者が語り、看護者の聴く体験は、看護においてどのような意味をもつかを考えてみたい。

看護について、ナイチンゲールやウィーデンバック、ベナー／ルーベルの考え方を、わずかではあるが第一章で触れた。ここでは、Cさんの語りと聴くわたしの体験は、ウィーデンバックの考え方とどのようにかかわるのかを考える。インタビューでのCさんとの対話には、〈援助する技術〉としての臨床看護を重視するウィーデンバックの考え方とつうじるものを感じた。「なに」を援助するかではなく、「どのように」援助するか焦点をあてる。病者が語ることに、看護者が聴くことは、「どのように」援助するかにかかわる重要なポイントの一つだと考えられる。もし、これらの検討から、看護実践における語ることに聴くことの意味が明らかにされたなら、患者援助の一つとして力になるのではないだろうか。とすれば、語ることに聴くことは、看護の質を高めるために貢献できるかもしれない。それは、看護のなかでどのように位置づけられるだろうか、その手がかりが見いだせるかもしれない。

ここでは、第三章で「どういうことですか」というテーマで取りあげた場面を再度とりあげ、検討する。

構成はつぎのとおりである。

- 1 ウィーデンバックの「患者援助の技術」—要約—
- 2 対話と援助のプロセス
- 3 語ることに聴くことの臨床看護における意味
- 4 語ることに聴くことの看護における位置づけ

本章のまとめ

- 1 ウィーデンバックの「患者援助の技術」—要約—

看護の本質を〈患者援助の技術〉としたことについて、ウィーデンバックは、序文でつぎのように述べている。ウィーデンバックは看護の専門分野、とりわけ、〈援助技術〉(helping art)と考えられる臨床看護に重きをおく。看護師の専門職業人としての位置づけを明らかにし、そのサービスを〈技術〉(art)として確立し、その意味づけを行う。看護師が、自分を患者に対して責任をもつ専門職能人としての実践家であると自覚できる、そのために貢献できれば幸いだとウィーデンバックは述べている (CN 13)。

臨床看護における「どのように」の鍵となる、患者の〈援助へのニーズ〉、看護師の思考と感情、看護の目的と哲学などを要約して紹介する。

1. 1 〈援助へのニード〉

患者のなかには、病気になったとき、自分で自分をケアしている人は多い。しかし、たとえば、カゼをひいた人が自分の力では治せないと感じたとき、医師を呼ぶ。そして患者は、医師から指示された安静や食事の制限などをどうしたらよいかわからないとき、援助を求める。つまり、カゼをどのように治すか、医師の指示をどのように守れるかを知りたいという〈援助へのニード〉を体験するのである。患者がおかれている状態や周囲の状況のなかで、その人がその状態や状況をどう理解し、感じるか、つまりどう知覚するかが重要である。なぜなら、この知覚の仕方こそが、その人がニードを〈援助へのニード〉として体験するかどうかを左右するものであり、具体的な行動を起こすかどうかを決定するものだからである。人の行動の動機づけとなったものは、まさに自分自身の状態についての自分自身の知覚である。その人がその時、〈援助へのニード〉を体験しているか否か⁶¹ということこそが、看護にとって決定的に重要な問題となる（CN 16-18）。

1. 2 看護師の思考と感情

看護師は行為するだけでなく、考えたり感じたりしている。看護師が、何を感じ考えているか、それらは看護師が何をやるかだけでなく、どのように行うかと密接な関係がある。もし、看護師のもっている目的がある特定の患者を援助することであるならば、看護師が考えたり感じたりすることは、その患者が〈援助へのニード〉をもっているかどうか、どんな援助を必要としているか、看護師はどのような方法でその患者の援助をすることができるかを決定するための過程に沿って方向付けられる必要がある。看護師が考えたり感じたりすることは、それ自体はほとんど目に見えてこないことであるにもかかわらず、看護師の行為を方向づけ、患者に対する看護師の目に見える行為の効果をも決定する。もし、看護師が自分の思考や感情をよく吟味し、建設的に用いたならば、自分が何にもとづいてそう考えているのか、どのようにして自分がそう考えるにいたったかを自問自答し、自分の思考の原因を明らかにする必要がある（CN 22-23）。臨床看護における援助技術は、思考と感情と目に見える行為によって、援助を必要としている一個人とのかかわりあいのなかで行われるものである（CN 25）

1. 3 看護の目的と哲学

⁶¹ 〈援助へのニード〉を体験していない人は多い。その場合は、一年に一度は、検診が受けられるシステムとなっている。一般検診が市町村や企業に義務付けられている。

ウィーデンバックによると、目的は臨床看護の到達点であり、哲学はそれを導く指針である。〈目的〉とは、看護師が自らの看護実践を通して達成したいと望んでいるものである。目的は臨床看護のもつ意味そのもので、単に割り当てられた仕事の意図を超えるのである。

看護師が自分の責務の範囲でなにを行うか、どのように行うかが臨床看護のすべてであり、本質である。看護師の責務の範囲は、患者が自分のおかれている状態やそのときの状況をどう知覚するか、看護師が知る（CN 26）ことにあった。この責務の範囲の仮定にもとづいて、ウィーデンバックは臨床看護の目的をつぎのように述べている。

その人がおかれている状態や、その時の状況や、周囲の環境などから、自分が要請されていることにうまく反応できるように促し、またそのような能力の発揮が妨げられている場合には、その障害を克服しやすくすること（CN 29）。

もっと簡潔に言えば、臨床看護の目的は、ある個人が、〈援助へのニード〉として体験しているニードを満たすことにある。これは看護師—患者関係における〈その時その場〉性（immediacy）を示唆する。看護においては本質的に「いま」という時間が問題となる（CN 29）。

そしてウィーデンバックは、〈哲学〉についてつぎのように述べている。

〈哲学〉とは、看護師ひとりひとりの信念や行為にもとづく生活や現実に対する態度であり、看護師の行為の動機づけになって、何をすべきか考えるのに役立ったり、何かをしようと決意するのに影響を与えるものである。[……] 哲学は目的の基盤となるものであり、目的は哲学を反映する（CN 28）。

上記のウィーデンバックの〈哲学〉とは、「看護師ひとりひとりの信念や行為にもとづく生活や現実に対する態度である」。つまり、端的に言えば、〈哲学〉とは、看護師の信念と態度である。その信念や態度がどのようにかわるかが述べられている。看護師の行為の動機づけ、看護にどのように役立つか、哲学は目的の基盤となるもの、看護の哲学の基盤となるもの⁶²である。また、患者に対して抱く看護婦の信念によっても看護師の感情というものは彩られる。看護師の信念によって、患者のケアの方法を決定もする。

1. 4 援助のプロセス

⁶² 看護の哲学の基礎となるものはつぎの三つの概念である。1. 生命の賜物に対する尊敬。2. 人間存在の尊厳・価値・自立心および個性の尊重。3. 自分の信ずるところに従って力強く行使するための決断力（CN 32）。

患者援助の技術は、患者が要求したり、欲したりするものを与えようとする行為を伴うひとつの援助プロセスである。そして、患者が自分のおかれている状況のなかで感じている要求を処理できる力を回復したり、より高めたりできるようにする。〈看護技術〉は患者と一対一の関係のなかで看護師によって行われるもので、患者のその時、その場の状況における独自性に対する看護師の意識的な反応から成り立つ。技術は個別性のある行為ではあるが、技術の根源にあるものは、情報分析を伴うひとつの思考・感情のプロセスである。この思考・感情は、看護師が患者の体験している〈援助のニード〉を満たそうとして行う行為に関する種々の決定のもとになっているものである。援助のプロセスで最も重要なことは、行動は行動している個人（本人）にとっては意味あるものであるが、その行動がその人に意味するところのものは、その行動を知覚している他の人にははっきりしないかもしれないということを経験することである。

看護実践は、目的を遂行する過程で、患者が自分の行動（behavior）の意味を理解できるように助けるといふ原理にもとづいて行う目に見える〈熟慮された動作（action）〉が求められる（CN 68）。それは患者－看護師の相互作用ともいえるもので、明白な目的達成に向い、他の人の言語的、非言語的に示している行動の意味を判断し理解したうえで行われるものである（CN 61-62）。看護実践の構成要素は、A. 患者の〈援助へのニード〉の明確化、B. 必要とされた援助の実施、C. 援助が与えられたことの確認、の三つである。

2 対話と援助のプロセス

Cさんは、職業技術専門学校に通う子どもに付き添うときの体験を語ってくれた。C1のCさんのことば（つぎの頁を参照）⁶³ はなにを指すのか、また、ことばとことばのつながりがわからなかった。さらに、声の調子や泣いているような声など身ぶりで表される感情やことばとそのいい方は、わたしに強い違和感を抱かせ、とっさに「どういうことですか」と問いかけさせた。それに応えてくれたC2のことばは、わたしをハッとさせるような子どもの病いの過酷な現実であった。そのあと、Cさんは、母としての道をあらたに見いだすことになった。

これらは、ウィーデンバックの「患者援助の技術」という視点から見ればどのような展開となるのか。また、そこから見えてくるものはなんなのかを検討してみたい。

2. 1 Cさんとの対話とわたしの思考・感情

⁶³ ここでことばというとき、そのうちには、非言語的な身体表現=しぐさ（強い調子で、なきながら）、なども含まれていることをあらかじめ断っておきたい。

朝、電車が来ていても、子どもは呼吸が苦しくて、いったんベンチに座って一服しなければ歩けない⁶⁴。それでつぎの電車に乗ることになる。Cさんは車内に入って席を確保し、子どもが乗って来るのを待っている。

C1 ギューッとしがみついても〔電車内に〕入って、空いたところにピヤッと座って、子どもが入ってくるのを待っているんですけど、そのときでも、こんなときになんでこないまでしてとかね、と思うときがあるんですけど、「お母さん二年我慢してね」で、「肺の手術すんだら一っとお返しするからね」と、いうてるけれどね、もう、そういう話しになるとダメ（強い調子で、[……]（泣きながら）元気になるんやと信じてるんやとかね、思いもって、（うーん）だから、もつとね、あれやったら、ほかのことしてやったほうがいいちがうかなとか、考えながらもね、（うーん）いまのいま頑張っているんやなーって。

N どういうことですか。

C2 というのは、肺の手術しかいまの感じではないですよ、それも手術の〔成功の〕確率というのは40%、成功率低いんですよ、〔手術〕しても、再発の恐れはある、だから、まあ、いうたら、何年生きて何年あれでという保証というのは、なにもないんですよ。いまは酸素ついてるから、行動できるいう状態で。

C3 あたし、やから、らくして電動車いすでもなんでも、あれして車いすでもしてやったらと思うけれど、あの子なりに自分で努力してる（うーん）。ゆっくりでも歩かないと筋肉が衰えるし、（間）

C4 だから、「なにもこない一所懸命しんどい思いしてやったところでなにをするの」って、人から質問される場合があるんですよ。

C5 でもね、親にしてみたら、いまのいま（うーん）やろうとしていることに手助けしてあげなければいけない。（2-8）

C1でのCさんのことばや身ぶりを聴いたり見たりした瞬間に、わたしが感じたり、思ったりしたことを以下に記述した。

「ギューッとしがみついても」のあとの「そのときでも」というCさんのことばに、わたしはエッ、どういうこと？と、疑問になった。「お母さん二年我慢してね、[……]、元気になるのと信じているんやな、と書いて」ということばは、わたしには、その前後のことばとの関連がわからなかった。また、子どもの病いはもう治らない、と暗に表す「元気になるのと信じているんやな」ということばのもつ意味に、わたしは暗然とした気持ちになった。「もう、そんな話になるとダメ」という否定のことばとその強い声の調子は、わたしの身体を一瞬こわばらせた。また、泣きながら話されるCさんの身ぶりはことば以上に悲しみや

⁶⁴ 子どもの病いの状況は、序章8. 3「研究参加者のプロフィール」と第三章2. 2「どういうことですか」において記述した。

苦しみを感じさせた。「だから、もっとね、あれやったら、ほかのことしてやったほうがいいのではないか思いながらも、[子どもは] いまのいま頑張っているんやなー」ということばは、どうしたらいいか思いあぐねている C さんの様子が窺がえた。それにしても「あれ、ほかの」とはなにを指すのか。また、「だから」とは、前とそのあとのことばとどのように関係づけられるのか、わたしには理解できなかった。二度の「うーん」という身体から押し出されるような、ことばにならないことばは、C さんがなにをいいたいのかはっきりしないことへの、わたしの感じを表わしている。そんな状況のなかで、「いまのいま頑張っているんやなーって」ということばを聴いたその瞬間、わたしは「どういうことですか」と問いかけていた。この問いは、そのときどきの C さんのことばに、何度かオヤッと感じていたものが一気に噴き出した感じだった。このような疑問（思考）や感情が、「どういうことですか」と問いかける行為につながった。

2. 2 C さんはなにをいいたいのだろうかー〈援助へのニード〉の明確化

ウィーデンバックは援助のプロセスにおいて、患者の〈援助へのニード〉を明確にすることを重視していた。そのために四つの段階を踏まなければならないとする。C さんの C1 におけることばやしぐさを聴いたり見たりして、そのはっきりしない表現の仕方をわたしは、C さんは〈援助へのニード〉を体験しているととらえた。C さんの〈援助へのニード〉への体験は、四段階に沿って見る場合、どのように捉えられるのか検討する。

〈第一段階〉：第一段階は、患者のことばやしぐさを見聞きしたとき、看護師は不一致を感じとることである（CN 73-74）。たとえば、言っていることとそのいい方とのあいだの不一致（ズレ）である。朝、最初に見た患者さんにオヤッと感じる、瞬間の感覚である。看護師は自分のこの感覚を見過ごさず、それがなんなのかを見きわめていく。

C さんの C1 のことばやしぐさに、わたしは何度もオヤッと感じた。「そのときでも」「あれ、ほか」とはなにを指すのか。「ダメ」という声の調子や暗に示す「[子どもは] 元気になれるんやと [……]」という泣きながらのことばに、わたしの身体は緊張した。C さんのことばやそのいい方は、いつもの C さんの明確な話し方と大きく異なり、わたしは強い不一致（ズレ）を感じたのだった。この不一致の感覚はなにを表わしているのか、このズレの感覚が、わたしにそれを知りたいという思いに駆り立てた。

〈第二段階〉：ここでの問題は、患者が〈援助へのニード〉の手がかりをどのように示すか⁶⁵を理解することである。手がかりとは、不一致を認識するきっかけとなるようなこと

⁶⁵ ここでの問題は、「患者がその手がかり [不一致の] をどのように示すかを理解することである」(CN p. 74) という文と、そのあとの「手がかりとは、不一致を認識するためのきっかけとなることばやしぐさのことである」(同上) ということばを関連づけるのは、わたしにはすこし無理があるように思える。ウィーデンバックは、その手がかりをどのように示すかを理解する例として、「口びるをギュッとひきしめている」(同上) 母親の例をあげている。しかし、しぐさとしての「口びるをギュッとひきしめている」は、知覚す

ばや表情や身ぶりである。これらの意味は、患者自身にとってどんな意味があるか、をはっきり理解するまではあいまいなものである。それを明らかにするための方法を、ウィーデンバックはつぎのように述べている。①看護師がズレに気づいたときに湧いてきた疑問を、患者に教えてほしいと依頼する。②行動の意味をたずねる。③看護師に理解できないことばづかいやしぐさを患者に伝える。

Cさんは、不一致を感じさせる手がかりを数多く表していた。先にも述べたように「そのときでも」「こんなときでも」とはどんなときか。「お母さんごめんね [……]」と「元気になるんやな」ということばとの関連がわからないなど。しかし、示されたCさんの手がかりからは、わたしはCさんにとってそれがどのような意味をもつのか明確に捉えることはできなかった。そこで、Cさんが自分の行動によってなにをいおうしているのか明らかにするためにとったわたしの方法は、「どういうことですか」と問いかけることであった。このときのわたしの問いかけは、数多く示された手がかりの一つひとつの意味を理解したいというより、手がかりとなることばやしぐさをとおして、Cさんはなにをいいたいのか、わたしが知りたいという気持ちからであった。

〈第三段階〉：この段階は、患者の〈援助へのニード〉を明確化するために、患者が体験していると思われる不快の原因⁶⁶をつきとめることである。そのためには、不快の原因を本人が語ることが必要である。

ところで、いま述べたC1のさまざまなことばやしぐさで表されるCさんの体験は、なにか一つが原因となっているというより、わたしには、いくつかの出来事が折り重なって、Cさん自身が明確にいい表せない事態を表しているように思えた。したがって、そのいくつかの出来事の原因の一つひとつをつきとめようという意図は、わたしにはなかった。C1でのCさんのことばが表す体験とは、どのような体験なのか、なにをいいたいのか。それを明らかにするには、〈原因〉を追究するのではなく、わたしはCさんになにが起こっているのかを知りたいと思った。そのためのわたしの問いかけは「どういうことですか」であった。

るものであって、理解するということとは異なっているのでないだろうか（単なる翻訳の問題かもしれないが）。一方、手がかりを〈どのように示すか〉を理解するためには、手がかりを〈どのように示すか〉ではなく、その〈手がかりのもつ意味〉をどのように理解するかであった（CN p.74-75）。したがって、ウィーデンバックが言わんとしていることは、一つは「手がかりをどのように示すか」を知ること。そして、そのうえで、「示された手がかり」をどのように理解するか、であった。

しかし、手がかりが不一致を認識するためのきっかけとなるものであるなら、第二段階で述べるのではなく、第一段階で記述した方が、わたしには自然な気がする。「段階」ということばを、ウィーデンバックが時間軸で考えている、という前提でのことであるが。

⁶⁶ 原因ということばは、不快を結果とみなす一つの因果性を表していると思われる。「因果性とは何かある事物が別のものを生み出したり引き起こしたりするという事物間の結びつきのことである。たとえば、ある細菌がある病気を引き起こす、といった結びつきはその一例である」（廣松 渉編『岩波 哲学・思想事典』（1998、p.103）。とすると、不快感や無力感は、事物間の結びつきのように、因果関係では、いい表されない複雑な背景があると思われる。Cさんの場合も、事物間の原因と結果という結びつきではすまされない。子どもの病いの客観的な事実が示す生きられる時間の短さ、だから、他の人がいうようにらくした方がいいのどうか。一方、子どもは、自分の病気が治ると思って、手術にそなえて苦しくても歩く努力をしている。このように多様な背景がある場合には、原因結果という事物間の因果生を問うようにはいかない。わたしの「どういうことですか」という問いかけは、このような体験そのものとその意味を問うことを意味していた。

それはともかく、ウィーデンバックによれば、「個人がおかれている状態や状況も、その人がその状態や状況をどう理解するかどう感じるかであった。すなわち、どう〈知覚〉するかが重要」なのであった。であれば、〈援助へのニード〉を明確にするために必要な援助行動は、Cさんのおかれている状態や状況をCさん自身がどう知覚し、そのときどのような体験をしたのかを問うことが看護師に求められる、ということである。わかりにくいことばやしぐさでしか語りえない過去のそのときその場で起こった体験を、Cさん自身が明らかにする必要があった。それが、C1のことばとして表されたと考えられる。ウィーデンバックがいうように、Cさんにとっての「行動の意味はその行動が、どんな意味があるかはっきりするまでは漠然としたものであるから」(CN 75)。

〈第四段階〉：この段階は、患者が〈援助のニード〉を自分自身で満たすことができるかどうか、あるいはそれを満たすために他の人の援助を必要としているかどうか見きわめることである (CN 76)。

Cさんとの対話では、Cさんが、〈援助へのニード〉を体験しているかどうかを、わたし自身が考えていたわけではなかった。ただ、わかりにくいC1のことばやしぐさを、四つの段階と関連づけてみたとき、第一段階の時点ではCさんは、自分の〈援助へのニード〉を自分で満たすことができているとは、わたしには思えなかった。しかし、そのときわたしは、Cさんが自分の〈援助へのニード〉を自分自身で満たすことができるかどうか意識して考えていたわけではない。というよりわたし自身が、Cさんがいおうとしていることを知りたかったのであった。

ところで、〈援助へのニード〉を明確にするための四段階を時間経過として捉えてみると、実際のCさんとの対話では、必ずしも四段階と一致するというわけにはいかなかった。Cさんとの実際の対話は、そのとき、その場におけるCさんとわたしのあいだで、一瞬一瞬に起こる知覚と思考の流れで成り立っている。もちろん、Cさんとの対話は、自由に語ってもらうインタビューであって、なにをどのような順序で話すかを、前もって決めていたわけではない。Cさんとわたしの対話をふり返ってみると、仮に、はじめに計画したものであったとしても、そのときその場で両者のあいだに湧き起ってくる知覚と思考に導かれてことばが発せられるので、話しは「行きつ戻りつ」する。実際には、ウィーデンバックがいうように四つの段階を順番に進んでいるわけではない。したがって、時間経過という意味では、不一致を認識する手がかりとしての第二段階は、第一段階に含めたほうが理解しやすいのではないかと考えられた。手がかりがどのようなものを理解しているからこそ、不一致の認識が可能になるのであろうから。また、ただ、ウィーデンバックが段階をどのような意味で捉えているかによるが。

2. 3 体験の意味が明らかになった一実施結果の確認

「どういうことですか」という問いに答えてくれた「肺の手術しか〔治療法は〕ない〔…〕」ということばは、Cさんがあいまいなかたちでしか表現しなかった自分の体験〔C1〕をいい直されたものであった。表現は明快でその意味も明らかであった。それは、Cさんの〈援助へのニーズ〉が明確になったことを表していた。また、看護の目的が達成された証だ（CN 79）ともいえるだろう。いいかえれば、「どういうことですか」という問いかけは、これも一つの援助方法を表しているといえるだろう。

子どもと自分のおかれている状況について、「何年生きられるか保証がない」という事実が明らかになったことによって、自分のおかれている過酷な状況が現実としてそこにあることを、Cさん自身が見つめ直すことになったと考えられる。

自分の体験の意味がこのようなかたちで明らかになったあとCさんは、C3で「らくして車いすにするか、〔……〕、筋肉が衰えるし」と、もとの話を再度くり返された。このくり返しは、自分の体験の意味が明らかになったことによって、「らくして車いすにするか」思いあぐねていた自分を、改めて見直すためのくり返しだったのではないだろうか。「歩かないと筋肉が衰えるし」といった直後の「間」はこれらのことを思いめぐらす時間だったのかもしれない。同時に、「だから、なにもこない一所懸命〔……〕、なにをするの」という他の人のことばがCさんに思い起こされていたのかもしれない。思い起こされたそれは、「こんなときに〈なんでこないまでして〉と思う」Cさん自身の思いでもあった。Cさんはそれに気づいたのかもしれない。とすると、「だから、なにも一所懸命〔……〕」ということばの「だから」という接続詞は、「だから、なにも一所懸命〔……〕」という他の人に対することばだけではなく、同時に自分自身とに向かっていう「だから」でもあったと考えられる。この思いは、つぎの「でも、親にしてみたら」という「でも」にも現れているように感じられた。

2. 4 あらたに拓けたCさんの道

Cさんの「肺の手術しかない〔……〕」ということばは、自分のおかれている状態や状況をおのずから明らかにした。そのとき、〈だから〉、〈子どもがらくして車いすにするか、子どもの想いを尊重する〉という話になった。また〈だから、なにもこない一所懸命しんどい思いしてやったところでなにをするの、と人が質問するんですよ〉という人のことばもくり返された。「〈だから〉、でも、親にしてみたら、〔子どもが〕いまのいまやろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」のであった。Cさんが、母親としていまのいま子どものやろうとしていることに手助けしてあげなければいけない、と決意できたことは、母Cさんにとっては、これこそ、自分がやりたかったことだと、ここから思ったのではないかとわたしには捉えられた。

とつぜんのように発せられた母Cさんの「でもね」ということばの強い声の調子は、Cさんが自分を、子どもの〈親として〉見据えたことの現れともいえるかもしれない。とつぜん

飛び出すように現れたこのことばは、〈他の人〉のことばではなく、実は自分のおかれている状況が事実として C さん自身に明らかになったということであった。明らかになったその事実―〈何年生きられるか保証がない〉―が、C さんに「でもね、親にしてみれば、いまのいま、やろうとしていることに〔子どもに〕手助けしてあげなければならない」ということばを語らせたのではないだろうか。このことばは、C さんのなかからおのずからあらたに現れたもののように考えられた。それは、C さんのなかから湧出したものであって、意識されたものではない。しかもそれは、C さんが語りはじめたときに、こころのどこかにかすかに生まれつつあった思考であって、それがことばになったとき、C さんは「そうだ」、それが自分のいいたいことだった、と C さんは感じたのではないだろうか。このとき C さんは、そのことばを獲得したと考えた。わたしの推測、想像であるが。

2. 5 ウィーデンバックの看護実践の基礎

ウィーデンバックについては、本章1で詳細に述べた。ここでは、看護実践の基礎についてのみ記述する。

患者援助の技術を重視したウィーデンバックは、看護実践を効果的にするために必要な特性を、〈知識〉〈判断〉〈技能〉の3点を上げた。実践の場では、これらは相互に関連し合う。看護師の行為の一つの技術としてのコミュニケーション技能がある。このコミュニケーション技能は、〈看護手順的技能〉とコミュニケーション技能がある。コミュニケーション技能とは、看護実践を効果的にするために必要な特性の一つである (CN 44)。その技能とは、看護師が患者やケアの関係者との相互作用であり、看護師が伝えたいと望む考えや感情を表現する能力 (強調は筆者) (capacity) のこと (CN 44-45) である。また、コミュニケーション技能は、看護師が患者の援助へのニーズを満たすという明確な目的を導き出すための一連の言語的・非言語的作用 (強調は筆者) を含むもの (CN 46) である。

2. 6 再構成—わたしにとっての再構成

ここで、看護者や看護学生が看護実践を学習するとき、効果的な手段として活用する「再構成」についてふれておきたい。はじめに、再構成とはどういうものか、ウィーデンバックの説明を要約して述べる。

再構成とは再現することである。オリジナルな構成物そのものではない。看護に関していえば、再構成とは看護師が、患者や患者ケアに関連した人々とのかかわりあいのなかで体験したことを思い起こして再現するものである。それは書かれたものである。看護師が知覚したままの患者の行動について、そのときの看護師が体験した思考や感情や、その結果生じた

行為について再収集し、時間を追って詳細に記述することによって表されるものである（CN 109）。再構成は、体験あるいは体験の一部を再び取りもどすための試みでもある。その結果、そのなかに含まれるさまざまな要素が明らかにされ、看護師が目指した看護の目的に照らしあわせられ、評価されるものとなる。

再構成は、学習のための効果的な手段である。出来事の動きがすばやい、そのときのその場の状況にのみこまれて、客観的に見返ることのできなかつた詳細なことがらへの振り返りが必要である。振り返りは、その人自身の動機や動作に対する洞察をもたらす（CN 109-110）。

再構成を実施する際、注目するのは、知覚したことと、その知覚に関する思考・感情、それに基づく言動の一貫性である。なぜなら、知覚の仕方や思考・感情、言動の一貫性があるかないかが、病者と看護者の両者にとって、意味あるものとなるかならないかを定めるからである。援助のプロセスで、知覚と思考・感情と言動の一貫性が、看護の質を左右する。それらを自分の「目的と哲学」（CN 28）のために活用できるように自分を訓練したならば、看護実践を豊かにするばかりではなく、おそらく自分の行っている援助サービスから、つきることのない満足感への道が開かれるだろう（CN 80）、とウィーデンバックはいう。

再構成を実際に行うのは、わたしにとっては簡単ではなかった。最初は、知覚したことを、そのまま思い起こすのは難しかった。知覚したときの、自分の思考・感情をそのまま思い起こし、それを記述するのは、もっと困難だった。ときには、ことばにするのをためらいたくなるような自分の思考や感情もあったから。再構成を始めたころは、知覚したこと、そのときの思考・感情を、となりの人に訊いてもらって、はじめてなんとかことばにすることができた、ということもあった。

わたしたちは、自分が行動をしたとき、その根拠を明確なかたちで自覚しているわけではない。不都合な思考・感情は飛ばして、つごうのいいことだけをことばにしたりする。無意識の場合もある。そのとき、知覚したことと言動は一貫性を欠くことになる。わたしの経験では、一貫性を欠くのは、知覚に基づく思考・感情が、自分にとって否定的な場合であった。

再構成を学生に活用する場合、知覚したこと、そのときの思考・感情、それに基づく言動に一貫性がない場合がある。その場合、思考・感情について、学生と話し合うことで、学生にあらたななにかが明らかになることが多かった。それは学生にとってそのときの自分の発見であった。その発見は学生を生き生きとさせた。そしてそれは、病者をいままでとは異なった目でみることにつながっていった。

看護の現場において、知覚と思考・感情と看護行動とに一貫性が保持されるならば一たとえそれが看護者である自分にとって不都合なことであっても一、看護師は、病者に成そうとしていることに自信をもって向き合うことができるだろう。これは、病者に対してだけではなく、専門職業人としての看護者の自分に対する〈誠実さ〉ともいえるものである。

看護学生といっしょに行ってきた再構成は、わたしを自分の内面を見ようとする方向へ向かわせくれた。いま、思い起こせば。

3 語ることと聴くことの臨床看護における意味

前項では、看護実践を構成する患者の〈援助へのニード〉の明確化とその実施および確認について述べた。その過程は、いずれも患者としての Cさんと看護者としてのわたしの両者が、語り聴く対話によって進められたものである。それはすなわち、看護の実践が言語行為—もちろん、身体表現としての身ぶりを含めて—によって成り立っていることを表しているといっても過言ではないだろう。本章 2. 1において、Cさんが語ってくれたことと聴くわたしの体験を改めて見直すことをとおして、臨床看護実践における語ることと聴くことの意味を明らかにしたい。

3. 1 Cさんの不明確な表現

わたしは、C1の「そのときでも、こんなときになんでこないまでしてとかね、[……]、いまのいま頑張っているんやな—って」ということばとその意味をどのようにとらえたのであろうか。断片的であいまいではあるが、Cさんが体験しているなにかを伝えようとしていたことは読み取れた。しかしそれらは、そのとき、Cさんがなにをいいたいのかをわたしは明確には知ることはできなかった。ただ、「だから、もっとね、あれやったら、[……]、と考えながらもね、いまのいま頑張っているんやな—って」ということばから、「なに」とはわからないが、どうしたらいいのか思いあぐねている様子は感じとれたのだった。また、「お母さん二年我慢してね、[……]、元気になれるんやと信じてるんやな」ということばや強い声や泣く身ぶりに、子どもの病いが容易ならざる事態を表していることは感じとれた。それはCさんの体験が、このような不明確なかたちでしかいい得ない、あるためらいを感じるような状況の現れとも思われた。

とはいえ、このようなはっきりしない表現だからこそ、わたしに強い関心を抱かせた。断片的ではあろうと、あいまいであろうと、いま自分に起こっていることを表現したということ自体が、聴くわたしにとって、そしてCさん自身にとって意味があったと思えた。ともかく、そこから話が始まったのであるから。

看護の場で患者さんが看護者になにか援助をして欲しいと思うとき、それを看護者に伝えるのは、場合によっては簡単なことではない。とくに、排せつや本当に苦しいことなどは、ぎりぎりまで我慢し、これ以上我慢できないとき、やっとブザーを押したり、声をかけられたりすることも多い。「排せつだけはだれの世話にもなりたくなかった」といわれたその場面とそのときの患者さんのしぐさが、いまでも思い浮かぶ。

オヤツと感じる病者のサインの意味は、病者にとっても、看護者にとっても、その重さや深さははかり知れないものがある。その意味を、わたしはCさんのC2の〈何年生きられるか保証はない〉、C5の「でも親にしてみたら、[……]」ということばによって教えられ

た。〈ことばや身ぶり〉で表す体験の意味を、Cさんみずから明らかにしたことが、Cさんの〈援助へのニード〉の明確化そのものであった。そして、明確にされたその意味が、母Cさんに、C3の〈らくして車いすにするか、[……]〉という話につながった。それはまた、C4の〈なにもそない一所懸命して [……]〉という「他の人」の話になった。この三者のことばが、Cさんにあらたな道を開かせることになったとわたしには思えたのであった。

C2は、Cさんによってみずから明らかにされた体験の意味であるが、それはC1でCさんによって表現されなければ潜在したままで終わったかもしれない。潜在しているあいだは、意味はあいまいなままであって、もし、Cさんがその体験を表現しなければ、Cさんにとってその意味は、意味として存在しえなかったであろう。病者は、自分の体験をうれしいことやつらいこと、なんであれことばや身ぶりで〈表現する〉ということが、看護実践の場では、もっとも価値あることだとわたしには思えるのであった。表現しなければ、看護は始まらないのであるから。ウィーデンバックが臨床看護において、患者の〈援助へのニード〉の明確化をもっとも重要な課題とすることの意味は、ここにあるといえるだろう。

3. 2 問いかけの意味

病者に問いかけるという行為は、聴くという行為の一つである。すなわち、病者のことばの意味が看護者に聴き取れない場合に問いかけることばは、Cさんが言わんとすることを聴き取るためのものである。Cさんへの「どういことですか」という問いかけが、(第三章2. 2 どういことですか。対話の場面(2-8))においては重要な意味をもっていたと考えられるので、あえてこの問いかけを「聴く」とは別に取り上げることにした。

「どういことですか」という問いかけは、いま述べたように、C1のCさんのあいまいな表現そのもから生じた疑問であった。Cさんはなにをいいたいのだろうか、Cさんにいまなにが起っているのだろうか、どんな体験を語ろうとしているのだろうかという疑問が、わたしをCさんに問いかけるよう駆りたてたのであった。C1の「ギューッと [……]」というCさんのことばは、すでに何度も述べたように「そのとき、こんなとき」「お母さん2年我慢してね」ということばと「元気になれるんやと信じているんやな」ということばなど、わたしには、明確にはその意味を捉えられなかったのである。また、強い声の調子や泣くしぐさはわたしのこころを動かした。そして、「だから、もっとね、あれやったら、[……]、いまのいま頑張っているんやな」ということばとそのいい方から強い違和感と疑問を感じ、それがわたしに問いかけるよう促したのであった。「促されて」というのは、つまりわたしが、それをはじめから意図していたわけではなかったということである。

この問いかけは、そのときの体験を伝えようとするCさんの意図にぴったりマッチしたかのように、すかさず、という感じで「というのは」ということばで語りはじめられたのだ。そして、語り出されたのが、「肺の手術しか [……]」という現状と、その意味を表す

「何年生きられるか」という未来の〈子どものいのちの長さ〉⁶⁷であった。Cさんのこのことばを聴いてわたしは、この現実こそが、このときCさんがC1で明らかにしたかったことだったと受けとめた。ことの次第を明らかにしていくCさんのC2のことばの明快さと、子どもの「いのち」の話をまっすぐに語るCさんの態度は、わたしの居ずまいを正した。それは同時にわたしを驚嘆させた。Cさんが語るその態度には、わたしをそのように仕向ける力があつたのである。

「どういうことですか」という問いかけは、CさんがC1でいま語っている過去の体験のそのときその場に立ち返ることを促す。実際に体験した過去のそのときその場で見たり聴いたりしたことをCさんは、いまここで改めて語り直すことになったのだ。そこで語り直されたC2のことばは、不確かな語りであっても、なにかを明らかにしようとするCさんの行為そのものから生まれ、明確な表現とその意味を明らかにしたといえるだろう。したがって「どういうことですか」と問うことの意味は、結果から見てのことであるが、Cさん自身が自分の体験の意味を見いだすことであつたといえるだろう。

その意味は、またCさんが本来の課題を探求する基となつた。このC1の体験の意味を表す〈子どものいのちの長さ〉、この現実こそが、Cさんをつぎの課題（らくするか歩く努力をしようとする子どもの想いを尊重するか）へ取り組むことを可能にしたと、わたしはとらえた。

3. 3 体験の意味が明らかになるということ

自分の体験を改めて語り直すことによって、子どもの〈いのちの長さ〉が事実としてCさん自身に浮き彫りになつた。そのとき、Cさんは、その現実を自己のものとして獲得し、その意味を了解したのだと考えられる。それは、Cさんにとって、Cさん自身の子どもの病いに関する思考が「完成した」⁶⁸ (PhP1, 293) ことでもあつたと考えられる。病いの子どものCさんのおかれている過酷な状況を、明快で的確なことばと凜としたいい方、というよりその態度を、わたしはCさんの「思想（思考）」として受けとつた。

Cさんは〈何年生きて何年あれでという保証はない〉といったあと、「あたし、やから〔だから〕らくして電動いすでもなんでも、あれして車いすでもしてやったらと思うけれど、あの子なりに努力している。ゆっくりでも歩かないと筋肉が衰えるし」と、話してくれた。このことばは、いま述べたように、子どもの病いに関する話が完成したからこそ、別の話題—

⁶⁷ 〈子どものいのちが短い〉ということ、Cさんは「結局、〔いのちは〕短くって終えてしまうでしょう」と（場面5-1・2）で語っていた。

⁶⁸ 注で、メルロ＝ポンティは、ことばについてつぎのように述べている。「もちろん二つのことばを区別する必要があつて、第一は、初めて言表のかたちをとつた真正のことば、第二は、ことばについてのことばであつて、これが経験的な言語の慣例となつている。思惟と同一視できるものは、第一のことばの方だけである」（PhP1 295）。

CさんがC1で考えていた課題一に移行したといえるだろう。つまり、もとの課題に戻ったということである。このことについてはつぎの「だから、[……]」の項で述べる。

ある出来事に関する思考の完成は、したがって、あらたな道を探求する道が拓けたことを表しているといえるだろう。

C2のCさんのことばは、Cさんが「自分のおかれている状態やそのときの状況を知った」(CN 28) ことの現れと捉えることができるであろう。それは、Cさんという患者にとって〈援助へのニード〉が満たされたことを表し、その確認でもあると考えられた。とするなら、〈援助へのニード〉を明確にする過程で、患者Cさんが語り、看護者のわたしが聴くという行為が、いま語っていることの意味を明らかにし、その意味を語る人自身が自己のものとして獲得することを可能にすると考えられる。それはまた、語る人の思考を完成することになる。自分の思考が完成したというその感覚が、あらたななにかを探求する可能性を拓かせるのだと考えられる。

3. 4 「だから」とは

Cさんは、明らかになった病いの子どもの〈余命の短さ〉を現実のものとして知った。そのあとCさんは、「あだし、やから [だから]、らくして電動車いすでも [……]、ゆっくりでも歩かないと筋肉が衰えるし」と〈間〉のあとに語ってくれた。この〈間〉は、限られた子どものいのちを眼のあたりしたとき、「歩かないと筋肉が衰えるし」と努力している子どもの姿を、母Cさんは改めて〈ありあり〉と見たのではないだろうか。そのとき、らくするかどうかを思いあぐねている自分を知り、「間」は、その意味を母Cさんが自分自身に確かめる時間だったのではないだろうか。

〈だから〉、自分の課題であった車いすにするかどうか、その話に移ったと考えられる。このことは、病いの〈子どものいのちの短かさ〉という事実が、「らくして車いすでもしてやったら [……]、筋肉が衰えるし」という、当初の話を考えるための基となった、ということである。

つぎにCさんが語ってくれたのは〈だから〉、『なにもこない一所懸命やったところでなにをするの』って人から質問される」ということばであった。ここでの「だから」という二度目のことばも、〈子どものいのちが短い〉という現実を踏まえての〈だから〉を意味していると思われた。いいかえると、〈子どものいのちの短かさ〉が、避けられない事実であるならば、「なにもこない一所懸命やっても意味がないのではないか」という〈だから〉だと考えられる。

ところで、C1の語りはじめにCさんは、電車に乗ってくる子どもを待っているとき、「こんなときになんでこないまでしてねと思うときがある」と語っていた。他の人のいう「なにもこない一所懸命しんどい思いしてやったところでなにをするの」ということばを聴

いた瞬間、Cさんは、「なんでこないまでして、とか思った」という自分自身のことばを思い起こしたのかもしれない。とすると、このときのCさんのいう他の人とは、他人だけではなく、「なんでこないしんどい思いをしてまで歩くの？ ほそぼそでもいいじゃない」という夫の両親も含まれていたのかもしれない。したがって、〈だから〉の意味は、〈子どものいのちが短い〉という現実を基にして、他の人や夫の両親や自分自身に対して向けられたと考えられる。「でも、親にしてみたら、[……]手助けしてあげなければならない」と。「手助けしてあげなければならない」という義務や命令を表すいい方は、自分に対する母としての決意を表したものと考えられる。このような受けとめ方をした「でも、親にしてみたら、[……]手助けしてあげなければならない」ということばの意味は、「何年生きられるか」という子どもの病いの現実、C3の、らくして車いすにするかどうかを考えるための重要な条件としての意味をもっていたと考えられる。すなわち、〈何年生きられるか〉という子どもの〈いのちの長さ〉が、母Cさんに「いまのいま[子どもが]やろうとしていることに手助けする」という道を拓かせたといえるだろう。Cさんにとって、自分の体験の中心的な意味は、〈子どもの余命の長さ〉であった。この〈子どもの余命の長さ〉を言語化し、それが明白な事実として明らかにされたことが、以後の思考の展開を可能にしたといえるだろう。すなわち、これを土台として、らくするかどうかをCさんは改めて見直すことになった。そして自分自身や親戚の人や他の人のいった〈なにもこないまでして〉という過去の体験とも照らし合わせることになった。この明るみのなかで見直されたことから、「でも、親にしてみたら」という母親としての自分の在り方は生まれたといえるだろう。

3. 5 あらたな道が拓かれるということ

「でもね、親にしてみたら、[……]手助けしてあげなければいけない」ということばこそ、母Cさんが求めていたことばだったと、わたしはとらえた。

C2において、Cさんに子どもと自分のおかれている状況が明らかになった。その意味は子どもの〈余命が短い〉という過酷な現実であった。この事実の意味が、Cさんに獲得されたことによって、らくするかどうかを考えることを可能にした。また、「なにもこない[……]」という他に人のことばのCさんにとっての意味も、それがことばになったときに明らかになった。三者のこれらのことばの意味が明らかになったとき、そこからCさんに浮かび上がったのが、〈親にしてみたら、いまのいま子どもへ手助けをしなければいけない〉ということばであった。このことばは、母親としての自己を自己としてそこにCさんが身を据えたことの現れと考えられた。いいかえれば、Cさんは自分の体験をことばにしたことによって、その意味が、おのずからことばとなって、Cさん自身にあらたな道が拓けたのだと考えられた。

それにしても、わたしが驚き感動し、不思議な感覚を覚えるのは、「でも、親にしてみた

ら [……] という C さんの母としての生き方ともいえることばの湧出という現象である。湧出といういい方は、C さんがそれを意図していたことを意味していない。口を衝いて出た、ことばが一人で飛び出したという感じである。この現象はなにを表わしているのであろうか。また、看護においてどのような意味があるのだろうか。まず、看護にとっての意味について考えてみよう。

看護の責務の範囲は、「患者が自分のおかれている状態やそのときの状況をどう知覚するかを知ること」であった。C さんの場合は、〈肺の手術しか治療法はない〉といういまの状況と、その意味としての〈子どもの余命が短い〉という現実を明らかにし、それを事実として C さんが受けとめたと捉えられた。ウィーデンバックの臨床看護の目的は、「その人がおかれている状態や、その時の状況や、周囲の環境などから、自分が要請されていることにうまく反応できる⁶⁹ ように促す [……]」であった。C さんが「自分の要請されていることにうまく反応できた」ということは、看護の目的が達成されたことを意味しているといえるだろう。その「促し」とは、わたしの場合、「どういうことですか」と問いかけることであった。この問いかけによって、C さんは、「自分のおかれている状態や状況とその意味を明白な事実として、それを獲得し、自分の思考を完成させた。

あらたなことば・道がおのずから生まれるということはなにを意味しているのであろうか。

本節では、語ること聴くことの看護における意味について検討してきた。そこでは看護の目的を達成するには、病者が自分の体験を表現すること—沈黙も一つの表現である—によって成り立っていた。C さんは、自分の体験を語るという行為をとおして、自分のおかれている状況の意味を明らかにした。そこからあらたなことばが生まれた。ということは、ここでは、あらたなことばが生まれるということは、体験を語るという行為そのものを表しているということではないだろうか。後ほど、改めてメルロ=ポンティの考えを参照する。

ところで、「でもね、親にしてみたら、いまのいま [子どもの] やろうとしていることに手助けしてあげなければいけない」ということばに、わたしは驚き感動し圧倒され、なんとも不思議な感覚を覚えたのだ。この感覚をもたせる C さんのことばは、なにを表わしているのであろうか。母としての自分を改めて母として見直したように見えた。また、そこから自分にあるいは他の人たちに反発するかのような強いいい方での「でも、親にしてみたら」ということば、とつぜん口を衝いて出たようないい方、すなわち意図しないところで飛び出したようなことば、「なければいけない」という自分に対する義務とも命令ともいえる強いことば、それらから感じとれるのは、子どもの余命の短さを目の当たりにした母の、言葉の真実さであった。

C さんの「でもね、親にしてみたら」ということばは、C 2 の〈肺の手術しか治療法がなく、再発の可能性もある。何年生きられるか保証がない〉ということばに基づくものであ

⁶⁹ 「うまく反応できる」ということ的前提となる仮説とは、「人は健康で安楽で有能でありたいと欲するものであり、妨害されなければ独力でそのような状態に達しようと努めるものである」(CN 29)。

た。もつと的確に言えば、子どもの病いの現状に現れている〈何年生きられるか保証がない〉という「意味」が、Cさんに「でもね、親にしてみたら」というあらたな道を拓かせたとわたしは思ったのだった。C2のCさんの〈何年生きられるか保証がない〉ということばとしぐさは、わたしが居ずまいを正すほどの澄み切った、冷然とした様相を感じさせた。このように感じさせるCさんのことばの意味を、真正なことばとわたしはとらえた。

Cさんのこの真正と思われることばが、「でも、親にしてみれば」という「あらたな意味を立てた」(PhP2 317)といえるだろう。このようなことばやいい方はCさんにとっては、はじめての所作であり、この所作が、Cさんに「はじめて一つの人間的な意味を与えた」、といえるだろう。そして、このことばや所作の意味はCさんにとってあたらしい意味⁷⁰であって、その意味はCさんに獲得されたのである(PhP2 317)。メルロ＝ポンティによれば、この「意味するという一つまり、或る意味を捉えると同時にそれを伝達するという一この開かれた無限の力をば、究極的な事実として認めねばならぬのであって、この力によってこそ、人間は己れの身体とことばをつうじて、あらたな行動へと、あるいは他者へと、あるいは己れの思惟へと自己を超越するのである」(PhP1 317-318)。

Cさんの〈何年生きられるか保証がない〉というC2のことばは、この意味するという力によって、Cさんは自己自身の身体的な身ぶりとことばをつうじて、「でも、母親にしてみれば、[……]手助けしてあげなければいけない」というあらたな行動へと、自己を超えていったと考えられた。Cさんにとっては、このあらたな道こそが、自己の思考として、究極的な事実として認められたとわたしにはとらえられた。

4 語ることと聴くことの看護における位置づけ

本章では、Cさんが語ってくれた自分の体験とそれを聴いたわたしの体験は、看護という視点でみたとき、それはなにを表わしているのかを検討してきた。そこで、ここでは、その語るという行為、聴くという行為が、看護においてどのような位置づけとなるかを見てみたい。それが明らかになれば、看護実践の場で語る行為、聴く行為がどこでどのようにその力を発揮するかを見とおすことで、看護実践の質を高めるために貢献できるだろう。1. 自分の体験の意味が明らかになることの意味と語ることと聴くこと。2. あらたな道を拓く「でもね、親にしてみれば」の二点から、語ることと聴くことの看護における位置づけを検討する。

4. 1 自分の体験の意味が明らかになることの意味と語ることと聴くこと

⁷⁰ Cさんにとって、病いの子どもとともに体験することは、すべて、はじめての体験であった。その意味でCさんの体験をわたしは、「新しい意味」として捉えている。

Cさんの体験の意味、すなわち、子どものいのちの短さが明らかになったのは、〈援助へのニード〉を明確にするために、わたしが投げかけた「どういうことですか」というCさんへのことばであった。その間に応えて語られたCさんのC2のことばが、Cさんの体験とその意味を表していた。

ことばを語ること聴くことそのものもつ力が、病者としての人間と看護師としての人間との関係を取り結び、そこに病者自身が拓く道が生まれる。それを看護における創造、ナイチンゲールのことばでいえば、アートとして位置づける。看護の援助技術を、看護の目的を満たすための手段としてだけではなく、治療的といえる看護としても考えられる。この二点が看護において、どのように位置づけられるかを見てみたい。

それは、本章2「対話と援助のプロセス」と本章3「語ることと聴くことの臨床看護における位置づけ」で明らかになったことから導き出すことができるだろう。そこでまず、2・3で明らかになったポイントを見てみよう。

「2 対話と援助のプロセス」では、看護を構成する、〈援助へのニード〉の明確化、援助の実施、実施結果の確認は、患者Cさんの体験をあらわすことばやしぐさは、わたしの知覚をもとに行われた。わたしが見聞きし、それに基づいて行った。たとえば、Cさんの体験を表すC1のことばは、Cさんのどのような〈援助へのニード〉を表すのか問われた。なにをいいたいのかわからないC1のことばを聴いて、〈援助へのニード〉を明確化するために疑問が投げかけられた。それに応えた〈何年生きられるか[……]〉ということばで表された子どもの病いの過酷な現実が明らかにされた。明らかになったことが、「らくして車いすにするか」、「筋肉が衰えるし」、と歩く努力をしている子どもの想いを尊重するか、Cさんの迷いを吹っ切る基となった。そして、この「らくして車いすにするか」、「筋肉が衰えるし」、と歩く努力をしている子どもの想いを言語化したことで、自分がなにを迷っていたかがCさん自身に明らかになり、自分が母としてなにをすべきか、母Cさんを導いた。「親として、いまのいま子どもに手助けしてあげなければならない」自分へ。

このプロセスは、病者と看護者のあいだに交わされたことばやしぐさの意味を明らかにすることが、自分を方向付ける。このことを表している。

語ること聴くことが、看護において、このような働きをするとすれば、患者が語り、看護者が聴くという行為は、どのように位置づけられるのであろうか。

援助のどの過程においても、病者と看護師のことばやしぐさの相互作用によって成り立っているとすれば、病者が語り、看護者が聴く、あるいは看護者が語りかけ病者が聴くことは、看護の基本（基礎）として位置づけられるだろう。それは、患者Cさんと看護師のわたしとの対話が、臨床看護の目的である、患者の〈援助へのニード〉を満たすというだけにとどまらない。Cさんとわたしのことばやしぐさの相互作用のなかで生じた「でもね、親にしてみれば[……]」ということばは、Cさんにとっては、母として生きる決意が生まれたあらたなことばの創造だと、わたしにはとらえられた。

4. 2 J.トラベルビーと H.E.ペプローの看護論

J.トラベルビー⁷¹の人間対人間の関係を中心にした考え方と H.E.ペプロー⁷²の治療的な看護という考え方は特有なもので、それらは、語ることに聴くこととどのようにかかわるかをみてみたい。

4. 2. 1 J.トラベルビーの人間対人間の関係—看護の役割を超越する⁷³

先に述べた C1 から C5 の C さんのことばとそれを聴いたわたしのあいだに現れたことばや所作に、わたしは驚き感動した。C さんがこの場面の最後に語った〈でもね、親にしてみたら、[……]、手助けしてあげなければならない〉ということばの意味こそ、看護実践の目ざすものだと、わたしはとらえた。別のことばでいえば、それは、C さんが自分の思考を完成させる体験であり、聴くわたしが C さんの思考を〈受けとめる〉という体験であった。このような意味で、患者と看護者がともに語る聴くことは、患者と看護者にとって、それが自己の生き方をあらたに拓くことを可能にするのだと考えられた。この体験では、病者だけではなく、わたしたちすべての人間のいとなみといえるだろう。

このような体験については、J.トラベルビーのつぎのようなことばが参考になる。「看護における人間対人間の関係は、看護師と人間と、病人あるいは看護師のサービスを必要とする個人との間の、ひとつの体験、あるいは一連の体験をさしている」。また、「患者対看護師のかかわりに、人間対人間として知覚し関係を結ぶためには、《看護師》の役割を超越することが必要だ⁷⁴ という。実際に C さんのことばを聴いているわたしは、〈患者の家族〉ではなく、一人の固有の人間としての C さんの体験を聴いている。C さんのことばに驚き、感動するわたしは、いまここにいる C さんから発せられたことばを聴いているのである。

C さんとわたしの体験は、日常的にお互いがそばにいる人に気づかいをし、支え合う、というわたしたちの根本的ないとなみのなかで体験することでもある。看護とはもともと、傷病者の手当てをする、看取る、世話をする、気づかうなど、そうした行為であった。ただ、いまは、それを、「専門実務看護師」というように、職業や役割として特徴づけられただけである。とすれば、看護のもともとの意味に返って、気づかいや手当、支え合うとき、語る

⁷¹ J.トラベルビー、長谷川浩・藤枝知子訳『人間対人間の看護』医学書院、(1974)。

⁷² H.E.ペプロー 稲田八重子他訳『人間関係の看護論』医学書院、(1973)。

⁷³ J.トラベルビーは、看護の定義をつぎのように述べている。「看護とは、対人関係のプロセスであり、病気や苦難の体験を予防したりあるいはそれに立ち向かうように、そして必要なときにはいつでも、それらの体験のなかに意味をみつけだすように、個人や家族、あるいは地域社会を援助するのである」

(IAN 3)、と。そしてトラベルビーは、「[……]、役割を超越するという意味での人間対人間の関係性においてだけ、一つの関係は確立されるのである」(IAN 47) と。

⁷⁴ J.トラベルビー (IAN 47)。

聴く行為は、看護の質を左右する最大の鍵になるものであり、看護の基本として位置づけられるだろう。なかんずく、Cさんがあらたにことばを創造し、その意味をつくりだすということは、あるいはことばを創造するということは、ナイチンゲールのいう、看護をアートとするその意味を表しているのだ、とわたしには考えられる。

4. 2. 2 H.E.ペプローの治療的なもの

自分の体験を語りはじめ、自分の語ったことばそのものから、Cさんは自分の置かれている状況がどのような意味をもつか理解した。そのとき、Cさんは、母として、自分のやるべき道を見いだした。Cさんのこのような体験をどのように考えるか。ここではそれを明らかにするために、ペプローのいう「治療的な看護」と関連づけて考えてみたい。なぜなら、この〈治療的〉ということばが、語ることと聴くことの看護における位置づけを考えるうえで参考になると考えたからである。

治療は医師の領分である。看護師は治療ということばを使うことはない。ただ、看護のなかでペプローのいう〈治療的〉ということばから浮かんでくるわたしのイメージは、理学療法士によるマッサージや臨床心理士の心理方法やカウンセラーが行なうカウンセリングのような療法である。それは主として身体やことばをとおしてのかかわりであり、それがクライアントの変容を促していると思えた。

いま述べたCさんの体験は、「でもね、母親にしてみたら、[……]」と類似していると、わたしが見たからである。Cさんは自分の体験をことばにしたことで、その意味がCさん自身に明らかになった。そればかりではなく、そこからあらたな自分の道が拓けた。これが自分の体験を明らかにする意味だといえるだろう。Cさんが産みだしたあらたなことばは、看護者としてのわたしが、患者としてのCさんの〈援助へのニード〉を満たすこと以上のことが起こったと、わたしにはとらえた。

ペプローは、「看護は、人びとが成長し、困難により巧みに取りくめるように援助するために、現在おこなっている以上のことができる」(IAN 7)という。この、「現在おこなっている〈以上〉のこと、というのは、看護のプロセスを、成熟を促す教育的手段を考える場合のことだと考えられる。

ペプローは、〈治療的〉ということばの意味をつぎのように述べている。「看護の機能は、人びとの問題解決技能を育てるばあいには、教育的かつ治療的なものとなる。また、あらたな問題に対処させるために、患者を元気づけ、健康を回復させるようなやり方でニードが満たされるばあいには、対人的看護のプロセスは治療的であるといえるのではないか」、と。さらに、「〈看護師と患者が〉問題解決にともにあずかる人間として、知り合い尊敬し合うようになるとき、看護のプロセスは教育的・治療的なものとなる」(IAN 8-9)。このようなことばから考えると、ペプローの〈治療的〉ということばの意味は、「成熟を促す」「問題解決

技能を育てる」[……] 場合に、〈治療的〉であった。また、〈治療的〉というとき、それは、治療的〈ケア〉をする、ということであった。すなわち、治療とは、医師や理学療法士などが行なうような治療を意味するのではなく、〈治療的〉な〈ケア〉であった。

Cさんが、自分の体験を語りつぐなかで、自分の〈在りたい〉道を探し、そこに自ら達した姿をみたとき、わたしは、Cさんが一人の人間として、そこに〈すくくと〉立っている姿を見た。その姿にわたしは打たれた。わたしのこの感動や驚きは、結果からみれば、Cさんはが、ペプローのいう〈治療的になる〉の意味を創り出したといえるだろう。それをわたしは、看護援助ととらえた。とすれば、それは語るという行為、聴くという行為（問いかけることも聴くことの一つである）のもつ力であり、看護援助の根本を為し、看護を基礎づけるものとして位置づけられるだろう。

本章のまとめ

病者が語り、看護者が聴くということは、看護においてはどのような意味があるかを検討した。これが本章のねらいであった。ここでは看護の本質を「患者援助の技術」とするウィーデンバックの考え方を基に考えた。看護者は患者がおかれている状態や周囲の状況のなかで、その人がその状態や状況をどう理解し、感じるか、つまりどう知覚するかが重要である。看護師が、なにを感じ考えているか、それらは看護師がなにをするかだけでなく、どのように行うかと密接な関係がある。臨床看護における援助技術は、思考と感情と目に見える行為によって、援助を必要としている一個人とのかかわり合いのなかで行われるものである。看護師が自分の責務の範囲でなにを行うか、〈どのように〉行うかが臨床看護のすべてであり、本質である。

ウィーデンバックは患者の〈援助へのニード〉を明確にすることを重視した。そのために4つの段階を踏む。〈援助へのニード〉を明確にするということは、患者にもっとも適切な援助のための不可欠な行動である。実践の場では、病者と看護者との相互に関連し合う。そのためには、看護師のコミュニケーション技能がある。その技能とは、看護師に伝えたいと望む考えや感情を表現する能力のことである。また、看護師が患者へのニードを満たすという明確な目的を導き出すための一連の言語的・非言語的作用を含む（CN 44-46）。

補章 自分自身についてのCさんの語り

子どもの病いにかかわる自分の体験を語る一方で、Cさんは、自分自身に起こった出来事を語られた。それは、幼児期や学童期、青年期、結婚後の子育てや、いまの自分自身についての話であった。これは、子どもの病いをともに生きる母としての体験の話の、その背後でベースのように響いてくるようだった。病む子について語るCさんの話を聴く場合、学童期からの過去の体験と切り離しては、わたしにはCさんのことばを聴くことはできなかった。過去の体験を語るときのCさんは、その過去をいま生きているように語られたから。

Cさんが、自分の過去の体験を語ってくれたのは、わたしが感じたことをことばにしたときであった。たとえば、近所の方に留守番をたのまれて、Cさんは犬や猫、花の世話をしている、と話をされた。それを聴いてわたしは、Cさんは豊かな感性をお持ちだなあと思った。その感じをわたしはそのままことばにした。その応えは、「いやいや、わたし自身が捨てられた子だ」ということばであった。子どもの病いやボランティア活動の話から、とつぜん、過去の子どものころの話に変わったことにわたしは驚いた。驚いたのは、話の内容の意外さだけではなく、その率直な語り方だった。このように自分の過去の生活を語ることは、Cさんにとって、どのような意味があるのだろうか。また、それを聴くわたしにとって、どのような意味があるのだろうか。Cさんの語られる過去の話は、病いの子どもと生きるCさんのいまの生き方にどのように影響しているのか。それを明らかにしてみたい。

構成は以下のとおりである。

1. 母に対する反発がなくなった
2. 中学時代から小学時代へ
3. 戦死したお父さんを悲しませてはいけない
4. 一番残念なのは自分が子どもらしくない子どもだったこと

対話の場面において、話が長くなる場面は筆者が再構成した。

1 母に対する反発がなくなった

1. 1 母を看取る

Cさんは、初回のインタビューから、ボランティア活動の話や順調だったいままでの生活について語ってくれた。子どもが病いにかかってからは、「この一年あの子に捧げる」などの話をされた。Cさんのその話し方は、初回のインタビューにもかわらず、率直だった。その率直な語りには、わたしは自分の感じたことを、Cさんにいわずにはいられなかった。そ

れは、つぎのようなことばになった。

N なんか、ほんとにとっても、こう、こころが豊かでいらっしゃる、感じられる、感受性といいますか。

C いやいや、わたし自身がね、(間) [母が] あたしおいて再婚した、だからわたしは母に捨てられた子だっていう、ね、悪い考え持ってたんですよね。でも、去年のあの5月に引き取ってね、9月まで面倒見たんですよ、その母の面倒をね。そのときも、なんか、そういう自分にしこりを持ってた人をなくするようにね。あたしが世話、毎日1日に3回 [病院に] 通ってたんですよ。だからこれは、その、わたしが捨てられた子と [受け] 取っているから、ちゃんとそのしこりをね、取り除いてという意味でお母さん自分のそばに来てくれたんちがうかなって。で、そんなして、その亡くなるまで世話して、そのあいだはお別れの時間やったんかね一って。体拭いてあげたりね、歯磨きしてあげたり、あたしも、その、捨てられたりいうあれがなくなったり。

N ほんとに、なんか思いが残らないように。

C だからね、小さいときによくね、あたしが男の子だったらお母さん、おいて行ったやろかとかね、お母さん行かなかったんちがうかなとかね、よく考えて。さから、子どもごころに枕がいつも涙で地図が描かれていた。お母さんあたしが嫌いかな。だから、その、お母さんに意地みたいなのがあってね、[夫と] 別れることは絶対にしない、そういう反発心 (間)、だから、なんかずっとしこりがあったんでしょね、母に。

でも結婚して、お母さん、あたしの犠牲にならなくてよかった。だから、そのままだったら、母としてしか生きられなかったやろうけど、まだ女として生きれたんだなああって、[わたしが] 結婚したとき、はじめて、あたしの犠牲にならなくてよかったあ一ってね。それまではね、なんでえ一って、犠牲になったいうたらお母さんに対してもすまない (力をこめて) という気持ちがたぶんあったでしょうけど。お母さんは、お母さんとして生きる道、精いっぱい生きてんなあ一って、そのときになってはじめて思えたんですよ (間)。(1-4)

「こころが豊かでいらっしゃる」というわたしの語りかけにCさんが応えられたのは、「わたし自身がね (間) [母が] あたしおいて再婚した。だからあたしは、捨てられた子だっていう、悪い考えを持ってたんですよね」ということばであった。わたしはこのことばに驚いた。子どもの病いやボランティアの話を聴いて感じたことを伝えたのに、それとはまったく別の話が返ってきたという感じだったから。また、「捨てられた子」という胸を衝かれるようなことばだったから。そしてまた、「でも、母を引き取って面倒みたんですよ」と、急カーブを曲がるように展開するCさんの話にも、面食らった。どうということ？ と。しか

し、「でも」、と言って語られた「母を引き取った」ということばを聴いて、Cさんは、その体験をまっ先に話したかったのではないかとわたしは思った。そして、「母に捨てられた子だっという悪い考えをもっていたんですよ」ということばは、母を引き取った話をするために必要な「まえおき」だとわかった。あとから。

ところで、「母を引き取った」話のなかには、ことばのはしばしに感じる、気になる表現があった。しかも、それはCさんにとって重要な意味があるように思われた。まず、「母を引き取って面倒を看た、その母の面倒をね」という〈その〉とはどういうことか。Cさん〈その〉母の世話をしたのは、母に捨てられた子だと悪い考えをもって、自分の「しこりをなくすため」であった。「自分のしこりをなくすため」ということは、「悪い考え」と思っているその自分に、Cさんがこだわりを持っていたことがうかがえる。つぎに語られた「だから、これはわたしが捨てられた子だ、と〔Cさんが受け〕取っている。だから、そのしこりを取り除くという意味で、お母さんがそばにきてくれたんちがうんかねえー」と、Cさんは語った。「捨てられた子だと〔受け〕取っている」というCさんのことばは、お母さん〈が〉自分を捨てたのではなく、Cさん自身〈が〉捨てられたと〈受け取っている〉ということを表している。母〈が〉ではなく、自分〈が〉というCさんのこの転換は、Cさんにとってもっとも重要なといっていいほどの意味をもっていたと思えた。母〈が〉ではなく、自分〈が〉であるなら、Cさんは、お母さんに反発する根拠がなくなる。つまり、捨てられた子だと、自分が受け取っていたということは、それに気づいた時点ですでに、お母さんへのしこりは取り除かれていたと考えられる。したがって、「そのしこりを取り除くという意味で、おかあさんがそばにきてくれたんちがうんかねえー」ということばになったのであろう。単に、「しこりを取り除くために、お母さんがそばにきてくれた」というだけではない。〈そばに来てくれたんちがうんかねえ〉ということばには、「お母さんの世話をしたい」というCさんの思いを受け入れて、〈お母さんがそばに来てくれた〉、その歓びが込められているようにわたしには思えた。また、「そんなして、亡くなるまで世話して、そのあいだはお別れの時間やったんかねえー」ということばには、亡くなるまで世話しているあいだに、お母さんに対するCさんのしこりが溶けたことを表している。「そのあいだはお別れの時間やったんかねえー」という表現の仕方は、Cさん自身にともなく、わたしにともなく、独り言のように語り、問いかけているようであった。お母さんを慈しむCさんの深い思いが、思わずことばになったような、なんともいいようのないほわっとしたものがわたしには感じられた。

「身体を拭いてあげたり、歯磨きしてあげたり」ということは、Cさんとお母さんの身体が直接触れ合うことである。「身体を拭く、歯をみがく」という動作は、Cさんとそれぞれの身体が清潔になって気持ちよくなるだけではない。ずっとベッドに横たわっているお母さんに、Cさんが想いを込めて、あたたかいタオルで身体を拭く。それは、お母さんが自分のそばにいることを、Cさんが確かなこととして感じるもっとも有効な手段であっただろう。そこでは、お互いがお互いを身体で感じ、ことばはいらない。それはCさんが「ずっと」願い続けていた幸せな時間だったのではないだろうか。「身体を拭いてあげたり、歯磨

きしてあげたり」することは、お母さんだけではなく、〈あたしも〉という C さんのことばが示しているように、それが C さんのしこりがなくなることそのものだった、ということであろう。C さんにとっては、幼少期からもちつづけていたしこりがなくなったということは、C さんの人生を劃するような大きな意味をもつ時間だった、とわたしは読み取れた。

このあと C さんは、「小さいときによく思った」こととして、つぎのように語られた。「あたしが男の子でなかったから、あたしが嫌いだったから、お母さん出て行ったのか。だから、枕が涙で地図が描かれていた」。だから、お母さんに対する意地、反発心があったのか、と自分に問うようないい方で C さんは話された。そして、C さんは。お母さんの世話をしているうちにしこりがなくなった」と、いった。C さんは、自分が〈しこりがなくなった〉といったときに、C さんは、自分にしこりがあったと、はっきりと自覚したのではないだろうか。

そのとき、C さんは、あらたな課題へと向かっていた。すなわち、しこりは〈いつから〉あったのか、という疑問が C さんに湧き上がった。つまり、「小さいとき」の話へ。意図的ではなく、自然に。すなわち、「小さいとき、あたしが男の子だったらお母さん、おいて出て行ったやろかとかね、[……] お母さんあたしを嫌いだったのか」と。その葛藤で、子ども C さんの「枕はいつも涙で地図が描かれていた」。それはまた、「お母さんに対する意地やそういう反発心となった。だから、なんかずっとしこりがあったんでしょね、母に」ということばになったように、とわたしには思えた。「だから」で繋がれたことばを遡って行くと、反発心の発祥の元へつながっていく。C さんは、「反発心」といった瞬間、反発心がどのようにして生じたのか、C さん自身が気づいたのではないだろうか。反発心の後の間・沈黙は、C さんが気づいた瞬間の沈黙だったのではないだろうか。つまり、反発心というしこりは、「あたしが男の子でないから、お母さんはあたしが嫌いなのか、涙で枕に地図が描いていた」、その小さいときに生まれたのだとわかった、ということであろう。「だから、なんかずっとしこりがあったんでしょねえ」ということばになった。「ずっと」の意味は、小さいとき、お母さんが C さんをおいて出ていった、それ以来のことを指す。「しこりがあったんでしょねー」といういい方には、しこりが生じたそのときに遡って、小さかったとき以来のさまざまな出来事とともにその時間の長さが、瞬間に浮かび、それを C さんがじっと見ている、そのように感じられた。

しかし、「ずっとしこりがあったんでしょね」といったあと、C さんは、「でも」と言って、自分が結婚したときのことを語られた。この「でも」は、「ずっとしこりはあった」、そのしこりを否定することばだと考えられる。ずっとしこりはあったけれども、「自分が結婚したとき、はじめて、あたしの犠牲にならなくてよかったなあってね。[……]、お母さんは、お母さんとして生きる道、精いっぱい生きてんなーって、そのときはじめて思えた」。このことは、お母さんの子どもであった C さんが、結婚したことによって、お母さんと同じ立場になった。そのとき、C さんは、お母さんがどのような思いで再婚したかを考えられるようになった。C さんは、「そのとき、はじめて、お母さんが自分の道を生きたことをよかつ

たと思えた」。お母さんに捨てられた子と思っていた C さんは、お母さんが、自分の犠牲にならなくてよかったと思える C さんに変わったということである。その変化は、自分がお母さんの「犠牲になったといったらお母さんにすまないという気があった」という C さんのことばからも、はっきりと見て取れる。

C さんの「でも」は、お母さんへのしこりがなくなった、それとの連関で、結婚したときの自分の変化が思い出された。それは両者の変化の在り様が同様のものと、C さんが気づいたということであろう。C さんにとっては、それは、あたらしい発見だったのかもしれない。

1. 2 お母さんは自分の道を精いっぱい生きた

C さんは、お母さんを引き取り、亡くなるまで世話をした。お母さんを引きとったのは C さんにとっては、自分が捨てられた子だと悪い考えを持っていた。そういう自分のしこりを取り除くという意味があった。身体を拭いたり、歯磨きしてあげたりしているうちに、母に対するしこりはなくなった。このような C さんの変化を、メルロ＝ポンティの「概念の相対化」⁷⁵ という考えを援用し、考えてみたい。

C さんがお母さんを引き取ったのは、お母さんが病いにかかったからであった。このことは、お母さんの家族と、C さんの家族の状況を変化⁷⁶ させることになった。それはいまでは、お母さんと C さんとの関係が変わったことを意味していると考えられる。いままでの C さんは、お母さんに世話される—お母さんが子どもの C さんに会いに来られていた—立場だった。しかし、いまや、C さんがお世話する立場になった。役割が入れ替わったのである。お母さんを引き取って面倒を見ようと思ったそのとき、C さんにとっては、自分はお母さんに捨てられた子ではなく、お母さんの面倒を見るわたしに変わっていた。この変化は、「わたしが捨てられた子だと〔受け〕取っているから」ということばと関連していると考えられる。C さんが、自分は捨てられた子だと「受け取っている」というのは、〈お母さんが〉わたしを捨てたのではなく、〈わたしが〉捨てられた子だと勝手に「受け取っている」ということを表す。これは、C さんのなかで、お母さんに対する見方が、前とはすっかり変わってしまったということである。お母さんを世話するということは、C さんにとっては、しこりをなくすためであった。C さんが自分は捨てられた子だと思ったり、お母さんの犠牲になったと思っていたということは、お母さんに対して「すまない」という気持ちもあったことを表している。C さんのこのようなことばは、お母さんに捨てられた子ではなく、お母さん

⁷⁵ メルロ＝ポンティ、滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』みすず書房、(1966, p.122)。わたしは、メルロ＝ポンティのこの「嫉妬の克服」をとおして、C さんの「反発心」について考えてみた。

⁷⁶ C さんのお母さんは、再婚して子ども (C さんの義理の妹) といっしょに東京で暮らされていた。妹には、4 歳の子どもがいた。C さんが見たところ、その妹はお母さんの面倒を看れる状態ではなかった。C さんが東京まで 2、3 回通っているうちに、C さんのご主人が、「引き取ってやったらどうか」、と言ってくれた。そのような事情で、C さんはお母さんを引き取って世話をすることになった。

に対する C さんの熱い思いがあったことをうかがわせる。

話をもとに戻すと、要は、C さんがお母さんを引き取って世話をしたその時点で、C さんのお母さんへの反発心・しこりはなくなっていたということである。つまり、お母さんに対する C さんの反発心は「克服された」ということである。メルロ＝ポンティによれば、「嫉妬が克服されるのは〈過去-現在-未来〉という図式が構成されたおかげ」⁷⁷ である。〈過去-現在-未来〉という図式が構成されたとは、C さんの場合、いままではお母さんに捨てられた子だと反発をしていた。しかし、いまは、それを取り除くためにお母さんを世話している。そして、これからは、反発心をもたない自分になる、と C さんは思っている。つまり、いままで、いま、これからという図式が C さんに構成されたといえるだろう。いいかえれば、C さんは、お母さんに捨てられた子という態度から、お母さんをお世話する・迎える態度に変わったということである。「〈わたしが〉、捨てられた子やと〔受け〕取っているから」、ちゃんと、そのしこりをね、取り除いてという意味で、お母さんは自分のそばに来てくれたんちがうかなって」ということばがそれを示している。〈お母さんが〉自分を捨てたと思っていたが、そうではなくて、〈わたしが〉捨てられた子だと〈受け取っていた〉。C さんの観方の、この 180 度の転回が、「そんなして、その亡くなるまで世話して、そのあいだはお別れの時間やったんかねーって」ということばを語らせたのだと、わたしには捉えられた。そしてこのことばは、亡くなるまでお母さんをお世話した充足感と同時に、お母さんに対する深い愛情を感じている自分を、C さん自身がある感慨をもって見ている、わたしにはそのようにとらえられた。

「ずっとしこりがあったんでしょね」といったあと、「でも」と言って、C さんが結婚したときのことを語られた。「結婚してはじめて、あたしの犠牲にならなくてよかった。お母さんは、お母さんとして生きる道、精いっぱい生きてんなあーって、そのときになってはじめて思えたんです」と。「結婚してはじめて思えた」という C さんのことばは、しこりがなくなったときの態度の変化について語られたのだと考えられる。すなわち、「結婚してはじめて思えた」ということは、結婚するまでは、「わたしをおいて出ていった、わたしを犠牲にしたお母さん」としか思っていなかった。しかし、いまは「お母さんはお母さんとして精いっぱい生きてんなあーって」思っている。しこりがなくなったという C さん、結婚したときはじめて、自分の道を生きているお母さんを認めたという C さんは、お母さんとの関係のし方を創り直し、過去やいま現在、そしてあたらしい未来を手に入れた⁷⁸ のだと、わたしには考えられた。

このようにして反発心を克服すること—結婚してはじめて思えたことも—、それは C さんが、概念を「相対化」したということであろう。子どもと母の関係は、役割上のことであって、子どもだった C さんとお母さんとの関係は、自分がお母さんを世話するようになったとき、変わったのである。子どもであったときの C さんにとっては、母と子という概念は

⁷⁷ 前掲書 3.122)。

⁷⁸ 同上、(p.123)。

絶対的なものであった。しかし、頻繁にはないにしても、自分に会いに来てくれた、そのお母さんの世話をする C さんは、もう世話をしてもらう子どもではない。すなわち、C さんにとってのお母さんはいまでは、C さんが子どもであったときの自分と同じ、世話されるお母さんである。C さんは、お母さんに世話されていた子どもだった自分は、お母さんを世話するお母さんの子どもである。

C さんがお母さんに対してもつしこり、反発心、という問題を解決することになったのは、母と子という概念を相対化することによってであった。母と子の関係は個人としては絶対的であるが、役割〔母は子どもを慈しみ育てる〕から見れば母と子という関係は相対的なのである。家族のなかでの親と子、兄弟の年上年下というそのなかでの位置によっては、脱中心化、自分を中心からはずさなければならない。C さんの場合、母と子の関係は、お母さんが再婚したことによって起こった状況の変化であり、子どもの C さんは、拒否していたのである。

C さんは、このあと、中学生、小学生時代にさかのぼって、その生活を語られた。

2 中学時代から小学時代へ

C さんの話は、結婚したときの話から、中学時代から小学時代の話になった。「ずっとしこりがあったんでしょね」の「ずっと」を、さかのぼるかのよう。

2. 1 多感な中学時代

中学時代なんかすごく自分がつらい思い、あの一、やっぱ多感な時代やったかね。自分は捨てられたという気持ちがあって、すごく、心のなかでは反発していたけれど。なんの一言、その会う機会があっても、よう言わなかった、(間)。いうたら嫌われるちがうんかな、もう、来てくれなくなるんちがうんかな、というのがあったから。だから、いつもいい子で、だから成績も頑張って、見せるのがあれで、いい子でないといけないというような感じで。(1-8)

多感な中学時代は、C さんにとって、つらい時代であった。そのつらさは、お母さんに嫌われること、お母さんが自分に会いに来てくれなくなることであった。お母さんに嫌われ、自分に会いに来てくれないことは、〈自分はお母さんに捨てられた子〉と思っている C さんにとっては、それがまさに現実のものとなるような脅威だったのではないだろうか。このような怖れを C さんは「中学時代はつらかった、多感な時代だったから」ということばで表している。「怖れ」ということばを C さんは使われていない。しかし、お母さんに嫌われる

こと、お母さんが会いに来てくれなくなることを怖れていた。Cさんはころのどこかでつねに、この怖れを抱いていたのではないだろうか。だから、Cさんは、お母さんに反発していても、お母さんに「会う機会はあっても」、言えなかった。だから、Cさんは、成績も頑張って、「見せるのがあれ〔楽しみ?〕で」、いつも「いい子」でいなければならなかった。Cさんは、お母さんに対する反発とお母さんに愛してもらいたい、会いに来てほしいという思いとのあいだで揺れ動いていた。Cさんの中学時代のつらさは、この葛藤ともいえる状態だったのではないだろうか。

2. 2 傷ついたなにげない一言

でも、祖母はあんたはねアヒルの子やね、よう言われてね、アヒルは卵を産みつばなしでね、(小さな低い声で) 育てないんですって。鶏がね、ちゃんと育てるって。祖母に教えられて、はあー、あたしはアヒルの子かって。だから、なにひとつ祖母にもねだらなかつた。あれ買ってこれ買ってとは絶対言わなかつた。だから、お店やさんに行って、まあ、なんてこのお孫さんかわいくないな、おばあちゃんがこの赤い靴買ってあげるっておっしゃってるのに、なんでいらないっていうの? 高いものはいいていう感じ。わたしはアヒルの子やいうのがここにあつて(頭を指して) ね、それを身近にわかつたから、祖父母にはこれ以上無理言つてもできない、いうのが、あつたみたい。(間) だから、その、お店の人にかわいくないといわれたのが、未だに覚えていますよね。だから、なにげない一言つてあるんだなーつてね (間)。(1-9)

「いつもいい子でいないといけない感じで」ということばについて、「でも、祖母によくあんたはアヒルの子だといわれた」という小学生時代〔と思われる〕の話へ移つた。Cさんが語られた「あんたはアヒルの子だ」ということばに、わたしは強い衝撃を受けた。それはどういう意味だろうか。

そのとき、Cさんは、なにを感じたのであろうか。「はあ、わたしはアヒルの子かって」と自嘲気味にいわれた。それは、人間ではない〈アヒル〉にたとえ喩えられた屈辱、深い傷を負つたCさんが、その傷を自嘲する仕方でも表した。「アヒルの子か」といういい方は、アヒルの子といわれたその自分をどこか突き放しながら、祖母を突き放しているように感じられた。「自分を突き放し」とは、わたしには、自分をアヒルの子といつた祖母のことば、それは「わたしではない」と祖母に突き返すことばのようにも感じられたということである。それは、祖母に対する怒りでもあつたのかもしれない。それが「だから、なにひとつ祖母にねだらなかつた。あれ買ってこれ買ってとは絶対言わなかつた」ということばに現れている。Cさんの「まあ、なんてこのお孫さんかわいくないな、おばあちゃんがこの赤い靴を買つてあげるとおっしゃっているのに、なんでいらない、ていうの?」というお店の人のことばを、

Cさんは「いまだに覚えている」といわれた。そして、「なにげない一言ってあるんだなー」と。Cさんは、これ以上祖父母に無理をいってはいけない、高いものはいららないと思っていた。そのような子どものCさんの想いを、お店の人は知る由もなかった。「なにげない」とは、このような「お店の人にとってのなにげない」である。しかし、「なんてこのお孫さんかわいくない」ということばは、幼い子どものCさんにとってなんと残酷なことばか。「〈いまだに〉覚えている」ということは、Cさんにとって、それがいかに大きな出来事であったか、Cさんのところに深く刻み込まれたことを表している。そのことばが、感じやすい子どもごころを踏みにじった。子どものCさんにとっては、自分の存在を否定するのも同然のことでもあったのではないだろうか。

2. 3 真っ暗ななかで

「いつもいい子で」、「なにげない一言」の話が一区切りついたのか、Cさんは、「自分はつねに頑張り屋さんだった」と語りつがれた。「子どもたちにはね、なんでもやってやりたい。だから、スキーにスケート、全部あたしが連れて行きましたよね。主人は忙しかつたもので、母子家庭みたいで。[……] 自分がないものをしてあげたかった。夏休みにはキャンプや〇〇パークに行ったり」など。そして、「祖母も母も仕事していた、うちはみんな共働きで」のあと、Cさんはつぎのように語られた。

〔祖母は仕事で〕帰りがおそく、だから、あの、いつも真っ暗ななかで育ってるんですよ。夕方帰っても自分、自分で電気がつけられない。はい、で、あの時代はもちろん火の気ないですよ。だから、みなが帰って来るまで、ずーっと待ってる。だから、もう生まれ落ちたときからそういう環境で、いまみたいに保育所とかそんなないから。だから、もう、鍵っ子のはしりいうかね。だから、夏は遅くまで明るいからいいけれど、冬なんか早く暗くなるでしょう？ 家に入っても背の高いあれ〔電燈のスイッチ〕ですよ、自分自身で付けれない。だから暗いなかで、はい。(1-10)

この場面で語られたCさんの体験を、わたしは、二つの視点から見てみたい。一つはCさんの家族構成から見る。二つ目は、Cさんが「あの時代」という「戦後まもないころの」の生活から見てみたい。Cさんを育ててくれているのは、祖父母である。Cさんの家族は、この祖父母とCさんの三人である。祖父母はともに働いている。祖父母は仕事で帰りがおそくなる。したがってCさんは、学校から帰っても誰もいない。「鍵っ子のはしり」だった。「いまのように保育所があるわけではない」。もう一つは、Cさんが「あの時代はもちろん、火の気はない」、という暖房の問題である。冬は日が短く、早く暗くなる。小さい子どものCさんは手が届かず、電灯をつけられない。スイッチが、いまのように小さい子でも手が届

くところにあるわけではない。冬の寒いなかでもこたつやストーブなどもない。戦後まもない当時は、火鉢や囲炉裏はあっても、小さい子どもの C さんがそれを扱うことはできなかっただろう。寒くて暗いなか、一人で祖父母を待つ C さんは、どれほど心細かったろうか。かすかな音にも怯え、ビクッとする。寒さ暗さは物理的なものだけではなく、そのなかでたったひとり、待っている子どものころそのものの寒さ暗さではないかと思われた。「家に入っても背の高いあれ〔電燈のスイッチ〕で、自分ではつけられない。だから、暗いなかで」、ということばは、ただ電気のスイッチを入れられなくて暗いなかで過ごす、というだけではなく、その暗さと寒さのなかで、祖父母が帰ってくるのを待つ、ころの暗さ、寒さの現れのように感じられた。

ところで、C さんは、「嫌われないか」「わたしはアヒルの子」、「なにげない一言」、「真っ暗ななかで」という話をすることによって、C さんはなにをいいたかったのだろうか。これらのことばは、子どもの C さんのころに深い傷を負わせることになった。それはしこりとなった。C さんが、中学時代から学童期へさかのぼる形で語られた話は、ずっとしこりがあったんでしょね」のあとからであった。とすると、C さんは、「ずっとしこりがあった」というその延長線上で、過去のつらかった話をするようになった、ということ暗に語ったということではないだろうか。いずれにしても、これらの話は、C さんがいかに悲しくつらい時間を小さいときからずっと生きてきたか。それをわたしに伝えてくれた。

3 戦死したお父さんを悲しませてはいけない

インタビューの 1 回から 3 回まで、C さんの話は、苦しいなかでも前向きに生きようとする姿勢が、つねに感じられるものであった。

子どもは、鼻からカテーテルをしているのをみなから見られるのが恥ずかしかったみたい。しかし、みんな仲間たち（訓練所の）といっしょにいるのが楽しいみたいで明るくなった。その人なりに努力されているのを見て、自分も苦しいけどやらねばならないことがいっぱいあることに気づいた。このごろは自分から外に出かけるようになった。このような話を聴いて、わたしは、4 月に最初にお会いしたときとちがって、娘さんも C さんもずっと楽になられた感じがした。C さんは、自分も「娘のことがきっかけでいろんな人の出会えるし、わたしも、さあ一つとなんのてらいもなく手助けできる、ほんとね」と話された。このことばを聴いて、わたしは、わたしが感じていたことをことばにした。

N もともとわたしが感じるのは、あの一、なんというか、世の中をよく見てね、自分自身がそういうなかから自分で学んで、ああ、なんか積極的に生きようという、そういうのおもちじゃないかな。

C それいうよりも、子どもなりに、わたしはいらぬ子だったという、つねにいい

子で認められたい、自分の願望があったんちがうかなと。だからいろんな資格とったり、あの、絵画展でも、スポーツでも、賞もらうことに打ち込めた？ おじいちゃんおばあちゃんに、というのがつねにあったですよ？ だから、それなりに努力はやってた？ もうひとつ一番心のほんとは（強い口調で）大事にしてたんは、お父さんを悲しませてはいけない。戦争で死んで、たった一人残された、いうのが。あたしがお父さんのことを思わないでだれが思うんだって。お父さんはつねに自分のそばにいてくださって、だから、お父さんのために自分が、つねに清く正しく美しく（笑い）じゃないけれど、そういう自分であらねばならないというね、あれはあったですよ。だから、ま、根底には、なんでお母さんわたしを残して行ったの？ いうのはありますよね。だから、それに対する反発もあったと思いますよね。でもその若い20歳そこいらのお父さんがね、もっとやりたいことあったのについていうのも、あたし自身もね。

N ご存知？ 覚えてらっしゃるの？

C ぜんぜん、6ヶ月なんです。6ヶ月といっても、[父が]戦争行っての6ヶ月なんです。わたしはよくわからない？ だけど、その学生時代に絵を描いてるあれ[キャンパス]に向かって、あの描いてる姿を写真にとったりとかね、野球してる姿があったり、山登りのね、写真が残ってるんですよ。だからそれを宝にしてんのと、戦地から来た手紙のね、必ずあたしのことがね、よろしくたのむって書いてあるんですよ。雅子[仮名]のこと頼むって、最後に必ず。こんだけほど（手でその厚みを示して）みなに書いてあるんですよ。だから、支えですよ。母にきた手紙だけれど、わたしの宝物？ だからそんなんがあったかしらんけど、お父さんが残していった子だからというのがね、つねにありますよね。そんなんがあったからかもしれないけれど。（4-11-12）

Cさんのこのような話を聴いて、わたしは、前向きに生きようとする姿勢が、Cさんにはずっとあるように見える、といった。このことばに、Cさんはそれを否定するようない方で「それいうよりも」、とつぎのように語られた。ここでも、祖父母に認められたいという願望があった、という話であった。しかし、Cさんがもう一つこころのなかでほんとは一番大事にしていた、と強い口調でいったのは、戦争で死んだお父さんを悲しませてはいけない、ということであった。「雅子[仮名]のことを頼む」、と毎回書かれた手紙はCさんの宝物だった。そのようなCさんにとっては、たった一人残された自分しか、お父さんを思う人はいなかった。「あたしがお父さんのことを思わないで誰が思うんだ」ということばは、天に向かって自分の悲しみやお父さんに対する哀惜の想いを大声で叫んでいるCさんをイメージさせる。それは、自分自身の深い孤独を、若くして戦死したお父さんと重ね合わせるようなCさんのこころの哀しさを感じさせた。とはいいいながら、お父さんのために自分がつねに、清く正しく美しくと、照れ隠しのような笑いとともにい

われたこのことばは、いかにも C さんらしい表現に聞こえた—C さんはよく比喩を使って表現された。ここには、ちょっと前とは違った余裕を感じさせる。「根底には、わたしを残して行った母に対する反発があったかもしれない」、という C さんのことばからは、母に対する反発も、それを距離をおいた目で捉えられているのが感じとれたから。

4 一番残念なのは、自分が子どもらしくない子どもだったこと

C さんは、病いの子ども〔娘〕の変化をつぎのように語られた。

身体障害者の方たちのなかに入ってみて、娘は、〔自分より〕もっともっと努力（強い調子で）している人がいるという、それがわかってから、娘は、自分もやらなければいかんというのがわかってきたみたい。あの子なりに変わってきている。〔娘の〕婿も、孫の個人懇談に行ったりしてくれている。孫〔女と男の二人〕たちも自分たちのこともやりながらお母さん〔病いの子ども〕の手伝いをしている。反抗期で難しい時期なのに、家族全部が団結している。（5-3）

そして、C さんは、「でもときどき」、と言って、お孫さんたちのことをつぎのように話された。

「今日は兄ちゃんの当番やのに、なんでわたしがせないかんの、ずるいや」、と〔女の子が〕言っているのを聞くとほっとする。ああ、この子、いいたいこというてるなどと思って。いままでだったらがまんしてがまんして、ボロボロっと泣くだけやったんが、ああ、いえるようになって。だから、やっぱり発散しないことにはねー。（5-3）

C さんのこのことばを聴いてわたしは、自分が思ったことをいった。「前回、『泣くにまかせて』とおっしゃってたでしょう？ そのとき、つらいとき苦しいとき、泣くとか文句をいうとか、それが大事だと思ってらっしゃるんだなあって思って」と。すると、C さんは以下のように語ってくれた。

C というより、自分ががまんしてたでしょう？ お父さんが早く戦死して、おじいちゃんおばあちゃんに世話になりながら、あー、だからね、なんか、自分で一番残念なのは、自分は子どもらしくない子どもだったんですよ。だから、やっぱり人間形成（間）の上でゆがみ、ひずみになってるんじゃないかなって、自分を分析したときにね、思うんですよ。だから、あ（詰まった感じの声で）なんか、心のなかでいつもお父さんが悲しむからとかね、やっぱり自分はいらぬ子だから迷惑かけ

たらいかんのだとかね、がまんがまんがずっとあったでしょう？ だから、泣くいうたらみなが寝てから枕を濡らして泣くぐらいで。認められるためには成績がよくなかったらあかん？ ていう、なんか自己防衛みたい？ だから、あー、幼児という成長段階でね、人間てひねくれてるように育ってしまうのかなって。

だから、孫にはね、もう、その自分をさらけ出すぐらいのね、そういうあれがなかったら、やっぱりストレスとして、どういうかね（間）。変な負けない根性とかね、自分でも自分がかわいくないと思うことがあるんですよ。同じ、一度しかない人生だったら、みんなにかわいがられてね、ずっと行きたいなと思っても、その、できない自分がそこにある。だからそのとき、（間）やっぱり人として不幸なんとちがうかな、なんかね。

だから、やけどしたんですよ（突然という感じで）。あの、その、なんか損な自分だなと思う自分がいやなん。「いや」というてね、休むなりなんなりしていいのに、口には言わないけれど、中西さん（筆者）だからいえるけど、なんでわたしがこんな立場に立たないかんのか（強く）とか、うっぶんがたまる。

N 自分でも言えばいいのと思うんやけど言わない。

C それ言わなくて自分が無理して、人はなにもせえというてないのに、させられていると自分が思って、自分は損だなと思う自分がいや（間）。

というより、やけどしたんですよ。けっきょく、嫁の立場で、手伝わなければいけないって思って手伝っている隙に。それはなんでかという、わたしが遠慮したばっかりに、ちり鍋をまともに被ったんですよ、長男が。関節から顔から全部（ひどいという感じで）、ケロイドがあるんですよ。（悔いが残るといふ様子で）子どもをね、見てやってなかったからいう、その自分の負い目があるんですよ、未だに。

N 遠慮して、なんかいっぱい自分が抱え込んで、そのときはなんかこう、自分がなんかちがう、とどっかで思いながら全部引き受けてきた、そういう自分、そうやってなってる。

C そのときね、子どもを犠牲にしてしまったんちがうんかなって。だから、（間）やっぱりそやから、未だに、その、その、ごめんねごめんねって、[母 C さんが] 泣いたんが、未だに親子関係のなかであるみたいでねー。だけど、子どももなんかもう、絶対いやや、できないということは言わなかったからね。

N ほんとに、ほんとに頑張ってる。（5-5-6）

わたしの語りかけに、C さんが語ってくれたことばに、わたしは「エッ、なにかちがう」と思った。わたしは、お孫さんにたいする C さんの考え方について語りかけたはずだったのに、C さんは、自分のことを語りはじめられた。「というより、自分ががまんしてたでしょう？ お父さんがはやく戦死して、おじいちゃんおばあちゃんに世話になりながら。あー、（だからね）、なんか、自分で一番残念なのは、自分は子どもらしくない子どもだったんで

すよ。[……]」、と。しかし、「〈だから〉、孫にはね、もう、その自分をさらけ出すくらい
のね、そういうあれがなかったら、やっぱりストレスとして、どういうんかね」ということば
を聴いて、わたしの早合点だったことに気づいた。

「というより、自分ががまんしてたでしょう？ [……]」という話は、「だから、孫にはね、
その自分をさらけ出すくらい
のね、[……]」という話すための〈前置き〉だったことがわか
った。「だから」という接続詞がそれを明確に表していた。

それはそれとして、「一番残念なのは、自分は子どもらしくない子どもだったんですよ」
という C さんのことばが、わたしには気になった。「あー、なんか、」という感嘆詞やいい
よどむいい方は、「自分が子どもらしくない子どもだった」ことを強調し、その自分に対す
る、C さんの深い哀惜の念が伝わってきた。

この「子どもらしくない子ども」の自分について、その成り立ちや影響について、C さん
は、〈だから〉という接続詞を使って語られた。

この〈子どもらしくない子ども〉の自分〈だから〉、人間形成の上で、ひずみになってい
るんじゃないかなって、自分を分析したときに思う、と。また、人間形成の上で、ひずみに
なっている自分〈だから〉、あ（詰まった感じの声で）なんか、心のなかでいつもお父さ
んが悲しむからとかね、やっぱり自分はいらぬ子だから迷惑かけたらいかんのだとかね、
〈がまんがまんがずっとあった〉。さらに、〈がまんがまんがずっとあった〉、〈だから〉、泣
くいうたらみなが寝てから枕を濡らして泣くぐらいで。認められるためには成績がよくな
かったらあかん ていう、なんか自己防衛みたい、と。さらに C さんは、〈だから〉、〈ああ、
幼児という成長段階でね、人間てひねくれてるように育ってしまうんかね〉と語られた。

ここにきて、C さんは、「泣くにまかせて、[……]、それが大事だと思っ
てらっしゃるんだなあ、と思っ
て」、というわたしの語りかけに
応えてくれた。〈だから〉、「孫にはもう、その自分をさらけ出す
くらい
のね、そういうあれがなかったら、やっぱりストレスとして、ど
ういうんかね（間）」、と。「やっぱりストレスとして、どうい
うんかね、（間）」のあと、C さんの話は、「へんな負けない根性
とかね、自分でも自分がかわいくないと思うことがあるん
ですよ。[……]」という、元の自分自身のことに戻った。

そこで語られた「同じ、一度しかない人生だったら、〈みんなにか
わいがられてね、ずっと
いきたいなと思っ
ても、その、できない自分がそこにある〉」ということばに、わたしは幼
児期から身についた自分への、C さんのどうしようもない深い哀し
みを感じた。〈みんなにか
わいがられてね、ずっと
いきたいなと思っ
ても、その、できない自分がそこにある〉そんな自分〈だから〉、
〈そのとき〉、「やっぱり人として不幸なん
とちがうかな」、と思っ
た。〈間〉は、「やっぱり人として不幸なん
とちがうかな」ということばが C さん
にのなかにおのずから生まれ出てくる、あえて言えば、生まれ
出てくるのを待つ〈ため〉の〈間〉を
表しているようだった。もちろん、C さんがそれを〈意識して
待っている〉のではないが。

このあと、C さんは、突然、「なんかね、だから」といい淀みながら、「やけどしたんです

よ」⁷⁹と、別の話に移った。わたしは、どういうことかな、とちょっと驚いた。しかし、Cさんは、躊躇するような「あの、その、なんか」といいつつ、「損な自分だなど思う自分がいやなん」と思う。いやならば「〈いや〉と言っているのに、それを口にはしない」。それなのに、Cさんは、「なんでわたしこんな立場に立たないかんのとか、うっぷんがたまる」、という。つまり、「〈いや〉といっているのに、口にはしない」で、「損な自分だなど思う自分がいやなん」と思いつつ、Cさんは、「なんでわたし、こんな立場に立たないかんのか」、それを、人にはいえない自分を語ってくれた。Cさん自身のなかで葛藤している自分を自分で見て、それを口にはしないけれど、それを、中西（筆者）だからいえることとしてCさんは語ってくれた。

「[……]、うっぷんがたまる」というCさんのことばを聴いて、わたしは、「自分でも言えばいいのにと思うんやけど言わない[んですね]と、いった。それに応えて、Cさんは、「それ言わなくて自分が無理して、[……]、損だなど思う自分がいや（間）、というより、やけどしたんですよ」、と、子どものやけどの話になった。「損だなど思う自分がいや」といったあとの〈間〉は、〈というより〉ということばが示すように、〈「損だなど思う自分がいや」という自分のことより〉、〈やけどした子どものこと〉が湧出した、というふうに、わたしには感じられた。「けっきょく、嫁の立場で、手伝わなければいけないと思って手伝っている隙に、長男がちり鍋をまともに被った。関節から顔から、ケロイドがあるんですよ。子どもをね、見てやってなかったからいう、その自分の負い目があるんですよ、未だに。そのときね、子どもを犠牲にってしまったんちがうんかなって」。このことを、Cさんは、悔いが残るという感じで、語られた。「子どもを犠牲にした」という母の深い後悔の念が、二度の〈未だに〉ということばをとおしてわたしに伝わった。

本章のまとめ

開口一番、Cさんは自分のことをつぎのように語ってくれた。「あたしおいて母が再婚した、だからわたしは捨てられた子だと悪い考えをもっていた。でも、病気のお母さんを引き取って亡くなるまで面倒を看た。だからそれは、お母さんが自分のそばに来てくれて、自分が持っているしこりを取り除いてくれた。お母さんが自分の犠牲にならなくてよかった。お母さんはお母さんとして生きる道、精いっぱい生きたんだなあとそのときになってはじめて思えたんですよ」と。

〈いつもいい子でいなければいけないような感じで〉「いまだに覚えていますよね、〈なにげない一言ってあるんだなあーってね〉」「祖母の帰りがおそくて、いつも〈真っ暗ななかで〉育ったんですよ」。「もう一つ、一番のほんとに大事にしてたんは、〈お父さんを悲しませてはいけない〉、戦争で死んで、たった一人残された、いうのが」。「自分ががまんしてたでし

⁷⁹ やけどの話は6行後につながっていく。

よう？ お父さんが早く戦死して、おじいちゃんおばあちゃんに世話になりながら、〈一番残念なのは、自分が子どもらしくない子どもだったこと〉。」

見だしにした C さんのこれらのことばは、深い哀しみでもあり、それをのり越えたたくましさにあふれた C さんを、象徴的に描きだしている。それは、わたしのこころ奥深くに刻み込まれた。自分の生い立ちともいえる出来事を、どのような思いで語られたのか、わたしは不思議に思った。そうしたいなにかが C さんにあったにちがいないが。

結論

本論の目的は、語るとはどういうことか、聴くとはどういうことかを検討することであった。

Cさんが語ってくれたのは、病いの子どもの苦しみと歓びの体験についてであった。それらをCさんは、「頭がおかしくなる」や「入れ代われるもんなら代わってやりたい」などのことばで表された。Cさんに現れたこのようなことばを、わたしは創造ととらえた。

「頭がおかしくなる」ということばは、子ども苦しみをCさんが語っているそのなかからとつぜん、口から飛び出すように「意味的意図が発生状態で見いだされた」ことばであった。それはCさんに意識されたものではない。「〈話すことで、子どもが病いにかかったことで、話を聴いてもらうことで〉、自分が〈こうありたい〉願う、指針・道が方向付けられた」とCさんは語られた。

Cさんのことばを聴くとき、わたしはCさんが言葉だけではなく、訴えるようないい方や自分の身体によっても意味を表現するのを見た。それは、Cさんが、ことばでは表しきれない体験の意味を、可能な限り率直にありのままに語ろうとするときに現れる所作のようであった。それらの所作は、言葉以上に、その意味をよく表すのをわたしは、いつも感じていた。このような経験から、わたしは音声的、身体的所作に現れる意味を重視するようになり、それらの所作を見逃さないようにした。その所作は、「語る人に一つの人間的意味を対象にあたえた」。またその所作は、語る人の「思想の源泉、Cさんの根本的な存在の仕方」を表していた。

わたしはCさんの言葉を聴いているとき、エッ、オヤッという感覚を覚える。この感覚は、わたしが現に見ているものの向こうになお存在があることを[……]、感知できる存在ばかりでなく、さらにどんな感覚によっても汲みつくせない対象の深みがあるということを感じさせる。Cさんのことば、そこになにが起こっているのか、見よう、聴こう、触っても見よう、わたしに感じさせる。その感覚が、わたしに「どういうことですか」と問わせた。そのとき、Cさんは、わたしが思いもかけなかった、病いの子どもの厳しい現実を語ってくれた。対話のなかでは、このオヤッという感覚が、ときに想像を超えるなにごとが起こりうることを明らかにした。

Cさんの話を聴いているとき、わたしは、Cさんのことばを聴いている自分自身に違和感を感じることがある。Cさんの語っていることばの意味が、わたしに最後まで聴き取れなかったとき、これはどうしたことか、疑問となる。こんなとき、わたしは、自分の方に目を向け、自分を見直す。それはわたしに、Cさんの話を聴いているわたしを見ていなかった自分を気づかせた。わたしにとっては、聴くということは、聴いていない自分を知ることでもあった。

ところで、ことばはなにをしてくれるのだろうか。たとえば、Cさんがだれかに話をしているとき、言葉はなにをしようとしているのか、わたしは疑問をもった。ことばは固有のも

のであって、ことばは意味をつくり、それを伝達する。C さんのことばを聴き理解しようとするわたしは、伝達だけではなく、語っているうちに C さんのもっとも個人的な部分で結びついていくのであった。C さんとの対話では、ただ伝達するためだけではなく、語っているうちにとつぜん思いもかけないあらたなことばが生まれ、そこに拡がった新たな世界を見せてくれたのだった。ことばはあらたな世界を見せる、そのためでもある、とわたしには考えられた。

インタビューの最後に、わたしは C さんに聴いた。「なにか気づいたこと、自分がなにか変わったなどと思ったことなどありませんか」と。C さんはつぎのように応えてくれた。「話すことで、聴いてもらうことで、わたし自身が〈こう在りたいと願う指針・道が方向づけられた〉と。その意味は、「もっと人生には深いもんがあるんだよ」「美しい花を見て、ただ美しいだけではない。美しい花は、いろんな人のアイディアや自然の恵みを受けながら、いま咲かしている。いままでやったらただ単に感激するだけだったが、いまは N さん〔筆者〕とお話することで、自分自身がこう在らねばという指針が方向付けられた」、と。

C さんに現れたことばは、他者とのかかわりのなかから見いだされたものであった。C さんが人間の価値や生きていることの意味を見いだしたのは、「海外旅行行ったら」という、他者のことばがあったからであった。また、わたしがこの論文で取りあげたすべてのことばも、C さんとわたしとのあいだから生まれたことばであった。また、インタビューの最初から最後まで、C さんが語ってくれたことばは、C さんとわたしのかかわり合いから湧出したことばであった。

C さんがなにごとかを語っているとき、「自分のいいたいことが言えた」と思われたとき、それは C さんにとって、とてもいい時間だったであつたでしょう。少なくとも、わたしはそうあつてほしいと願っていた。C さんの話を聴いているとき、わたしは驚きながらも、感動し、わくわくする感じが湧き起るのを禁じ得なかった。それはわたしにとって、感謝であり、悦びであった。

C さんが自分の体験を、このように率直に語ってくれた言葉がなかったなら、そもそもこの論文は、生まれていなかったでしょう。

先行研究のこのような記述にたいして、ここで記述した結論部分において、なにかわたし特有の記述があるのだろうか。あるとすれば、それは、以下に記述した病いの子どものともも生きた母 C さんの話を聴くなかから現れたことばと所作である。ここで述べたのは、結論のなかのポイントを箇条書きにした。

・C さんの、「頭がおかしくなる」や「入れ代われるもんなら代わってやりたい」などのことばで表された。C さんに現れたこのようなことばを、わたしは創造ととらえた。

・「頭がおかしくなる」ということばは、子ども苦しみを C さんが語っているそのなかからとつぜん、口から飛び出すように「意味的意図が発生状態で見いだされた」ことばであった。〈話すことで、子どもが病いにかかったことで、話を聴いてもらうことで〉、自分が〈こ

うありがたい) 願う、指針・道が方向付けられた」ということばのように。

・Cさんがことばだけではなく、訴えるようないい方や自分の身体によっても意味を表されたのを見て、語る人に一つの人間的意味を対象にあたえた音声的身体的所作の意味を重視するようになった。

・オヤッという感覚が「汲みつくせない対象の深みがあるということ」を感じさせ、その感覚が、わたしに「どういうことですか」と問わせた。

・Cさんの話を聴いているとき、わたしは、Cさんのことばを聴いている自分自身に違和感を感じ、自分の方に目を向け、自分を見直した。それは、Cさんの話を聴いているわたしを見ていなかった自分を気づかせた。

ことばは固有のものであり、ことばは意味をつくり伝達する。それだけではなく、語っているうちにとつぜん思いもかけないあらたなことばが生まれ、新た世界を見せてくれる。

これらのことばや所作を、あえていえば先行研究に対するわたしの独自性といえるのかもしれない。

謝辞

いまふり返って見ますと、どれほどに多くの方々を支えていただいたことでしょう。

堀江先生には4月に入ってすぐ、原稿を見ていただくようお願いしました。数日後その原稿をパラパラ見ながら、こころ温まるコメントをいただきました。なんだかほっとした気持ちになり、あらためて論文に向かう力をいただきました。また、論文申請書類のことで事務局に同行いただきました。短い期間でありましたが、こころから感謝します。ありがとうございました。

浜渦辰二先生には長きにわたって多くのことを教えていただきました。生きることの根本である生老病死の講義では、わたしのこころの奥底にあるものを引き出していただきました。ケアの臨床哲学研究会では脳死後の臓器提供の意思表示について議論しました。現場での判断如何によって左右される、その重さを実感しました。『デカルト的省察』の読書会は、新鮮で興味深く印象に残るものでした。論文の指導では、多くの時間を割いていただきました。指導は適切で詳細にわたっていました。ありがとうございました。

中岡成文先生には、『ゲシュタルトクライス』を、大北全俊先生を交えて読んでいただきました。先生お二人とわたし、それは贅沢な読書会でした。「生命は存在者的なる者のみにかかわるのではなく、パトスのなるものでもある」。これは印象に残ることばでした。短い時間でしたが〈哲学塾〉に参加させていただき、そこで、先生の生き方を見せていただいた気がしました。本間直樹先生の講義は型にはまらない自由なもので、面白みがありました。先生には「p4c」という議論の仕方を学びました。議論が迷路に入り込むことを避けるいい方法だなと思いました。本間先生には、何度も論文の指導をしていただきました。また、入学当初、メルロ=ポンティの読書会にも参加させていただきました。大北先生は臨床哲学研究会での発表原稿を見ていただきました。原稿作成にあたっての考え方などもご指導をいただきました。稲原美苗先生には、当事者研究だけではなく、相談にも乗っていただきました。お二人にただようほっとする感じが、わたしや他の学生を研究室に呼び込んだのでしよう。ありがとうございました。

臨床哲学研究室では学生だけの読書会がありました。メルロ=ポンティの『知覚の現象学』の読書会のチューターは、川崎唯史さんでした。正置友子さん、川崎晴香さん、赤阪辰太郎さんなどがメンバーで、実り多い読書会でした。川崎さんには、論文で引用するメルロ=ポンティのテキストの理解を助けていただきました。川崎さんのこのサポートがなかったら、論文を完成することはなかったでしょう。こころから感謝します。研究室に行くと、いつも桂ノ口結衣さんの姿がありました。挨拶するだけでしたが、ときに、育児の話など話され、素敵な女性だなと思っていました。楽しい時間でした。ありがとうございました。

阪大に入学する以前の先生方にもお世話になりました。林信弘先生（立命館大学大学院）には、研究の指導だけでなく、みんなで食べる飲む楽しみを共有させていただきました。中

川良晴先生は、教育クラスター担当でした。先生には研究方法についてご指導をいただきました。現象学のテキストを、ハイデガールの『存在と時間』にするか、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』にするか、相談に乗っていただきました。『知覚の現象学』を選びました。それがいまにつづいています。インタビューという方法の実際を、心理研究室の藤信子先生に教えていただきました。インタビュー後の逐語記録も見ていただきました。榊原哲也先生（当時は立命館大学）とは、ベナー／ルーベルの『現象学的人間論と看護』を読み、ここではじめて現象学という言葉を目にしました。曲りなりにメルロ＝ポンティのテキストを参考にして、論文を書きました。榊原先生の講義に、『語りかける身体』の著者である西村ユミ先生（当時は大阪大学）が参加されたことがありました。このようなかかわりから臨床実践の現象学研究会に参加させていただくことになりました。ここでは、現場で活動する人の発表が多く有意義な場でした。ありがとうございました。

加國尚志先生（立命館大学）の、『知覚の現象学』の講義に参加させていただきました。わたしは英語で一フランス語はできませんので一参加しました。また、加國先生には、大阪大学に「臨床哲学専門分野」の存在を教えていただきました。加國先生のこのことばがなかったら、いま、この論文を執筆することなど有りえないことでした。幸運としかいえないことでした。ありがとうございました。

立命館大学では、自分に気づききっかけを作ってくれた岡本陽子さんがいました。ある出来事があって、頭がいっぱいで、岡本さんに話を聴いていただきました。岡本さんは黙って聴いてくれました。その後、わたしはなんのこだわりもなく、爽快な気分で論文に向き合いました。論文は、その時点では、少なくともわたしにとっては、納得のいくものでした。（このことは、修士論文に記述しています）。ありがとうございました。

このような方たちと交流できる土台を作ったのは、さかのぼれば、もうずっと前に亡くなられた慶應義塾大学 哲学教授の沢田允茂先生でした。大勢の学生が先生宅に押し寄せ、学生にとっては楽しいサロンでした。先生から学んだのは、一人の人間としての生き方でした。ありがとうございました。

研究参加者としてインタビューに応じていただいた C さんには、感謝しても感謝しきれないほどのご協力をいただきました。月に1回、1時間、5回、ご自宅に訪問させていただいてのインタビューは、ご迷惑な点もあったかもしれませんが、でも、1回目から5回目まで、終始こころよく話していただきました。このような C さんの話しぶりに、わたし自身がこころおきなく聴かせていただいたのでした。C さんのお話がなかったら、この論文ははじめから成り立たないところでした。ほんとうにありがとうございました。

最後に、長いあいだ支えてくれたのは夫の克雄さんです。克雄さんは大学で自由に学ぶことを許し、積極的に後押ししてくれました。これからは、いままで支えてもらった分、返していきたいと思っています。彼の支えによってわたしは、論文の完成をみぞすことができました。ほんとにありがとう。

引用文献一覧

- アーサー・W・クライマン 江口重幸他訳『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、(1996)。
- アーサー・フランク 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手』ゆみる出版、(2002)。
- E.ウィーデンバック 外口玉子・池田明子訳『臨床看護の本質—患者援助の技術』現代社、(1969)。
- 池川清子『看護 生きられる世界の^{フロネーシス}実践知』ゆみる出版、(1991)。
- 神谷美恵子『極限の人—病める人とともに』ルガール社、(1973)。
- 木田 元他編集委員『現象学事典』弘文堂、(1998)。
- 木村 敏『臨床哲学の知—臨床としての精神病理のために』洋泉社、(2008)。
- 木村 敏『自己・時間・あいだ』ちくま学芸文庫、(2006)。
- 木村 敏 坂部 恵 監修『〈かたり〉と〈作り〉—臨床哲学の諸相』河合文化研究所、(2009)。
- 榊原哲也「焦点 現象学的研究における〈方法〉を問う」『看護研究』、(2011)。
- 佐藤泰子『苦しみと緩和の臨床人間学—聴くこと語ることの本当の意味』晃洋書房、(2011)。
- J.トラベルビー 長谷川 浩・藤枝知子訳『人間対人間の看護』医学書院、(1974)。
- 中西チヨキ「特集 看護と理論図と実践の水準—Part II 看護者であり自己であるための基盤」『ナースステーション』医学書院、(1981)。
- 中西チヨキ「実習における学生の行動の変化—看護技術授業及び演習の関係」『日本看護学会看護教育分科会誌』、日本看護協会出版会、(1980)。
- 西村ユミ『語りかける身体—看護ケアの現象学』ゆみる出版、(2011)。
- 浜渦辰二「ナラティブとパースペクティブ」、木村敏・坂部恵監修『〈かたり〉と〈作り〉臨床哲学の諸相』河合文化研究所、(2009)。
- H.ペプロー 小林富美枝他訳『人間関係の看護論』医学書院、(1973)。
- F. ナイチンゲール 湯植ます他訳『ナイチンゲール著作集第二巻』現代社、(1974)。
- V.フォン・ヴァイツゼッカー 木村 敏・濱中淑彦共訳『ゲシュタルトクライス』みすず書房、(1974)。
- ベナー／ルーベル 難波卓志訳『現象学的人間と看護』医学書院、(2000)。
- M. メルロ＝ポンティ 滝浦静雄・木田 元訳『世界の散文』みすず書房、(1979)。
- M. メルロ＝ポンティ 竹内芳郎他訳『知覚の現象学1』みすず書房、(1967)。
- M. メルロ＝ポンティ 竹内芳郎他訳『知覚の現象学2』みすず書房、(1974)。
- M. メルロ＝ポンティ 滝浦静雄・木田 元訳『眼と精神—幼児の対人関係』みすず書房、(1966)。
- M. メルロ＝ポンティ 竹内芳郎監訳『シーニュ1』みすず書房、(1969)。
- 村上靖彦「看護の語りの現象学」『摘便とお花見—看護の語りと現象学』医学書院、(2013)。
- 柳田邦男『いのち 8人の医師との対話』講談社、(1986)。
- 鷺田清一『「聴く」ことへの力』阪急コミュニケーションズ、(1999)。